
転生者は同性愛者

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は同性愛者

【Nコード】

N8086W

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

神の手違いによって死んでしまった同性愛者の少女がテイルズオブエクシリアの舞台であるリーゼ・マクシアに転生して原作を破壊するお話。本人はエクシリアをプレイしたことが無いので何も考えず、思ったままに行動します。それでも良いという方はどうぞ。

始まりは雪の森から

やあやあ、皆さん！はじめにちは！あるいは、はじめばんわ！

早速ですが死にました！え、無駄に明るくないかって？性分だから仕方ない。

高校で1学期の終業式が終わってからコンビニで肉まんを買おうとしたらさ、トラックが突っ込んできて見事に轢かれちゃったのさ！そんで目が覚めたら真っ白な空間に浮いていた。今の所この空間にはあたししかない。

「いるよ？」

居た。

誰でしょうね？この青年は？あたし男には興味ないんだよね・・・女の子としか付き合ったこと無かったし。相手に理由を聞いてみたら小さくて可愛いし、それに反して偶に格好良い所があるのが良いんだってさ。あたしも女の子が好きだから良いけどね？

そう言えば、別れも何も言えて無いのか・・・まあ、当然だよな？人間、自分がいつ死ぬかなんて予想付かないし、今日死んだのだってあたしだけじゃ無いだろうし。

でもせめて一言言ってから死にたかったな・・・今までで一番相性の良い相手だったし。

とりあえず話を戻しましょうかね？

「君、だれ？」

「まあ、神かな？君は僕の手違いによって死んでしまったんだ……すまなかった」

そう言っただけで頭を下げる自称神。あたし神なんて信じて無いから……。

「謝られても、もう死んだんだから意味無いでしょ？それより、あたしはこれからどうなるの？」

あたしの言葉を聞いて、神は顔を上げた。それからあたしのこれらについて簡単に説明を始めた。

どうやらあたしはこれから別の世界へ生まれ変わるみたいだ。所謂転生ってやつ。それと、お詫びにいくつかの力をくれるって言っているけど、別にそんなもの欲しいとは思わないしな……。

「これから行く世界って、力が無いと危険なの？」

「ああ、魔物なんかがつようよしてるからね……。中には巨大なもの居るし、何の力も無かったら一瞬で殺されてしまう」

それは嫌だな……。折角転生したのにすぐに死にました、なんて何の意味もないじゃん。

「じゃあさ……。適当にその魔物やら何やらに負けない力をくれないう？それなら大丈夫でしょ？」

「……君がそれで良いなら良いけど。そんな適当で良いのかい？」

「だって、あたしそんな力とかに興味無いもん。ハッキリ言って転生も良い迷惑。わざわざそんな、力が無いと危ないような世界に行ってもさ……」

ゲームなんて16年間生きてきて(死んだけど)本当に数える程しかしていない。でも、今の彼女がゲームが好きでそれをしているのを膝の上で見ていたけど、なんかよく分かんなかった。

りんく……とか、なんとかおーぶとか……りで始まる単語多いなって印象しか無い気がする。あ、でもオープニングの映像と最初の映像はとても綺麗で格好いいなって印象もある。

ゲームの女の子って可愛い子ばかりだよな? 実際にあんな子がいたら良いのに……。

「そうか……だが、こちら仕事なんだ」

「わかってるよ……迷惑とは言ったけど、また生きることが出来るならそれでいい。自分でも少し矛盾したことを言っているきはするけど……。」
もう転生出来るの?」

「ああ。何かやり残したことがあるなら、可能な限りで叶えられるよ?。」

やり残したこと……それなら

「……やっぱいいや。余計に悲しませちゃうかもしれないし」

聞こえないようにぼつりと呟いて、神に向き直った。

「いいよ、転生させて?」

「分かった。力は使い方が分かるようにしておくから、成長したら練習を始めるといい」

「あ、ちょっと待って?」

転生をさせようとする神に待ったをかけて気になったことを尋ねる。

「何だい?」

「これから行く世界って何処なの?」

「そうだった。それを言っただけだったね。君がこれから行くのは

」

名前くらいは知っておかないといけないよね?

「リーゼ・マクシアだ」

あれ?なんか聞いたことある気がする・・・何処だっけ?ホントについ最近聞いた気がする。

んゝ・・・喉元までは出かけてるんだけど・・・駄目だ出てこない。そう言えば昔からあたしって諦めが早かったっけ。

大丈夫かな?

「まあ、いつか・・・それじゃよろしく!」

「ああ。元気でね？行ってらっしゃい」

「行ってきます！」

あたしは光に包まれた。

そして、次に目を覚ますと凄い違和感が・・・手を見てみるとすごい小さい。

「あう・・・？」

声を出そうとしたら言葉では無い音が発せられた。どうやら一からのスタートみたいです。

「ん？おお、目が覚めたか？」

いきなり上空から声が降ってきて、見ると優しそうなおつきいおじさんが居た。周りには狼の様な生き物が数匹。今気付いたけど此処は雪に覆われた森の中で、あたしはどうやらこのおじさんに抱えられているみたいだ。髭が凄いね？

「こいつらから子どもを見つけたと聞いた時は驚いたが・・・まさか、赤子とはのお。よく生きておったものだ。・・・なんにせよ命に別状が無くて良かったわい」

あたしも良かったかもしれない。こんなに優しそうなおじさんに助けられて・・・。

「それにしても、こんなにも小さな子をこの森に捨てるとは、非道

い人間が居るものだ……。当面は儂が面倒を見るとして、いつかは本当のことを言わなければいけないのお」

いいよ？別に……。あたしに親は居ないみたいだし、強いて言うならあの神かもしれないけどもう二度と会うことは無いだろうから。そんな、悲しそうな顔をしないでいいんだよ？

しばらくして、この揺れているのが心地よくなったのかあたしは眠ってしまった。

「すう〜……。すう〜……。」

「眠ったか……。ゆっくり休むと良い。これから暫く、よろしくのお」

思えば……。今日この日からこの世界が辿る運命は変わったのかも知れない。

あたしの介入によって……。

主人公紹介

名前：プリムラ

年齢：11才

身長：137?

体重：言いたくないだそうです

髪色：雪の様に白く腰近くまで伸ばしているものを首の辺りで束ねている

瞳：澄んだ青

装備：アイアンリスト

レザーブーツ

ピヨノン

服装：半袖の上にパーカー

ミニスカート

ジャオから貰った帽子とマフラー

森でジャオに拾われ育てられ、2〜3才頃になってから力の訓練を始める。魔物ともよく遊んでいたため言葉を理解出来る様になった。9才になった時、突然独り立ちをしようと思いい立ち荷物を準備してジャオに行つてきますとだけ言つて世界を回る旅を始めた。その過程で様々な人と出会い様々なものを目にした彼女は11才とは思わせない雰囲気纏っているが性格には何の影響も無く、転生前と同じで明るい。

こんな感じですよ。

今日から旅に出ます！

森で拾われてから5年が経った。今、あたしはお父さんと一緒にガイアスおじちゃんの所に来ている。結構仲良いんだよね・・・おじちゃんが王様だつて知った時は驚いたけど。

力については多分あたしの要望通り負けるようなことは無い力だと思ふ。戦闘は2才になった時から訓練を初めて少しは使えるようになってる。闘う度に力が強くなっている感じがするから、多分闘った分だけ力が上がって行つてるのかも知れない。

ちなみに武器は素手。この地方は結構寒いみたいだけどあたしは平気だ。

子供は風の子つてね！

「それにしても元気過ぎるのでは無いか？それに油断していると、いつか風邪を引いてしまうぞ？
ジャオ、気を付けておけよ？」

「うむ。儂も日頃から言つてはいるのだがのお・・・本人は至つて元気なのでな」

「それは見れば分かるのだがな・・・」

「お父さん、暇だから遊んできてもいい？約束もしてるし」

此処に来てからずっと話しばかりで疲れる。それに火とかあるから中途半端に熱を感じて何となく居心地が悪いし・・・雪の中で走り

回ってる方が楽しい。

「む？また、近辺の魔物と遊ぶのか？構わんが儂も出かける用事があるから、先に外で待って居てくれるか？直ぐに行くのでな？」

帽子の上から大きな手であたしの頭をなでてくるお父さん。これは結構好きだ。

「ふふ・・・分かった。出来るだけ早く来てね？」

「ああ」

「それじゃ、おじちゃん。またね？」

手をひらひらと振って挨拶をするとおじちゃんも返してくれる。

「ああ。先も言ったが風邪を引かぬように気を付けるのだぞ？」

「はい」

あたしは城の外に行った。

すると上から誰かに名前を呼ばれて見てみると、

「ウィン兄ちゃん！」

お父さんと同じくおじちゃんの部下の一人、ウィン兄ちゃんが居た。少し意外だな・・・いつもはおじちゃんの隣に立ってるのに。来たときから居なかったから何か用事があるのかな・・・とは思ってたけど。

「また遊びに行くのか？」

屋根から軽く飛び降りてきたウィン兄ちゃんに聞かれてあたしは答える。

「うん。お父さんも何か用事があるから先に外で待ってるって言われたから、待ってるの。ウィン兄ちゃんはも何か用事？」

「いや、そう言う訳では無いがな・・・それにしても相変わらず寒そうな格好だな？」

あたしの服装を見たウィン兄ちゃんにそう言われて、あたしも自分の格好を試してみる。

半袖にパーカー。

ミニスカート。

「あたし別に寒くないよ？それに、帽子とマフラーは暖かいし。プシ姉の方が余程寒そうじゃない？」

「・・・言われてみればそうだな」

「でしょ？」

それからお父さんが来るまで最近のことを話して時間を潰した。お父さんが来たのは2時間後。

「もう！時間掛かりすぎ！」

「済まぬ。ウインガルも」

「構わん。ではな、プリムラ？風邪には気を付けるよ？」

ウイン兄ちゃんはそれだけ言って、城の中に入っていった。

あたしとお父さんはモン高原に向かって進み、そこでお父さんと別れてあたしは早速遊ぶことにした。

「みんなー！遊ぼー！」

大声で呼ぶとみんな集まってくる。この高原に住んでいる魔物たちはもうみんな友達だから、こうやって呼べば一斉に来てくれる。偶にバキユラって言うひたすらくるくるしてる魔物居るけど、今日は居ないみたいだ。あの子にしがみついて一緒に回るの結構楽しいんだよね。

それから日が暮れるまで遊び尽くし、今日はスノウドラゴン達と野宿をすることにした。あたしは基本野宿しかない。流石に2〜3才の時はお父さんが許してくれなくて家の中で寝ていたけどね？

野宿をするとき、みんなもあたしが風邪を引かないように心配してくれているのか、寄り添って寒くないようにしてくれる。

お父さんも暖かいけど、みんなも暖かい。

翌朝あたしは一旦カン・バルクに戻った。お父さんはまだ帰ってきて居ないみたいだから、今日は遠出は出来ないかな？

遠出と言つか、みんなと遊んだりする時は必ずお父さんに言っ
てから行くよう言われているから、不在の時はとりあえず何かすること
を見つけて、時間を潰して過ごしている。

今日も同じようにそうして過ごしたけど、お父さんは帰ってこなか
った。おじちゃんの所に行って聞いたみたらあと1週間は帰ってこ
ないだろうとのこと。今までそんなに長い仕事は無かったのに・・・

仕事なら仕方ないか・・・おとなしく自主練しておこう。

とりあえず今日は寝ることにして、簡単な夕飯を食べてから片付け
をした後、歯磨きをしてお風呂に入り眠りに着く。

それから昨日と同じように過ごして今日で1週間目。

やっとお父さんが帰ってきた。

「お父さん！お帰り！」

「おお。プリムラ。済まなかったな？1週間も家を空けてしまって」

「うっん！」

「詫びに何かして欲しいことや欲しいものがあつたら言ってくれて
構わんぞ？」

うっん・・・。

「特にそう言うのは無いかな？」

「そうか？」

「うん。あ、じゃあ一緒にみんなと遊ばない？久しぶりでしょ？」

「む、そうだな・・・たまにはそれも良いかもしれぬな？では行くか？」

「はい！」

準備をしてモン高原に向かいお父さんと一緒に1日中遊び尽くした。

その日から更に4年。

この4年間、お父さんは長い仕事に就くことが多くなった。でも今はあたしも4年前より大きくなったから、お父さんがいない時でも外でみんなと遊んで良いと言われたから、今日も遊びまくっている。なんかこう言うと、仕事を何もせずに只遊んでいるだけみたいだな？

ま、いいや・・・。

それはそうと、最近もつと遠くへ行きたいなと思いはじめた。もつと別の場所も見てみたい。転生前は確かに高校生だけど、今は子供だからそういう未知に関することに凄く興味が向いている。

「よし！決めた！」

みんなは不思議がっているけど、気にしない。

それから3日後、お父さんが帰ってきたのであたしは準備していた物を手に持ってから言った。

「お父さん！あたし今日から旅に出る！行ってきます！」

「な！プリムラ！待たぬか！プリムラ！」

あたしは自分で言うのも何だけど足は結構速い。

お父さんには負けないよ！

それじゃ、またその内ね？9年間お世話になりました！

今度会う時はもう少し大きくなってから楽しみにしててね？

「行ってしもうたか・・・いつかはこうなると思っておったが、こんなにも急だとはのお。
結局、本当のことは言えず終いであったが・・・元気だな？プリムラ。」

次に会う時を楽しみにしておるぞ？」

二年間の軌跡

旅に出てから2年。短い間だったけど結構いろんなことがあった。シャン・ドウの闘技場を制覇した後に、船のおじさんに頼んでソグド湿原に送ってもらいニア・ケリアに向かった。

そこで、精霊の主が祀られていると聞いて、社の場所を聞き、参道を抜けて社に着き中に入ったらいすに座って目を瞑っている格好いい女性が居た。

「……ん？誰だお前は？ニア・ケリアの者ではないな？」

女性は瞑っていた目を開きあたしに尋ねてきた。あたしはそれを肯定して自己紹介をした後、簡単に事情を説明する。

「成る程。私はミラだ。ミラ・マクスウェル。しかし、凄いな……その年であの湿原を抜けてきたのか？」

「え？余り大したこと無かったよ？友達も一杯出来てむしろ楽しかったし……服はどろどろになっちゃったけど」

遊んだは良いけど、湿原で転がったりしたらこうなるのは当然だよな？後悔はしてないよ！

「それで、そんなに服が汚れているのか……お前達、頼む」

ミラがあたしでは無い誰かにそう言つと、ミラの周りに何か出てきた。

多分、村の人が言っていた四大精霊だと思う。出てきたと言つより、最初からそこに居て、主人の呼びかけに答えてあたしにも見える様にしたのかも知れない。

「プリムラ、服を脱げ。こいつらが洗濯してくれるからな？」

「え？いいの？みんなも？」

「俺もお前の服は汚れすぎていると思つていたのでな・・・」

「私事です」

「僕も」

「オイラもでし」

「それじゃ、よろしくね？」

服を脱いでみんなに渡すとまずウンディーネが一気に洗って、イフリートとシルフがお互いの力を混ぜて乾かした。一瞬だよ・・・。

ノームは出番なしでした。

「はや・・・」

「ほら、早く着ないと風を引いてしまつぞ？」

「あ、そうだね。んしょつと・・・」

只今着替え中。

「プリムラはこれからどうするかは決めているのか？」

「うん。とりあえず、道なりに進んでいくよ？」

「それは決めていると言えるのか？」

「……………」

「……………」

四大精霊の皆さんにまで呆れられてしまいましたとさ。ちゃんちゃん。

それからキジル海曝を抜けてハ・ミルに行ったけど、そこでは特に何も無かった。小屋が気になったけど鍵が掛かっついて入れなかったし……。近くに居た子どもに聞いても何も知らないの一点張り。仕方なくあたしは次にサマンガン街道を抜けてカラハ・シャルルへ…………。

そこではシャルル家の兄妹とその執事であるローエンと出会った。最初は中の良い兄妹と思っていたけど、まさか領主だったとはね、ビックリだよ。

「プリムラは次はどこへ行くの？」

今はドロツセルに誘われてクレインとローエンを交えて領主邸でお

茶をしている。何でも、珍しい茶葉を使っているとかで、とても美味しかった。

「えっと・・・ル・ロンドかな？」

「そこで何かあるのですか？」

「ううん。単に世界を回りただけ・・・特に目的は無いよ？この旅だって、育った場所以外の所をみたいと思って始めたものだからね・・・気ままに行くよ」

「大丈夫なのかい？確かにここまで一人で来たのなら問題は無いかも知れないが、君はまだ子どもだろう？」

「そうよね・・・プリムラって何歳なの？」

「9歳」

あたしがそう言ったら、

「ブツ！ゴホ！ゴホ・・・」

ローエンが咽せて、

「「9歳!」」

シャルル兄妹が仲良くハモったとき。ちゃんちゃん。

なんか気に入ったかも・・・。

ル・ロンドではレイアと会って仲良くなった。本物の方がやっぱり可愛いな・・・思わず抱きついたちゃったよ。1週間位お世話になって、その間に幼なじみの少年のことを聞いた。名前はジュード・マティスと言うそう。医者になるために、イル・ファンという街にある医学校に通っているらしい。

「プリムラも機会があったら行って見たら？旅をしているなら、その内行くことにはなるだろうけど」

「そうだね・・・ま、機会があったらね？それじゃ、もう行くね？お世話になりました」

「うん、また来てね？」

「うん。絶対に来る・・・レイアに会いたいからね？」

「え、あはは・・・なんか照れるな／＼」

「（やっぱり可愛い）またね？」

「あ・・・行っちゃった・・・。そういえばプリムラって何歳なんだろう？聞いてなかったな・・・」

今度はイル・ファンに向かった。

結構時間掛かったな・・・さすがに疲れた。ちなみに此処に到着する数日前に10歳になった。身長は変わらないけどね・・・。

それにしても、ここっていつも夜だからな・・・リズムが狂うかも。でも魔物達はちゃんと分かっているだろうから、聞いてみよう！

「ありがと！それじゃ今日は一緒に寝てもいい？」

頷く魔物。この子は友好的なようだ。

それからはずっとイル・ファンで生活して11歳になった。滞在している理由は何となく。彼女がこのゲームをしていたのはかなり最初の部分しか見ていないけど、この街から始まるっていうのは辛うじて覚えている。強いていうならそれが理由かな？

でも、日中（ずっと夜だけど）はひたすら外でみんなと走り回ったり、特訓したり、寝転がったり、寝たりしているからレイアの言っていた幼なじみの・・・えっと・・・ジュー・・・ス飲みたいな。喉乾いた。

宿にい〜ごうっと！

「みんなまた後でね？」

一旦別れを告げて宿に戻り飲み物を注文する。

「はいよ。今日も駆け回ってるのかい？」

「うん。その方が楽しいから。んく・・・んく・・・ぷは！それじゃ、また行ってきますす！」

「おう、気い付けてな？」

「はいはい」

宿を出てまた遊びに行く途中中学校から一人の少年が出てきて研究所の方に向かっていくのが見えた。まあ、いいや。

と思ってたけど、そういう訳にも行かないのかも知れない。

出口に着いた頃、この街イル・ファンの光が消えていった。

気になったあたしは、とりあえずさっきの少年と同じく研究所の方に向かった。

「あれ、居ない・・・もうどこかに行っちゃったかな？」

周りを見ても誰もいないし・・・帰ろうかな？

そう思っていると、不意に声が聞こえた。

「静かにしていると言ったのだが・・・」

この声って・・・。

聞こえた方に向かうと、水の上に立っているミラと、

「・・・」

水の中で頷いて居る少年が居た。

序章 物語は始まる

少年が頷くのを見て、ミラは少年を解放した。只、水の中に居たから盛大に咳き込んでいた。そこであたし参上！2人の中間辺りに飛び降りてミラに挨拶

「ミラ、ひさし・・・おわ！」

しようとしたらあたしが立っていた所の陣が消えて水に落ちてしまった。ウンディーネめ・・・何か恨みでもあるのか？

「もう・・・服濡れちゃったじゃん！何すんのさ！ウンディーネ！」

あたしがそう言うと、目の前にウンディーネが現れた。それは良いけど、笑ってるのが若干むかつく。いつか仕返ししてやる！

「すみません。久しぶりに見たら、何故か急に悪戯をしなくなりました。では」

「あ、待てこらー！」

残ってる足場に登っている途中で消えやがったよ！ずるくない！？

「覚えてろよ・・・。ふう・・・改めて、ミラ！久しぶり！」

「ああ、ほんとに久しいな。相変わらず小さくて可愛い奴だ」

挨拶しながら近づくと頭を撫でられた。この感覚も久しぶりだな・

・お父さん元気にしてるかな？当分、というかいつそのこと帰らなくてもいいかな？・・・とか、最近思っているけど、今度戻ってみようかな？うん、そうしよう。決定！

「えっと・・・ねえ、君たちは何をしようとしているの？」

黙っていた少年が気まずそうに聞いてきたけど、あたしは目的なんて分からないからね？

「ん？おお、そうであった。ジンを破壊せねば。プリムラ、会えて嬉しかったぞ？ではな？君も早く帰るといい・・・」

ミラは最後に少年にそれだけ言って、（多分イフリーストの力で）こじ開けて出来た入り口から中に入っていた。その背中を見送ってから、少年の方を見ると戻る足場が無くなってきているから進むしか無いようで、あたしにちらりと視線を送ってから中へ入っていた。

「あたしもい〜ごうつと！うわー！」

・・・ウンディーネえ〜・・・ほんとに恨むぞ？

〜SIDEOUT〜

〜SIDEミラ〜

「！」

「どづした、ウンディーネ？」

つい先ほど兵士を倒し、奥に向かって進んでいるとウンディーネから驚いた様な気配が伝わってきた。気になって聞いてみると、

「いえ、なんだか寒気を感じまして・・・永い間精霊として生きてきました、こんな感覚は初めてです」

「精霊でも寒気を感じたりするのだな？初めて知ったよ」

私もウンディーネ達とは永い時を共に過ごしてきたが、そんなことは今まで無かったからな・・・他の皆はどうなのだろうか？

「お前達も寒気を感じることはあるのか？」

「俺は火の大精霊だからな・・・まずそんなことは無いと思うが・・・」

まず答えたのはイフリート。まあ、もつともだな・・・。

「僕はないね・・・ていうか、ウンディーネは水の大精霊なのにとっして寒気を感じるのさ？」

次にシルフ。まあ、これももつともだ・・・。

「オイラはないでしょ？」

次にノーム。何と言えはいいのだろうか？

まあ、いいだろう。

「いえ、寒気と言うよりは悪寒、と言った方が正しいのかも知れま

せんね？少々悪戯が過ぎたでしょうか？」

「また何かしたのか？」

イフリートがそう聞き、ウンディーネは

「ええ・・・プリムラが足を乗せたら解除するように微精霊の頼んでいたのですが」

「十中八九それが原因でしょ？」

「余り、からかうで無いぞ？プリムラに実力は少ししか見ていないが、2年前ですら強大だったのだ。下手をするとお前達でも敵わないかも知れないぞ？」

年は聞いていなかったが、恐らく10歳にも満たなかったであろう少女が手加減をしたとは言え、イフリートに勝つことは出来なかったが、善戦したのだからな・・・あの時は驚いたよ。だが、それと同時に成長が楽しみでもあったな・・・いや、そちらの方が大きかったかも知れぬ。

機会があつたら闘つて見るとするか・・・全力でな。

私は奥に向かった。

〈SIDE OUT〉

〈SIDE プリムラ〉

「服は後で乾かすとして、今は2人を追いかけてみよう。勘で行け

ば着くでしょ」

適当に進むとなんか兵士が倒れていた。死んではいないみたいだね？気絶してるだけだ。

まあ、ゆっくりお休み〜・・・。

進むと今度は梯子の所で兵士が倒れていた。一応生きているかどうかを確かめる。OKっと。

「行きますか」

登るとなんかでっかい施設の中に出た。外から見ても大きいとは思っていたけど、中がこれ程広いとはね・・・お嬢ちゃんはビックリだ。

あれ？あたしが小さいから余計にそう感じるだけなのかな？

「べ、別に気にしてないよ？まだまだ成長期だからね・・・これからぐんぐん成長するのさ」

誰にともなく言い訳をする。

・・・空しいな。

「はあ・・・」

溜息をついて研究所の中を進んでいると、いきなり凄惨な音が聞こえた。何だろうと思いつつ、出所を探っているとミラと少年が2階にある左の部屋から出てきた。

声をかけようとしたら、ミラの胸元、少年のポケットが光始めた。それを取り出して、何か説明する少年。暫くしてミラは理解したように、また歩き始めた。

「やつほー、お二人さん！あたしも混ぜて？」

「プリムラ・・・来たのか？」

「うん。ちょっとウンディーネにも用があつてね？フフフフ・・・」

「プリムラ、今はとりあえず待つてくれないか？本人は怯えてるし今は優先させることがあるのでな」

「ん？さっき言つてた、ジンつてやつ？」

「ああ・・・それを破壊したらいくらでも相手をさせてやる」

それならいつか。

「分かった。それじゃあたしもついてくね？待つてなよ、ウンディーネ？」

あたしは根に持つタイプだからね？

「本気で怯えてるから止めてあげてくれ・・・」

「ねえ、ミラ、この子は？」

「ん？自己紹介してないのか？」

あたしに聞いてくるミラ。

「自己紹介も何も、その少年があたしには何も言わずに進んでいったからね・・・聞く暇なんて無かったし、何より・・・」

「何より?」

「ウンディーネの所為でまた落ちたからね?その分遅れちゃったんだよ」

「・・・」

沈黙する2人。

「とりあえず自己紹介ね?あたしはプリムラ。よろしく」

そついつて手を差し出すと少年も名乗りながら手を差し出してきた。

「僕はジュード・マティス。よろしくね?」

「ん?ジュードってことは・・・レイアの幼なじみって君?」

「え?レイアを知ってるの?」

「うん。レイアの所の宿にはお世話になって、その時に・・・あ、元気だったよ?」

「そっか・・・良かった」

「そろそろ良いか？」

「「あ、はい」「」

これ以上ここで立ち話しているとミラが怒りそうなので進むことにします。

それから更に奥へ進んでいくと鍵が開いている部屋を見つけ、その部屋に入った。

そこにはでっかい大砲みたいな形をしている黒い物体があった。これがジンなのかな？こんな破壊で出来るの？

ジュードが何やら操作して画面に出てきた文字を読み上げた。

「クルスニクの槍。創世記の賢者の名前だね」

次にミラを見ると、腕を回して左右に振った後、上下に振った。すると姿を見せていなかった四大精霊が召喚された。

「ウンディーネえ〜・・・さっきはよくもやったわね？後で覚悟しときなさいよ？」

「・・・何のことだが分かり」とぼけるってことは認めるんだね？「・・・」

「俺は知らんぞ」

「僕も」

「オイラもでし」

結構薄情だね？みんな。邪魔されないならいいか・・・フフフフ・・・。

「頼むから後でな？」

「分かってるって・・・」

「よし。やるぞ！人と精霊に害成すこれを破壊する！」

ミラがそう言うと同時に四大精霊は飛んでいきクルスニクの槍を四方から囲んだ。ミラが力を込めるとみんなは槍の上空に陣を作った。

そして、破壊しようとした時、誰かが槍を機動させた。

その人は・・・

「アグ姉！」

アグ姉だった。

「な！プリムラ！どうしてお前が此処に居るんだ！ぐ・・・」

「アグ姉！しっかりして！くっ」

槍の力なのかマナが吸収されていく。勿論マナの塊である四大精霊達にミラとジュード。起動させたアグ姉。この場に居る全員からマナを吸収してる。

立ってられない・・・。

「ミラ！下！」

ジュードが叫ぶ声が聞こえて何とかミラを見てみると、槍を機動させている物なのか、それを取ろうとしていた。

その時、四大精霊の声が聞こえた。

「プリムラ、ミラを頼んだぞ？」

「僕たちは一旦お別れだ。元気でね？」

「久しぶりに会えたのに残念ですが、仕方無いでし……」

「プリムラ、悪戯をしてすみませんでした。ミラのことを頼みます」

「え……？何言ってるの、みんな？」

あたしの問いかけにみんなは小さく笑っただけで、次の瞬間力を解放した。

「きゃあー！」

「うわー！」

その時の衝撃によってあたしとジュードは吹き飛ばされ通路に倒れた。でも今度はその通路が崩れ始め、あたし達は何とか掴む所を見つけてぶら下がった。ミラは何かを持っていて、それをしまいシルフを呼ぼうとしたけど出来ずにそのまま落ちていく。

「ミラ！」

すぐに手を離して帽子を抑えながら急降下していく。その後少しして、上からジュードが降ってきた。

アグ姉はこれ位なら大丈夫だろうから、今はミラだ。

そのままあたし達は水路に落下した。

物語はここから始まった

初めての共鳴

水から上がったあたし達はお互いの無事を確認して、これからどうするのかをミラに聞いた。

「みんなの力が無いとあれは壊せないと思うよ？見た目からしてもかなり頑丈そうだったし・・・」

「うん。僕もそう思う」

あたしとジュードが言うとミラは少し考えてからポツリと、

「ニ・アケリアに戻ればあるいは」

と言った。

ミラはあたし達にお礼を言ってから階段を上がっていき、あたしもジュードに簡単な挨拶をしてミラの後を追った。ミラは兵士に絡まれており、剣で攻撃したけどそれは見事に空振った。

「ミラ・・・剣使ったことないの？」

「ああ、今までは四大の力で振っていたから・・・」

その言葉に溜息をつくと同時にジュードの声が聞こえた。

「ミラ！前！」

ジュードの方は見ずに前に視線を向けると兵士がミラに斬り掛かる

うとしていた。

それを

「どっせい！」

「ぐあ！」

両脚蹴りで撃退。

でもね？この攻撃には欠点があるんだ〜・・・分かる人〜・・・。

それはね・・・

「あ痛！」

着地がうまく出来ないことです。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんか微妙な空気になっちゃった。

立ち上がってこれからのことを2人と話し合い、この街に留まっているのはまずいので海停に行き船に乗ることになった。

案内するジュードの後ろをついて行くミラの後ろをついて行くあたし。

あたしも場所は知ってるけど、ジュードがするならいつかと思いついて歩いてます。

海停に到着して少し経つと、数人の兵士とジュードの知り合いの兵士（エデさんと言らしい）が来てあたし達を捕まえようとした。抵抗するなども言われたけどミラはここで捕まる訳にはいかないと言って剣を抜いた。

エデさんはそれを抵抗の意思と判断し、近くに居た精霊術士に命令する。その術士の持っていた杖から火の玉が放たれ、ミラは少し体をずらすと同時にジュードを突き飛ばして回避させた。

あたしは帽子を取ってその場に立っていた。

・・・こういう時はね？小さくて便利だな・・・って思うよ？でもやっぱり大きくなりたいんだよ！

これから伸びるのかな・・・。

「ジュード、短い間だったが本当に世話になった。プリムラもな？ではな！」

そう言ってミラは船に向かって走っていった。またそれを追うあたし。ミラが跳ぶと同時にあたしも跳んで船に乗った。

「ふっど・・・」

「プリムラ・・・来るなどは言わなかったが、ついてくるとは思わなかったぞ?」

「別に良いでしょ?折角会えたんだからさ・・・もっと一緒に居たいし」

「そつか・・・」

ミラとそんな会話をしているとまたジュードの声が聞こえた。

1日で何回叫ぶんだろっね、この少年は?

その方を見てみるとジュードは知らない男に抱えられていて一緒に箱にぶつかつた。痛そく・・・。少しして知らない男の方が立ち上がって言った。

「いやゝ参つたよ・・・なんか軍が重罪人を追ってるらしくてさ・・・。おいおい、こんな良い男と少年に女2人がそんなに見える?」

そしてあたし達の方を見て「チツス」みたいにしてきたからとりあえずあたしも

「チツス」

と返した。

でも無視されたよ!酷くない!

「プリムラ、何だそれは?」

「気にしないで……」

「?……そうか?」

で、その後船長が来てジュードを除くあたし達3人は連れて行かれて2時間近く説教された。

「疲れた……」

「全くだ。いい加減にしろよな?あの船長」

「仕方あるまい。私たちは身分を証明する物を持っていないのだからな?」

「おたくは、だろ?」

「あたしは荷物全部イル・ファンのホテルにおいでるからな……ミラ、イル・ファンにはまた行くんだよね?」

「ああ。あれだけは放っておく訳にはいかないからな。だが、まずはニ・アケリアに行かなければならない」

「じゃ、あたしもついて行くね?」

あたし達が話している間、アルヴァインだつてさ男はジュードの近くに行っていた。

あたしとミラも何となく2人に近づく。

「ア・ジュールなんて……外国だよ」

そう呟くジュード。

アルヴィンはそれに対しては何も言わずに空を見てから、

「見ろよ。夜域が終わるぞ?」

と言った。

あたし達は揃って空を見上げる。

少しして今の今まで暗かったそれが明るくなった。

それからアルヴィンが何をしているのかや、助けてくれたお礼についてのことなどを聞き、お礼についてはニ・アケリアについてからと言うことになった。

船は順調に進んでいきイラート海停に到着した。

船から降りるとジュードは空元気なのか、気持ちを無理矢理にでも切り替える為なのか地図を見に行った。

「気持ちを切り替えたのか。見た目ほど子どもでは無いのだな」

「えらく他人事だな?おたくが巻き込んだんだろ?」

「ミラは3回位帰るよつに言ったよ?それでもついてきたのはジュード本人の意思」

「・・・どちらにしても大人なこと」

ミラはジュードの元へと向かい、その後ろ姿を見送ったアルヴィンがそう呟いた。

「人間はいつまで経っても子どものままだよ？」

「どうということだ？」

「アルヴィンの両親にとって、アルヴィンはいつまでも子どもですよ？あたしだってお父さんからしたらいつまで経っても子どもだし・・・結局、大人なんていないんだよ。まあ、これはあたしの考えだけだね？」

あたしも2人の元へ向かった。

後ろでアルヴィンがずっとあたしを見ていたことに気付かないまま・・・。

その後、みんな地図の前に集まってこれからのことについて話し合った結果、アルヴィンの報酬についてはミラに剣の使い方を教えるついでに依頼を受けて、その報酬を渡すことになった。

海停の誰にも邪魔にならない場所でアルヴィンがミラに剣の基本だけ教えて、ついさっき女の人に依頼されたイラート問道に居る、魔物退治に向けて出発した。

ちなみにその人に対してあたしは特に何も感じませんでしたよ？

同性愛者とは言っても、女なら良いって訳じゃ無いので……。

あ、ミラとレイアにプレ姉、アグ姉はOK。4人とも好きだし。

イラート間道にでると魔物がいた。

倒すのは嫌だな……。

「どいて?」

とりあえず頼んでみると意外とすんなり道を開けてくれた。

「ありがとう。今度遊ぼうね?」

ウルフとスパイダーにそう言うつと頷いて散っていった。

「さて、行こうか?あれ、どうしたの3人とも?」

見ると3人は啞然としていた。どうしたんだろう?

「プリムラ、お前魔物と話せるのか?」

「うん。友達も沢山いるんだよ?故郷の周辺にいる魔物はみんな友達で、この旅を始めた理由には他の地に居るみんなとも友達にならなかったからなんだ……。

イル・ファンには1年くらい居たからもうみんな友達だよ?」

そついうとジュードが何かに気付いたように声を上げ、ミラとアル
ヴィンが注目する。

「もしかして、バルナウル街道の魔物が急に大人しくなったのは・
」

「うん。みんなあたしの友達で、むやみに旅人を襲ったりしないよ
うに言ったから。でも生きる為に必要なことまでは制限していい
から、魔物同士での鬪いは起こるけどね？」

みんな友達とは言っても、魔物も人間と同じようにグループで活動
していることがある。本来なら同じ種でしか群れを為さないだろう
けど、今は違う種でもグループを作っている。

喧嘩とかが起こっちゃうのは仕方ない。

「マジかよ……」

「マジだよ。それから、あたしは依頼の魔物の所まで先頭には参加
しない……殺すのは嫌だから」

今まで一度も魔物を殺したことは無い。友達を殺すなんて出来るわ
けが無いんだから……。

「ミラ達には悪いけど、こればかりは……」

「分かった。確かに友を殺すなどしたくは無いだろっからな。私達
だけで依頼があった魔物の元まで行くでしょう……2人もそれ
で良いか？」

「うん」

「ああ」

「ありがと・・・みんな。それと、ごめん。我が儘言っで・・・」
帽子を脱いで頭を下げる。

すると不意に頭に手を置かれた。

顔を上げるとそれはミラだった。

「ミラ？」

「気にするな。お前はまだまだ子どもだ・・・我が儘を言ってもいいんだよ」

「・・・」

ジュードとアルヴィンの方を見ると2人も頷いてくれた。

「ありがと・・・みんな」

もう一度お礼を言って、あたし達はイラート間道を進み始めた。

みんなはあたしに気を遣ってくれたのか、魔物を殺すことはしなかった。

全部峰打ちや一時的に気絶させただけだ。

途中で共鳴と共鳴術技について、アルヴィンから説明を受けた。

でも、それを使うと間違いなく命を狩ってしまうから使わないでく

れた。

ありがとう。

暫く進み湖がある所に着くと、この辺りには居ない魔物が居た。

先ずは話し合いで解決出来ないかと思い、3人には後ろで警戒をしてもらってあたしは語りかけた。

でも、帰ってきたのはこの辺りのみんなを侮辱するようなことばかりだった。

「許さない！みんな！手加減しないでいい！ミラ！共鳴いくよ！」

「ああ！」

「アルヴィン！僕たちも！」

「おうよ！」

戦闘を開始して数分。残り一体になった所であたしとミラの共鳴術技を発動させた。

「行くよ！ミラ！」

「ああ！炎よ！彼の者に力を！」

「爆炎拳！」

ミラのファイアボールの力をあたしの右手に移して、炎を纏った拳で最後の一体を倒した。

「はあ……はあ……」

「すげえな……初めての共鳴でここまで……。何にせよ、これで依頼は終わりだ。海停に戻って報告しようぜ？」

「うん」

「私達は少しここに残る。先に行っていてくれ……」

「分かった。行こう、アルヴィン？」

「ああ」

ジュードとアルヴィンが行ったのが気配で分かり、遠くなった時にあたしはその場へたり込んでしまった。

さっきまで闘っていた魔物達の言葉と、初めて殺したショックによつて……。

それから何とか立ち直ったあたしは、ミラに謝ってから一緒に海停に向かった。

ジュードとアルヴィンはずっと待っていたのか、入り口の所にいた。報酬はもう受け取ったようだからここに、用が無ければ今からでも出発出来るみたいだ。

「ごめん・・・疲れたから、ここの宿に泊まっても良いかな？一晩休めば、大丈夫だから・・・」

「構わないさ・・・ゆっくり休め。頑張ったな？」

そう言つてアルヴィンは頭を撫でてくれた。

少し意外だったけど、嫌な気はしなかった。

4人で宿に向かう途中、ミラが急に倒れた。

空腹が原因みたいだ・・・これまでは四大精霊の力によって空腹なぞを感じることは無かったみたいだけど、今はその四大精霊が居ない。だから、お腹も空くし、眠りもする。

多分、あたしが言わなくても結局今日は宿に泊まることになったと思う。

ジュードがミラを支えて宿に向かい先に行ったアルヴィンが、ごはんを頼んだけどまだ料理人が来ていないようで、ジュードが作ることにになり、それをみんなで食べた。

その時にミラは「人間はもっと、こういうものを大切にすればいいのだ」と言っていた。

確かにそうかもね・・・。

食べ終わると、ミラはテーブルで寝てしまい、またジュードが運ぶことになった。あたしとミラは同じ部屋なので、ジュードにお休みと言って扉を閉め、ミラの隣に入って眠りに着いた。

多分気の所為だと思うけど・・・誰かがあたしを優しく抱きしめてくれた。

「お休み、プリムラ。よく頑張ったな・・・」

ハ・ミルと少女との出会い

「おはよう、みんな〜・・・」

「ああ、おはよう。プリムラ」

「おはよう」

「よう」

どうやらあたしが最後に起きたようで、目を覚ました時には既にミラは居なかつた。洗面と歯磨きを済ませてみんなの所に行き、これからのことを話し合い、予定通りニ・アケリアに向けて進むことになった。

海停から出てイラート間道を北に向かって進んでいき、半日程経った所でハ・ミルに着いた。此処に来るのも2年振りだ。と言っても前は殆ど何もしないで先に行ったけど・・・。

村の様子を見てみると村長さんが来たので、ミラがニ・アケリアはこつちであつているかと聞いた。村長さんはこの先のキジル海曝を抜ければ着くと教えてくれて、この村には宿が無いから家の空き部屋を使つてもいいとも言つてくれた。

休みたくなつたら来ていいとのことなので、少し村を見て回ることにして木の前で何かを取ろうとしている少年を見つけた。

少年が取ろうとしていた物をアルヴィンが取つてあげて、皆が見や

すい位置に置いて書かれていた文字を読み、これは大昔の大海賊・アイフリードが残したアークと言うことが分かった。

少年はこれを全部集めようと意気込んでいたけど、まだまだ子どもがこの子には却って危ないことを話し、結果、大きくなってから集めることにしてみたんだ。

このアークの中に入っていた宝珠はあたし達が貰ってもいいと言ってくれたのでありがたく貰った。何に使うのかは分からないけど、綺麗だから嬉しかった。多分、同じ物が後いくつもあるだろうから道すがら探してみよう。

「では、そろそろ休むか？歩くのは思っていた以上に疲れたからな

」

「そうだね。休もうか」

「俺も賛成」

みんなはもう休むみたいだ。

「プリムラはどうする？」

ジュードが聞いてきた。

「うーん・・・もう少し回ってから休むよ。みんなは先に村長さんの家に行つてて？」

「分かった。でも、あまり遅くなったら駄目だからね？」

「分かってるよ。それじゃ」

「気を付けるのだぞ？」

「だいじょうぶだよ……」

あたしは以前閉まっついて入れなかった小屋に向かった。

今回はどうか、と思い扉の前に立ち手を掛けて回してみると扉は抵抗なく開いた。

「やった、開いてた！では、おじゃまします」

中に入って周りを見ると誰もいなかった。ベッドと棚といった、生活に最低限度必要な物しか無い。他にも何か無いか探してみると、下に続く階段を見つけた。それを下って行くと、更に扉があった。

ここには何かあるのかな？と興味が出て、この中に誰がいるかも知れないなんてことは思わずに開けると、

「っ！誰……？」

女の子の声が聞こえた。

中に入るとそこには小さな女の子が人形を抱えてベッドに座ってい

た。

「誰……ですか？」

「あ、えつと……いきなりごめんね？こんな所に人がいるとは思わなくてさ……。」

あたしはプリムラって言うの、貴女は？」

女の子はあたしの質問に少し間を空けて自己紹介を始めた。

「エリーゼ……エリーゼ・ルタス……です。この子は

「ティポだよ！よろしくね〜！」

「うわ！ビックリした！え、それって人形じゃないの？」

エリーゼが『この子』って言った瞬間誰のことだと思ったけど、まさか人形のことだとは思わなかったから、かなり驚いた。

「ちがうよ〜。ぼくは、エリーの友達のティポだよ〜」

エリー……エリーゼの愛称かな？

うん、多分そうだろう。

「そっか、ごめんね？まさか動くとは思わなかったから……よろしくね、2人ともし〜」

「よろしく〜」

「よろしく……です」

「所で、エリーゼとティポはこんな所で何してるの？外で遊んだりすればいいのに……楽しいよ？駆け回るの」

聞いたらエリーゼは顔を伏せてしまった。

その所為で可愛い顔が見えなくなってしまっって残念。

「エリーはここから出たら駄目だって言われてるんだよ。だからずっとここに居るの」

エリーゼの代わりにティポが答えた。

「誰に言われてるの？」

「えと……おっきいおじさんに……です」

「おっきいおじさん？」

「うん。髭がすごい長くてね？とっても大きいんだ」

髭が長くて、とっても大きい？

もしかして、お父さん？

暫く長い仕事が多くなった時期があったし、エリーゼのことが関係しているとしたら……いいや、考えても分からないし、今度会ったら聞いてみよう。

「そうなんだ。でも、エリーゼ・・・外に出たいとは思わないの？」

「それは・・・本当は出たいです・・・けど」

「出ても友達なんていないんだよ・・・」

「どうして？エリーゼもこの村の子でしょ？なのに友達がいなくて・・・」

この村には結構小さな子どもがいる。さっき、アークの所に居た少年もそうだし、この小屋の近くにだっていた・・・それなら友達の1人や2人いてもおかしくない。

「わたしはここの子じゃありませんから・・・」

「え、そうなの？」

「はい」

「・・・じゃあ、2人の友達ってお互いだけ？」

「はい」

「そうだよ」

「それなら、あたしと友達になろうっ！」

「「え？」」

エリーゼとティポが揃って声を上げた。

「だから！あたしと友達になるっよ！そうすればきつと楽しいよ！みんながいれば、空を飛んだり鬼ごっこをしたり、かくれんぼだって出来る！どうせならエリーゼとティポがしたいことを全部やるっ！きつと楽しいから！ね！」

「・・・ホントに？ホントにそんなこと出来るの？」

「うそじゃない？」

「本当だし、うそじゃない！だから！ね？」

そう言いながら笑って、あたしは右手をエリーゼの前に出した。

その手を見て、次にあたしの顔を見るエリーゼ。

頷いて少しすると・・・

きゅ、と小さな手であたしの手を握ってくれた。

「ありがとう・・・プリムラ・・・さん」

「プリムラでいいよ？エリーゼ」

もう一度笑いながらそう言つと、

「あ・・・それなら、わたしもエリーで、いい」

「うん！改めてよろしくね？エリー！ティポ！」

「よろしく・・・プリムラ！」

そう言いながら笑ったエリーは、

「よろしくね〜！」

とても可愛かった。

こうしてあたしとエリーとティポは友達になった。

再会　新たな仲間

「仲間を待たせてるから、今日はもう行くね？また明日来るから」

あたしが言つとエリーは悲しそうな顔をしながら言った。

「ここに居てくれないの？」

「あたしもそうしたいけど、みんなに心配を掛ける訳にもいかないから。」

大丈夫・・・絶対にまた来るから。ね？」

「・・・絶対だよ？絶対に来てね？」

「破ったら食べちゃうからね」

「それは勘弁して欲しいな？それじゃ、お休み。エリー、ティポ」

「うん、お休み。プリムラ」

「おやすみ」

手を振るエリーにあたしも手を振ってから小屋を出て村長さんの家に向かった。

家に着くと扉の前にミラが立っていた。

星でも見てるのかな？

あたしに気付いていない様子のミラに近づいて、

「ミラ、ただいま。何してるの？」

と聞くとやっと思付いたようであたしの方を見た。

「プリムラか・・・星を見ていたのだ。お前は何をしていたのだ？
思っていたよりも遅かったが・・・」

「うん、ちよつとね？あっちの方にある小屋で女の子と会って、友達になったの。」

それで明日、もう一度行ってくつて約束したから、少しだけ寄ってもいい？そんなに時間は取らないから」

「ああ、それくらいなら構わない。だが、急いでいるのも事実だからな？」

「うん。分かってる・・・ありがとう」

「では、そろそろ寝るとするか？」

「そうだね」

家に入り既に寝ているジュードとアルヴィンを起こさないようにあたし達も眠りに着いた。

部屋は数の関係上ミラと一緒にだ。

翌朝、あたしは最初に目を覚まし外の空気を吸っていた。

暫くしてミラが起きてきて挨拶を交わした後、ミラはあたしの横でハ・ミルの人たちを観察し始めた。その後にジュードも起きてきて挨拶をして、ジュードはミラに黒匣^{ジン}について質問した。

ミラはジュードには関係ないことだと言って、ジュードはそれを信頼されていないと思い、ミラがその勘違いを正すためにジュード達人間にたとえて説明を始めた。

「君たちは赤ん坊が刃物を持っていたらどうする？」

「手の届かない所におくか、取り上げる」

「うん・・・僕もそうする」

あたし達が答えるとミラは更に聞いてきた。

「では、それはなぜだ？」

「なぜって・・・危ないからに決まってるよ」

「そういうことだ」

「僕たちは赤ん坊じゃないよ！危ない物だって分かったらちゃんと使い方を・・・」

「・・・私にとっては同じことなのだ」

精霊の主だからね・・・当然と言えば当然かも知れない。あたし達人間より遙かに長い時を生きてるんだから。

結局このことについてはアルヴィンが入ってきたから中断になり、入り口の方を見ると兵士が来ていたから、長居は無用と言うことで早速キジル海曝に向かうことになった。

そちらの方に背を向けた時、一瞬誰か知っている人を見たような気がしたけど急がないといけないから振り返らずに西の方へ向かった。

西の方へ行くとその出口にも兵士がいた。

「どうする？」

ジュードの疑問にミラが答えた。

「どうするも何も、強行突破しかあるまい」

「やっぱり？」

「短い作戦会議だこと・・・」

アルヴィンが呆れた様にした時、あたしは後ろの気配を感じて振り向いた。

そこにいたのは、

「おはよう、プリムラ。遅かったから、我慢できなくて来たんだけ

ど、どうしたの?」

エリーだった。

「あ、おはようエリー。えっとね?この先に用があるんだけどあの兵士が邪魔で通れなくてどうしようか悩んでた所・・・」

指さしながらそう言うのとエリーもその方向を見た。

「あの人たちが邪魔なの?それなら・・・ティポ」

「OK!」

「!」

今まで人形だと思っていた物がいきなり動き、しゃべったので3人はとても驚いたようだ。

まあ、あたしもビックリしたけど・・・まさかしゃべるとは思わなかった・・・。

ティポは兵士の周りを浮遊して注意を引きつけた。

少しの間その様子を見ていると後ろからまた誰かが来た。

「あの人さっき入り口にいた・・・」

「?」

「これ、娘っ子。小屋から出てはいかんと言うに・・・ん、おいそこの娘。お前、もしかして」

え・・・この声って、もしかして？

そう思いながら後ろを見たあたしの目が移したのは、

「・・・お父さん！」

お父さんだった。

『ん（え）（はあ）？』

「プリムラ！何故こんな所に・・・いや、それよりも今はあのラ・シユガル者どもじゃ！」

お父さんは兵士の所に向かい鎚で倒してすぐにあたし達の所に戻ってきた。

エリーはその間あたしの手を握っていた。

どうしたんだろう？

「お前達は・・・プリムラの仲間か？」

「そうだ。お前は？プリムラとはどんな関係だ？」

「・・・プリムラは僕の娘じゃ。2年前にいきなり旅に出ると言っ
て止める間も無く行ってしまっただのう。まさかこんな所におるとは
・・・」

「あたしもビックリだよ・・・てっきりおじちゃん達の所にいると

思ってたから」

四象刃の仕事なのかな？

「命令での・・・それよりもプリムラ、その娘っ子とは知り合いなのか？」

「うん、昨日友達になったの・・・エリーのことを知ってるってことは、エリーをここに連れてきたのはお父さんなの？」

「・・・ああ。じゃが、ここにこれ以上居るよりはお前と居た方がいいかも知れんろう。」

「すまんが、任せてもいいか、プリムラ？」

「勿論いいけど、今度ちゃんと教えてよ？」

「分かっておる・・・もっと話したいが今は時間も無い。またのう？」

「うん」

お父さんはまた村の方へ戻っていった。

あたし達も今の内にキジル海曝に出て、みんなにエリートティポのことを紹介した。

「エリーゼ・ルタス・・・です」

「ぼくはティポだよ・・・よろしくね、みんな」

「うん。よろしくね？僕はジュード・マティス」

「俺はアルヴィンだ」

「この子が昨日言っていた友達か？プリムラ？」

「うん。大丈夫、エリーとティポはあたしが絶対に守るから」

「そうか。それが分かっているのなら何も言わない。私はミラ＝マクスウエルだ」

これでみんなの自己紹介は終わりだね。

「みんな優しいから、何も心配しなくていいよ？それじゃ行くところか？」

「うん！」

あたしとエリーは手をつないで先に進んだ。

後ろではミラとジュードが何か話していたけど、あたし達はそれに気付かなかった。

お説教くニ・アケリア到着く

あたし達は現在キジル海瀑を上ったり飛び降りたり潜ったりしながら進んでいる。

今は、というかこの旅の間はみんなと遊んだりすることは極力控えようと思っている。その所為で進行を遅らせてしまっわけにはいかないからね・・・エリーも守らないといけないし。

あ、そういえばエリーって何歳なんだろう？

「12だよ？」

「あたしより上だったんだ・・・なんか意外」

「てことは・・・お前11歳だったのか!？」

アルヴィンが聞こえていたのか急に話しに入ってきた。

「そうだけど？」

「そんなに驚くことではないだろう？」

プリムラは2年前には既にソグド湿原を1人で抜けるだけの力を持っていたのだからな？

ニ・アケリアに着く頃には服はあちこち汚れていたが・・・」

「そういえばそうだったね・・・それで四大精霊のみんなに服を綺麗にしてもらったんだっけ？」

「ああ。その後にイフリートと闘ったりもしていたな。あの闘い、彼も楽しかったみたいだぞ？」

「へえ〜・・・それなら、助け出したらまた闘って貰おうかな？いい？」

「もちろんだ」

「一体・・・何者なんだよ、お前は？」

「ホントだね・・・」

それから数十分後、あたし達は大きな滝のある所に着いてアルヴィンが休憩したいと言い出したので休憩することになった。

あたしはミラ、エリー、ティポと一緒に滝を眺めている。

ここに来るのも久しぶりだな・・・。

そう思いながら周辺を見ると何か違和感を感じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

それがなんなのかわからなくて首を傾げているとエリーが聞いてきた。

「どうしたの、プリムラ？」

「ん？」

「いや・・・前に来た時となんか違うような気がするんだけど・・・それがなんなのか分からなくて。なんだろう・・・何かちがうんだけどな・・・」

必死になんなのかを考えるけど、こういう時ってどうしても分からないんだよね・・・いや、その内思い出すでしょ。

「ふう・・・」

「考えるのは止めたのか？」

「うん。これ以上考えても疲れるだけだし・・・ちょっとジュード達の所に行ってくるね？
そろそろ出発するでしょ？」

「・・・そうだな、頼む」

「OK！いこ、エリー、ティポ！」

「うん！」

「OK」

あたし達は二人のところに向かい、そろそろ出発することを伝えた。

「うん、分かった」

「はいよ」

「それじゃ、ミラの所に……！ミラ！」

ミラの方を見ると誰かに捕まっていた。

エリー達もそれを確認し、急いでミラの元へ向かうとミラを捕まえていたのは、

「プレ姉！？」

「プリムラ！貴女、どうしてマクスウエルと一緒にいるの！」

「どうしてって……イル・ファンで再会して成り行きで……でもそれを言ったら、プレ姉こそ何してるの？」

「それは……」

答えに困るプレ姉。

何かあたしには言えない様なことをしてるの？

「なあ、その人離してくれない？俺の大事な人なんでね」

アルヴィンが言うとプレ姉はアルヴィンの方を見て目の色を変えた。困惑していた色から、何か……憎しみのようなものを込めた瞳でアルヴィンを睨んでいる。

「……何？今はこの子にご執心なのかしら？」

「プリムラ、あの人誰なの？」

エリーがあたしの服を引っ張りながら聞いてきた。

うん、どうでも良いけど、エリーの方が背も少し大きいからこの光景は少し違和感があるような気がするの。はあたしだけかな？逆なら多分何の違和感も無いんだらうけど……。

本当にどうでもいいな……。

「えっとね……お父さんの仕事仲間って言えばいいのかな？それで、小さい頃あたしとよく遊んでくれた人。どうして此処に居るのは分からないけど……。」

「あら、この子は見捨てるのかしら？」

「え……？」

エリーに話していてアルヴィン達の話しを聞いていなかったあたしはブレ姉が言ったその言葉の意味を理解できず、ジュード達に聞こうとそちらを見ると、アルヴィンが銃を構えていた。

何をするつもりなのかを聞く暇も無くアルヴィンは銃を撃った。

ブレ姉ではなく岩場に向けて。

ドンドンドンドン！

一瞬の沈黙の後、

ズズ・・・と岩が動いた。

「え？」

そして、

ゴバツ！

巨大なタコが岩壁から離れ地に着きあたし達では無くプレ姉の方に飛びかかった。

「させるかああああああ！！」

ドゴン！

「ギユワアアアアア！！」

お得意の跳び蹴りで巨大タコを蹴りとばして滝に叩き付ける。

「しまった！」

今日はちゃんと着地して、声のした方を見るとミラが解放されていた。多分巨大タコの攻撃を避けようとして解いてしまったんだと思う。

「プレ姉！大丈夫？」

「・・・ええ。ごめんね、プリムラ？今は貴女には何も教えて上げ

られない・・・またね？」

「あ、プレ姉！」

行っちゃった・・・。

「プリムラ！前！」

「え？うお！」

ジュードの声に反応して前を見ると巨大タコが攻撃してきた。それを何とか躲してみんなの所に戻る。

「ありがとう、ジュード」

「いいよ、これ位。それよりも、来るよ！」

「ギユワアアアアア！」

「うるさい！少しは静かにしたらどうなの！この辺に住んでるみんなのことも少しは考えなさい！」

「ギユ・・・」

ビシッと指さしてそう言う途端にさっきまでの勢いを無くしてその場で停止する。

「確かにあなたを起こしたのはあたし達だけど、だからって騒いでいって訳じゃ無いでしょ！それに、硬い甲羅持ってるんだからあれく位の攻撃なら平気でしょ！？」

「ギユウウウ・・・」

「大体ね！寝てるのを邪魔されたのはあなただけじゃないの！はつきり言つてあなたの方が余程騒がしいんだからね！体が大きい分声も大きいんだから少し考えれば分かるでしょ！」

「ギユウウウウ・・・」

「お、おい・・・プリムラ？それくらいで良いのではないか？その魔物も反省しているようだし」

「駄目！こういうのは甘やかしてると、この先もずっとこうなんだから！今からでも基本から教え直さないとこの先苦労するのはこの子なんだからね！待てないならみんなは先に行つて！あたしはこの子を鍛え直すから！」

ミラの言葉にそう返す。

以前もこんな感じで周りの迷惑を考えない子がいたから、丸一日説教をしたことがある。

今回も必要ならそれ位はするつもりだ。

「おお・・・すまん」

「なんか、キャラ変わったな・・・プリムラの奴」

「あれが本来のプリムラなのかも知れないよ？小さい頃から魔物と触れ合つてきたのかも知れないし」

「そうなんですか？」

「たぶんだけどね？」

「プリムラっておもしろいね〜・・・」

それから5時間ほど巨大タコに説教を続けた。

「分かった？」

「ギユウ・・・」

「よし、それなら戻っていいよ？ごめんね、勝手に起こしちゃって？」

岩壁に向かっていく巨大タコに謝ってから、みんなを追いかけようと思ってニ・アケリア方面の方を向くと、

「やっと終わったか・・・よく魔物相手にそんだけ説教できるな？」

「いいのではないか？おかげで無用な闘いを避けることができたのだからな」

「そうだね。あんなに大きな魔物と闘ったらこっちも只では済まなかっただろうから」

「でも、お説教してるプリムラを見るのは楽しかった」

「そうだね〜・・・それだけでも着いてきて良かったかも・・・」
まだみんないて座って寛いでいた。

「みんなまだ居たの！先に行つてて良いって言ったのに！」

「お前だけを置いて行くわけにはいかないだろう？気にするな。では行こうか」

「うん。ほら、アルヴィンも立って・・・行くよ？」

「へいへい」

結局みんなでニ・アケリアに行くことになった。

それから数十分後・・・あたし達はやっとニ・アケリアに到着した。

大分時間掛かつちやっとな・・・主にあたしの所為だけど。

ごめんね？みんな・・・。

再召喚〜ソグド湿原で遊ぼう〜

「2年前と何も変わらないね・・・ここは。相変わらず空気が綺麗」
深呼吸すると澄んだ空気が肺を満たす。

あたしはここは結構好きだ。近くにはソグド湿原もあって遊び場には困らないし、社に向かう参道にも友達は沢山いるからね・・・みんな元気かな？

後で暇が会ったら行ってみよう。

「そうだろう？私もこの場所は気に入っているからな。と、今はそれよりも四大だ・・・」

ミラは気を取り直して、と言った様子で近くに居た村民に声を掛けた。

あたしはエリー、ティポと一緒に適当な所で村を眺めている。

「プリムラは前にもここに来たことがあるの？」

「うん。旅を始めたばかりの頃にシャン・ドウに居るおじいさんに頼んであっちの方にあるソグド湿原に送ってもらって、魔物と遊んだりしながら進んで此処に来たの」

「じゃあ、そのときにミラと会ったの？」

「そうだよ？それで汚れてた服を四大精霊に洗濯して貰った」

「・・・四大精霊に？」

「うん」

「なんか・・・プリムラっておもしろいね」

「そう？」

自分ではそんなこと無いと思うけど・・・あたしからしたら、ティポの方が余程おもしろい気がするし・・・ホントどっとう仕掛けで動いてるんだろ？しかも喋る。

思わずティポをじゅつと見ていると、

「プリムラ、エリーゼ、ティポ」

ミラに呼ばれた。

どうやら話しは終わったみたいだ。

「なに？」

「これから私は社に向かい四大を再召喚するための儀式を行うが、3人も来るか？」

来ないなら暫くここで待って貰うことになるが・・・」

「あたしは・・・久しぶりだし、この辺のみんなに挨拶してから向かおうかな？」

場所だけ教えてくれる？」

「そうか・・・社は上の出口から出て真っ直ぐ進めば着く。一本道だから迷うことは無いと思うが、気を付けてな？エリーゼはどうする？」

「私は、プリムラと一緒に・・・います」

「分かった。ジュードとアルヴィンは手伝って欲しいことがある。一緒に来てくれ」

「うん」

「はいよ」

ミラ達とはそこで一旦分かれてあたし達はまずソグド湿原に向かった。

77

～SIDEOUT～

～SIDEジュード～

僕たちは一旦プリムラたちと別れて今はミラ、アルヴィンと一緒にいる。

それでミラが四大精霊を再召喚する儀式に必要な4つの石・・・世精石を集めることになった。

それを僕とアルヴィンに社まで運んで欲しいそうだ。

アルヴィンが村の人に頼めば良いと言っただけど、

「先程の者の反応を見ただろう？」

と言われて納得した。

確かにあれじゃ、頼み事なんて出来ないよね？

こうして話している今だってミラを見た人はみんな拝むような格好をしている。

「仕方ないよ、アルヴィン。早く集めよう？」

「分かったよ……」

「頼む」

それから僕たちは4つの石を集めて社に向かった。

「プリムラたちは大丈夫かな？」

魔物と会話する力を持つ不思議な少女。

さっきもキジル海瀑でも、巨大なタコのような魔物、グレーターデモツシユを闘いもせず説教で退けた。さっきは、特に何も思わずに見ていたけど、今になって考えてみると信じられないって言うのが本音だ……。

魔物に説教をするなんてね……。

「それは心配ないだろうな？あいつの力は本物だ……お前達もそれは分かっているだろう？」

「そうだけど……やっぱりまだ子どもだからね。心配なんだよ」

「同感。確かにミラの言う通り、あいつの力は本物だが、俺らん中じゃ一番子どもだからな」

アルヴィンも同じみたいだ。

「お前が心配するとは……意外だな」

「そうか？……そうかもな。俺自身もどうしてか分からないが、気になっちまうんだよ」

「そんなに心配なら、社に運んだ後はすぐにもプリムラたちの所に戻るといい。何も起こって居なければ、戻る途中で合流できるだろう」

「……そうだね。なら、早く行こうか？本当に何も起こってないとは言えないから」

「だな」

僕たちは急ぎ足で社に向かった。

（SIDE OUT）

「怖いよ〜!!」

怖くなったわたしとティポは、自分よりも小さな体のプリムラに抱きつきました。

そんなわたしとティポの頭をプリムラは優しく撫でてくれます。

「大丈夫だよ？みんな良い子だから。ほら、来た。みんな〜!こっちだよ〜!」

言われてプリムラが見ている方を見ると沢山の魔物がこちらに・・・正確にはプリムラの方に駆けてきていました。

その中には不思議な魔物が一体だけ居ました。

尻尾の部分に杖の様な物がある、猫の様な魔物です。

何となくですか、他の魔物とは雰囲気が違う気がします。

ですが、

「可愛い・・・」

わたしはそう思いました。

可愛いものがわたしは好きです。

勿論ティポも。

プリムラとは昨日会ったばかりですが、今はとっても好きになって

います。

「え？どの子？」

わたしのつぶやきが聞こえていたプリムラに聞かれて、わたしは猫の様な魔物を示しました。

「ああ！あの子ね！なんでもかかは分からないけど、いつもみんながいる場所とは違う所に居てね？」

どうしてなのかな～・・・と思って聞いてみたら、誰とも関わりたく無いって言うてたから・・・「ミャー！」どわ！

説明しているプリムラに猫さんが飛び付いて顔を舐め始めました。

「あははは！くすぐつたいよ！久しぶりだね、ミーくん！それにみんなも！元気にしてた？」

じゃれつかれながらも魔物達にプリムラが聞くと、その場に居た殆どの魔物が頷きました。

「ミーくん、そろそろ離れて？重いよ」

「ミャー」

言われてミーくんと呼ばれている猫さんは渋々と言った様子でプリムラから離れて近くに座りました。

きっと、プリムラのこと大好きなんでしょう。

他のみんなもプリムラに近づいて行きました。

「さて、それじゃ早速遊ぼうか！何したい？」

その質問に魔物達は一斉に何かを訴え始めました。

多分、したいことを言っているのでしょうか？

プリムラが困った様な顔をしています。

「ち、ちよつと！そんな一斉に言われても分からないよ！それに今日はあまり時間が無いから、みんながしたいこと全部は出来ないの、ごめんね？」

それから、魔物達はいくつかのグループに分かれました。

グループごとにしたいことを決めているのかも知れません。

あるグループではちゃんと話し合って居ますが、あるグループでは喧嘩したりしています。

「あわわ・・・止めなくいいの、プリムラ？」

「ん？ああ、いいいいの。あの子達はいつも喧嘩してるから。それに結局、みんな疲れて勝手に静かになるから。ね、ミーくん？」

「ミャー」

プリムラに問いにのんびりした声で答えるミーくん。

「みんなが決めるまで遊んでおこうか？ミーくん？」

プリムラがそう言つと、ミーくんはその場にしゃがみ、

「よつとー」

プリムラがその背中に飛び乗りました。

そして、

「それじゃー！レッツ、ゴーー！！」

勢いよく走り出しました。

これが最初の部分に繋がります。

「はやい！凄いやー！ミーくん！」

ミーくんはほんとに速いです。

見ていると目が回りそうになってきます。

どうやらティポも同じみたいで、浮いていましたが、今し方浮いていられなくなり落下し始めたのでキャッチしました。

思った通り目を回して、

「目が回る〜・・・」

と書いています。

「きゃ~~~~~！……もういっっちゃえー……！」

プリムラは本当に元気です。

〜SIDEOUT〜

「一旦おさらば、すぐ再会」

「SIDEプリムラ」

「ごめんなさい」

どうしていきなり謝っているかと言うとですね、ミーくん達と遊ぶのに夢中になる余り社に行くことを忘れて心配してくれたミラ達が再召喚の儀式を済ませてから村まで戻ってきて、その途中にも村にもあたしとエリー、ティポが居ないから村人に聞いてここ、ソグド湿原に来たら元気に遊んでいるあたし達を見つけ、あたしはそんなミラ達を見つけて社のことを思い出し、ミーくん達にさよならしてからエリー達と一緒に3人の元へ行くと、

「プリムラ・・・僕たちがどれくらい心配してたか分かる？」

「参道を下つていつてもどこにもいな上に村のどこにもいない。村民に聞いてみればここに行っているの見たっていうから来てみれば」

「暢気に魔物達と遊んでいる」

1人ずつ言われて、その顔がなんだか怖く感じてしまい謝ったと言っただけです。

「・・・はあ・・・」

溜息を揃ってつかれました・・・。

「ま、無事なのは分かったし報酬も貰ったから俺はこれでおさらばするわ……じゃあな？」

「え、アルヴィンどっか行っちゃうの？」

あたし達に背を向けて村の方に戻っていくアルヴィンにそう問うと一度こちらに振り返り、

「何だ？俺と別れるのが寂しいのか？」

と言ってきた。

「当たり前じゃん……一緒に行こうよ？」

「……」

「どうしたの？」

あたしの答えに驚いた様な顔をして少し沈黙するアルヴィン。

「いや、まさかそんなこと言われるとは思ってなかったからな……。そう言ってくれるのは嬉しいけど、俺も報酬は貰ったからな」

そう言っつて報酬の入った袋を取り出して見せてくる。確かに十分な報酬は貰っているみたいだ……。

折角ここまで一緒に来たんだからどうせならこのままみんなでいたいな……。

「プリムラ、仕方あるまい。アルヴィンも仕事なのだからな？」

「それは分かってるけど・・・また、会えるよね？」

「縁があれば会うんじゃない？じゃあな」

そう言い残してアルヴィンは村の方に戻っていった。

「絶対だかなー！コンニャローー！！」

その背中にあたしはそれだけ言った。

「それで、これからどうするの？」

気を取り直してあたしはこれからのことをミラ達に聞いた。

「イル・ファンに向かう。クルスニクの槍を壊す為にな？」

「そっか、分かった。エリー達もOK？」

「うん」

「よし、出発だ」

あたし達はハ・ミルに向かう為、まずキジル海瀑に向かった。

〈SIDE OUT〉

〈SIDEガイアス〉

「あの女がマクスウエルなのは間違い無いのだな？」

「ええ」

「では・・・」

俺は一旦そこで言葉を切りマクスウエル達の前を歩く白い髪の少女を見る。

「何故プリムラが共にいる・・・何か知っているか？ジャオ、プレザ」

後ろで控えているジャオとプレザに聞くが、

「いや・・・俺もまさかあの女がマクスウエルだとは思っておらんかったからのお」

「私もどうして一緒に居るのは分りませんが、元気なのは確かです。自分の数倍はある魔物を蹴り飛ばす位には・・・」

とのことだ。

いつも何をしでかすか分からないやつだったが、あいつは思いつきで動いているから・・・今回もその結果なのだろう。

「お前たちから報告を受けた時は驚いたが、元気になっているようで安心した。

さて、俺たちは俺たちのことをするとしよう」

風邪には気を付けるのだぞ、プリムラ。

〈SIDE OUT〉

〈SIDEプリムラ〉

「あの子、大人しくしてるかな？」

「暴れてたら多分聞こえるから大丈夫だと思う」

「プリムラのお説教がかなり効いてからね」

「そうだね・・・大人しく寝てると思うよ？」

「むしろあれだけ説教を受けて暴れる度胸があるとは思えんが・・・

」

ミラの言葉にエリー達は頷いた。

「え・・・そんなに？」

あれ位ならモン高原で遊び初めた頃は日常茶飯事だったけどな・・・

今はみんな大人しいけどね。

「まあ、いいや。先ずはどこに向かうの？」

「サマンガン海停からカラハ・シャルル経由じゃないか？」

「え？」

答えたのはこの場の誰でもない声だったけど、ついさっきも聞いた声だった。

『アルヴィン！』

「よ！また会えたな」

「一緒に来てくれるの？」

ジュードの問いにアルヴィンは巫女のイバルとか言う人から頼まれたと答えた。

誰、それ？

ま、いいか。

「それじゃ、またよろしくね！」

「ああ」

再会速かったな・・・。

とりあえず、これでまたみんな揃ったね！やっぱりこうじゃないと！

魔装獣

なんだかんだでまた全員揃ったあたしたちは、サマンガン海停に向かうためイラート海停を目指している。その途中キジル海瀑で巨大なこの様子を見てみるとおとなしくしていた。通り掛かった時に触手をヒョコツと出して振ってきたから振り返しておいた。

キジル海瀑を抜けて八・ミルに到着し、村長さんに話しを聞くことになって家に向かっていく。

それで行ったんだけど、なにやら騒いでいた。

よそ者がいるからいけないんだとかなんとか・・・。

ミラが声をかけるとそこで騒いでいた人たちはあたしたちにあたってきた。

「あんたらの所為でこの村は散々じゃ！さっさと出て行ってくれ！」

おお・・・ずいぶんと態度が違うこと。この短期間でよくこんなに変わるね？

村長さんはそれだけ怒鳴った後に家に入っていく、ミラるアルヴィンが話を聞きに後を追って家に入っていた。

「僕達はこの辺で待ってようか？」

「うん」

あたしたちはイラート間道側の入り口近くで待っていた。

その時にエリーがティポで遊んでいる光景を見て抱きしめたくなくなった。

「エリー可愛いー！」

「ひゃー！」

とつか抱きついた。あまりに可愛くてつい……。

「ぶ、プリムラ！？／／／」

「もう、ホントに可愛いんだからあー！うりうり〜」

「ん、プリムラ／／／」

うわぁ……ホントに可愛い。ちょっとやばいかも。

「お前たち、そろそろ出発するぞ？」

「あ、ミラ。どう、何かわかった？」

「いや、あまり有益な情報は無かった」

「そっか……」

ジュードの問いにそう答えるミラ。

アルヴィンはあたしを見て聞いてきた。

「お前は何やってんだ？」

「え？エリーを堪能してた。いや、アルヴィンたちが来てくれて助かったよ。もう少し遅かったらエリーを襲う所だったから……」

「わたし襲われてたの！」

ナイスツツコミ！（？）

まあ、結局カラハ・シャルル向かう為まずはイラート海停へ向かうことになり、あたしたちはハ・ミルを後にした。その時にエリーが村のみんなに向けて手を振ったけど誰も振り返さなかった。

「いっ、エリー？」

「……っん」

イラート間道から海停に向かっていている途中、何度か魔物と戦った。

今のまま戦闘を殆どせずに進んでいくとこの先が苦労するかも知れないと言う、アルヴィンの助言により少しくらいは戦った方がいいと言うことになり、周辺の人に頼んで相手をしてもらった。

「やっ！せい！」

「は！」

「ティポ！」

「OK！」

あたしは十分強いから別に大丈夫だとアルヴィンに言われたから一緒にみんなの戦いを見学してる。

エリーもこれまでに何度か戦った経験があるのか、動きは悪くなかった。只やっぱり術士だから詠唱を始めるとどうしても隙が生まれる。もちろんみんながそんな隙を逃すはずは無い。弱肉強食の世界で生き残る為には、相手が一瞬でも隙を見せたらそこで仕掛けないと自分が殺られるんだから・・・。

でも、詠唱をしている時に危険なのは1人でいる時だけ。今は、

「は！邪魔はさせんぞ！」

「エリーゼには手出しさせないよ！」

守ってくれる仲間がいる。

やがて詠唱が終わりエリーが術を発動しようとした時にあたしが止めて此所での訓練は終了になった。

「エリーの術って結構強力だからね・・・今のみんなじゃ耐えられな
いんだ」

「そうなのか？」

「うん。モン高原にいるみんななら十分耐えられるけどね？あたしと遊んでいる内に鍛えられたみたいで、中途半端な威力じゃ絶対に倒せないから。此所のみんなも鍛えれば強くなるだろうけど、今は時間も無いからまた今度だね？」

ありがとう、みんな。ごめんね？怪我させちゃって」

あたしがそう言うともみんなは別に構わないと言うふうに首を振った。これくらいの傷なら常日頃、負っているから問題ないそうだ。

「そっか。それならゆっくり休んでね？さよなら」

今度は縦に首を振りそれぞれの場所に戻って行った。

「悪く無かったぜ？ミラも剣の扱いにかなり慣れたみたいだしな」

「そっか？私には剣の才能があるのかも知れないな」

「エリーゼ姫も思ってたより戦える様で良かったよ。だが、詠唱中はどうしても隙だらけになるから常に誰かとリンクしてたらどうだ？そうすればすぐにフォローに入れるからな？」

「はい」

「ジュードは結構戦闘経験があるみたいだからな？今のままでも、成長すればなんの問題も無いだろう？」

「うん」

「プリムラは別に言うことはないな。いろんな意味でこの面子の中じゃ最強だろうし……」

『確かに』

みんなハモった。

「そうかな？」

そんなこと無いと思うけどな……まあ、負ける気はしないけどね。あたしの力って戦った分だけ強くなっていく物だから、2〜3歳の頃から訓練を初めて今は11歳。つまり8〜9年分の経験がそのまま強さになってるってこと。この辺じゃまず負けない。

「さて、海停はすぐそこだ。行くでしょう」

「はい」

イラート海停に到着し宿でご飯を買ってから船に乗ってサマンガン海停へ向かった。

サマンガン海停に到着したあたしたちは船を降りる。

「おいエリーゼ。なにやらお前に不穏な視線を向けるやつがいるぞ？」

広場に出て辺りを見てみるとミラが突然そう言った。

「え、そうなんですか？気付きませんでした」

「なんだろうね？」

「只のロリコンかもしれないが一応、話を聞いておくか」

「そうだね。エリーに何かするつもりなら放っておく訳にはいかな
いし」

船員の近くにまずエリーとティポを向かわせて、あたしたちは少し
離れたところで観察する。

ポヨンポヨンポヨン・・・とティポで遊ぶエリー。

「やっぱり可愛いなあ・・・抱き締めたい」

「お前・・・もしかしなくても女が好きだろ？」

「え!?!？」

「何!そんなのか!」

「うん。あ、やっぱりあの人エリーを見てるよ!」

船員がずっとエリーたちを見ていた。

その船員にアルヴィンが近づき、あたしはエリーを後に庇った。

「ちょっと、おたく・・・家のお姫様が可愛いからって見ないでくれる?」

「あ、いや、違つよ、その子の持つてるぬいぐるみを見ていたんだ・・・」

船員はティポを指さして言った。

「ぼくのこと知ってるのー!」

「おお、やっぱり喋るのか!」

「他にもティポがいたんですか?」

「ああ、少しまえまで此所にいたおもちゃ屋がね、俺もひとつ買っておけば良かったな」

その船員が言うにはおもちゃ屋はここから西の街へ向かったらしい。

ここから西つことはカラハ・シャルルだ。

「それならちょうどいいね?探してみようか、エリー、ティポ?」

「うん!」

「もしかしたら僕の家族かも!」

「それじゃ、カラハ・シャルルへ向けて出発!」

「おー!」

「元気なやつだ」

「子どもらしくていいんじゃない?」

「そうそう。子どもは風の子って言っつからな」

出口からサマングン街道へ出ようとすると樽の上に胡座を掻いて座っているおじいさん声を掛けられた。

「何?」

「ちいとじじいの話に付き合ってくれんか?」

「悪いが急いでいる。また今度にしてくれるか?」

「いいから聞いておけ。命に関わることじゃぞ?」

「・・・聞かせて貰えますか?」

ジュードのその言葉にアルヴィンは呆れていた。

そんな暇無いだろうとでも言っている様だった。

おじいさんの話によると、20年前にトリルという青年が自分の持つ力を使い戦えば戦うだけ強くなる7体の魔物を創り出し戦いを挑んだそうだが、突如発生した大津波によってトリルは死んだらしい。

「なんだよ、ずいぶん呆気ないな?」

「まだ話は終わっておらん。確かにトリルは死んだが、7体の魔物は生き残り世界中に散らばり今も生きている。そして、いつしかそやつらは体のどこかに武器を生やし魔装獣と呼ばれるようになった。よいか？体に武器を生やした魔物と会っても決して戦ってはいかんぞ？」

「あのおじいさんの話に出てきた魔装獣って、プリムラがソグド湿原で遊んでた魔物じゃない？」

「確かに尻尾の部分に杖の様な物があつたな」

「ああ。お前は知ってたのか？あいつが魔装獣だつて」

「ううん、全然。仮に知ってたとしても戦わないよ？」

「まあ、だろうな？」

そんな武器を手に入れる為だけみたいなのはしたくない。遊ぶのは全然構わないけどね。

「でも、なんだか可哀想・・・戦う為だけに生み出されたみたいで」
「・・・そうだね」

エリーが言ったことはあたしも思っていた。

ミーくんが誰とも関わりたく無かったのは自分が他のみんなとは違

う存在だということも分かってきたからなんだ・・・でも、今は湿原のみんなと仲良くしている。それは最近確かめることができた。

もし、戦うことに疲れて苦しんでる子がいたら、あたしは

カラハ・シャル到着

「結構深いね・・・この森」

あたし達が今いるのはサマンガン樹海。街道を通って進もうと思ったら検問があつて通れなかつたから仕方なく、こつちに来たんだよね。入つてすぐのところとで魔物があたし達を見てたから理由を聞こうとしたらどつか行っちゃった。

今はたぶん真ん中辺りくらいまで進んでると思う。

「だな。でかい俺には大変だよ」

「嫌味が、こんにゃろ」

こつんとアルヴィンの腰辺りを小突く。

「プリムラは小さいのを気にしているのか？」

「気にはしてないけど、大きくはなりたいと思ってるよ？まあ、まだ11歳だからこれから伸びると思っただけだね？」

「そうだね。規則正しい生活を続けていればきっと伸びるよ？」

「でも、プリムラはこれくらいがいいな・・・」

「可愛いしね〜」

ミラ、あたし、ジュード、エリー、ティポの順ね？

「それ、ドロツセルにも言われた」

「ん、誰だ？」

「今向かってるカラハ・シャルルの領主家の長女。2年前に寄った時に知りあったんだ・・・元気にしてるかな？・・・元気にしてる姿しか想像できないな」

数日間お世話になったけど、その間もずっと元気だったしな・・・今もきつと元気ですよ。

「領主家の奴と知り合いつて・・・お前、何かしたのか？」

「周辺の魔物を大人しくさせた」

「成る程」

「プリムラらしいね」

「うん」

「そう？」

なんだかんだで、そろそろ森の出口に到着するといった所でさつき入り口であたし達を見ていた子が仲間を連れてやってきた。

「あ、さっきの子」

「分かるのか？」

アルヴィンが聞いてきた。

「ずっと、遊んできたからね。何となくは分かるよ。ああ、ミラ？
この子達に戦意は無いから剣を抜く必要は無いよ？」

「む、そうなのか？」

剣を抜こうと構えていたミラを止める。

「うん。たぶん誰かに頼まれたんだと思うよ？」

「流石じゃのお。プリムラ」

ズシン！

大きな音を立てて振ってきたのはお父さんだった。

「お前は・・・」

「お父さん！久しぶり！元気だった!？」

駆け寄り、跳んで抱きつく。

「おお！元気じゃ！お前も元気そう良かったわい！」

「うん！ここには何をしに来たの？仕事？」

「いや、ここには偶然通り掛かっただけじゃ。この辺りで自分たち

と対話できる子がおると言っていたから、気になってな？もしやと思ひ、探しておったんじゃない」

「それで、あたし達と見つけたんだね？」

「ああ。じゃが、すまんの？もう、行かねばならん」

お父さんはそう言いながらあたしを優しく地面に降ろした。

「え、もう？」

「すまん。今は色々と忙しくてな？皆、娘のことをよろしく頼む。娘っ子も良き友で在ってくれるか？」

「もちろんです！」

「ずっと友達だよー！」

「心配するな」

「うん。僕達も注意しておくから」

「まだまだ子どもだしな」

エリー、ティポ、ミラ、ジュード、アルヴィン。

最後のはちょっと余計だったの、アルヴィンめ。

「・・・プリムラ、良い仲間に出会ったの？」

「うん！みんなとの旅、面白いよ！」

「そうか・・・では、僕はもう行くとしよう。元気での、プリムラ？前から言っておるが、風邪には気を付けるんじゃぞ？」

「分かってるよ！」

「その辺も私達が気を付けておこう」

「助かる」

お父さんはその後にもう一度「元気での？」と言って森を去っていった。

あたし達はお父さん達が向かった方向とは別の方から森を出て、カラハ・シャルルに向かっている。

「いい、お父さんだったね？ハ・ミルで会った時は話す余裕なんか無かったから分からなかったけど」

「そうだな。家族というのも、中々いい物だ」

「家族・・・」

「エリー？どうかした？」

「あ……うん。何でもないよ」

「そう？ならいいけど」

ミラが言った家族と言った言葉に反応して、顔を俯かせたエリーに聞くとそう返ってきたら、余り深くは追求しないことにした。

「それにしても……親子の割にあまり似てなかったな？」

「よく言われる」

お父さんはあたしが知らないと思ってるから、今は何も言わない。

いつかお父さんから伝えられたら言えばいいだろうから……。

「そう言えば、森にあったキノコ。あれ、なんて言ったっけ？」

「ケムリダケのこと？」

「それぞれ。あれって食べられるの？」

何となく聞いてみた。

「うん。鍋にしたりすると結構おいしいらしいよ？」

「そうなんですか!？」

ジュードの言葉にエリーが素早く反応した。

それから、ジュードがキノコ料理について説明を、瞳をとってモキ

ラキラさせて聞いていた。

エリーって食いしん坊なんだね？

それから、数十分。

あたし達はカラハ・シャルルに到着した。

ドロツセルにクレイン、ローエンは元気かな？

ミルクテイー

カラハ・シャルルに入ると、ちらほらと兵士の姿が確認できた。ミラ達を探してるのかも知れないけど無視無視。こんな街中で騒ぎを起こす訳には行かないし……。

「ここも変わらないな……お？」

「どうした、プリムラ？」

街を見渡していると正面にある店の前で商品を見ている女の人と側に付いている男の人を見つけた。ミラ達も店を見るためなのか近づいて行ったので、少し驚かせてみようかな、と悪戯心が働き隠れる様にして後をついていく。

「プリムラ、何してるの？」

「しー……少し静かにしてて？」

「?うん」

聞いて来るエリーに指を口に当ててそう頼み、店に着く。

女の人が見ていたのはイフリートが焼いたと言われている商品だった。だが、それをミラが手に取り、起用に投げたりして説明した。

イフリートは秩序を重んじる奴だからこんな紋様は作らない、だそ
うだ。

「ほっほ。面白いですね？四大精霊をまるで知人の様に。ですが、確かに本物はもっと幾何学的な法則性を持つ物です」

男の人はカップが置かれていた皿を取り裏を見た。

「おや、これは18年前に作られた物の様ですが？」

「そ、そうだが・・・」

「可笑しいですね？四大精霊の召還は20年前からできなくなっているはずですが？」

「う・・・」

男の人が言うと商人は何も言えなくなった。

流石、詳しいね。

「残念、本物じゃないのね。でも、買うわ。これは素敵な物だということに変わりはないんだもの」

「はい。お値段の方は勉強させてもらいます」

勉強？なんで？

と思って見ているとどうやら安くすることらしい。

「ありがとう。あなた達のおかげでいいものが買えたわ」

「いや、別に礼を言われる程のことでは無い」

「それでもよ。私はドロツセル・K・シャルよ」

「私は執事のローエンと申します」

「どうやら変わらず元気な様だ。良かった良かった。」

「ねえ、良かったらお礼にお茶を飲んでいかない？私の家は西の方
「わっ！」「きゃあ！」

「お嬢様！」

倒れかかったドロツセルを支えるローエン。それにしても見事な驚
きっぷり。仕掛けたあたしもびっくりだよ。

「大丈夫ですか？」

「ええ。何？今のは？」

「久し振り、ドロツセル、ローエン？変わらず元気みたいだね？」

ミラの後から手を振りながら前に出ると、

「あー！」

「貴女は！」

2人はまた驚いていた。

でも、ぱつと見ただけで分かるって・・・2年前から成長してないってことなのかな？
ちよつとシヨック・・・。

落ち込んでいると、

「久し振りね！プリムラ！心配してたのよ！」

ガバ！つと抱きつかれた。

「ぐは！」

結構な衝撃でした。

そして抱き上げられ怒られた。

「もう！なんの連絡も来ないから、お兄様もローエンも心配してたんだからね！」

「全くです。ですが元気なようで、安心しました」

「あはは、ごめんね？連絡する手紙を書こうとは思ってたけど、いっつも忘れちゃって」

「まあ、いいわ。それで、この方々は貴女のお友達？」

「うん。まず、この人がミラで」

「よろしくな？」

「じつちがジュード」

「よろしくね？」

「この子がエリーで、人形はティポっていつの」

「よろしくお願い……します」

「よろしく」

「喋った！」

またまた、驚くドロツセル。見ていて飽きないな。

「で、あっちにいるのが傭兵のアルヴィン」

「よろしく」

「みんな面白いよ？」

「そうなの？それじゃ、旅のお話、たくさん聞かせてくれる？」

「もちろん！」

それからあかし達はドロツセルの屋敷に向かった。

あかしは抱きかかえられたまま……。

なんかの羞恥プレイ？

数分後屋敷に着くと、ラ・シュガルの人が出てきた。

「ラ・シュガル兵！」

「ちよつと待て」

剣を抜こうとしたミラをアルヴィンが制止した。

結局客人らしき人達は馬車に乗って帰っていった。

「お客様はお帰りの様ですね・・・」

ローエンがぼつりとそう言った。

「お帰り、ドロツセル。あれ、その子はもしかして！」

あたしを見て驚くクレイン。

「やほ〜！クレイン？元気だった？」

「やっぱりプリムラか！久し振りだね！」

クレインはあたしに近づいてきて頭を撫でくり回してきた。

「お兄様！それくらいにしてちょうだい！頭とれちゃうわ！」

「それは無いんじゃないかな？」

「おっと、それは困る。ごめんよ、プリムラ？」

多分、本気で信じてるんだろうね？

そんなことある訳ないじゃん……。

「大丈夫だよ」

「良かった……そちらの皆様はお友達かい？」

「ええ。こちらから、ミラ、ジュード、エリー、ティポ、アルヴィン。今からみんなでお茶をするの」

「そうか。皆さんどうぞ、中へ。ローエン、お茶の準備を頼む。分かっているとと思うが」

「ええ。もちろんわかっておりますとも、旦那様。あれ、でございませぬ？」

そう言うてにやりと笑うローエン。

「ああ。あれだ」

クレインも同じように笑う。

知らない人たちがここだけ見たら、絶対に怪しまれる。現にあたしとドロツセル以外のみんなは不気味がつてるし。エリーなんか怯えてるよ。

「何も起こらないだろうな？」

「どうだろう？」

「怖いです」

とりあえず中へ入り、あたし達はソファに腰掛ける。

ああ、あたしは相変わらずドロツセルに抱きつかれたままだよ？

ローエンは入ってすぐにお茶の準備をしに行った。

「皆さん、お茶の準備が整うまで少々お待ちください。ドロツセル、いい加減変わってくれないか？」

「いやです」

「いいじゃないか？ここまでずっと、一緒だったんだろ？」

「ほんのちよつとだもん」

そう言っつてむくれながらぎゅっと抱きついてくる。

「僕はさつき少しスキンシップを取っただけなんだが？」

「お兄様にはそれで十分です！」

「十分じゃないよ！2年振りに会えたんだから少しくらいいいだろ？」

「私だってそれは同じです！」

それからローエンが来るまでこの2人の問答は続きました。

「お2人とも。プリムラさんが困っていますよ？プリムラさん、お待ちせしました。」

ローエン特性ミルクティーです」

そう言っただけであたしたちの前に出されたのはとてもいい香りのミルクティーだった。

「うわぁ！覚えててくれたの？ローエン！」

「もちろんです。あんなに良い笑顔で言われては、例え忘れようと思っても忘れられませんよ」

ローエンはしみじみと言った。

「ええ、私もあの笑顔は今でもハッキリと覚えてるわ」

「ああ、僕もだよ。本当にハッキリと覚えてる」

ドロツセルとシャルも同じ様に言った。

「そんなに美味しいのか？この紅茶は」

「うん！飲んでみてよ！びっくりするから！」

あたしの言葉にみんながカップをてに取りゆっくりと口に含み、

『！！』

目を見開いて言った。

『美味しい！！』

「でしょ！この味最高なんだよね！流石ローエン！」

ローエン特性ミルクティー大好評。

「旦那様」

「ん？」

ローエンがクレインの耳元で何か言っていると、クレインは立ち上がり一言断ってから席を外した。柱に寄り掛かっていたアルヴィンもそれを追う様に屋敷を出て行った。

「どうしたんでしょうか？」

「何かあったのかもね？まあ、あたし達が気にしても仕方ないし寛いでおこ？」

「うん」

その後、色々話をして今度あたし、エリー、ドロツセルの3人で買い物に行くことになった。

何かいい物あるかな？

話が一段落ついた頃、ミラがそろそろお暇しようと言い、出て行くうとする扉が急に開き、クレインと数人の兵が入ってきた。

兵はミラ達に武器を突きつける。

「すみませんが、皆さんにはまだ帰っていただく訳にはいきません。あなた方がイル・ファンの研究所に侵入したと知った以上はね？」

「あちゃあ・・・」

これはまず

「あ、プリムラはいいよ？」

・・・くないかも？

ちなみに未だドロツセルの腕の中です。

バーミア峡谷へ空翔る魔装獣へ

あの後、クレイン達にイル・ファンで見たことを伝えると、クレインは驚いていた。人体実験までしているとは思わなかったようだ。あたしたちが屋敷に着いた時に出て行ったのはラ・シュガルの王様だったらしい。イル・ファンには結構いたけど、見たことなんて無かったからな・・・全然分かんなかったよ。

大体のことを話し終えて、クレインもドロツセルの友達を捕まえるつもりは無いと言うから、すぐにこの街を出て行くことになった。

「じゃあね、ドロツセル、クレイン、ローエン。元気だね？」

「ああ」

「プリムラもね？今度はちゃんと連絡してよ？」

「ええ」

「行くぞ？」

「うん」

ミラに言われてアルヴィンを探しに先に行ったジュードを追い掛けて、行くと広場にアルヴィンがいて、ミラは近づくなり、

「何故私達を売った？」

その質問にアルヴィンはシャル家が王にいい印象を持っていないことは有名だから、情報交換をしたと言った。

「ひどいぞ！アルヴィンくん！バカ、アホ！もう、略してバホー！」

「何も言わずにどこか行ったりしないでよね！バホー！」

ティポの言葉にあたしも便乗する。

「はいはい、悪かったよ」

「本当に反省してるんですか？」

「お姫様まで・・・俺ってそんなに信用ない？」

「うん」「うん」

あたし、エリー、ティポが揃って言うとアルヴィンはガクッと頂垂れた。

「仕方ないよね？」

「そつだな」

と、暢気に話していると兵士に囲まれた。

「お前らは手配書の！」

手配書なんかあったんだ？知らなかった。

「少し暢気にしすぎたか」

そう言っただけは剣を構えようとする。

その時、

「南西の風……いい風ですね」

と言っただけローエンは現れた。

「ローエン！どうしたの？」

「ほっほ。今度はずいぶんと早く再会できましたね？」

「おい、お前！何者だ！」

「おおっと、怖い怖い」

兵士に武器を突きつけられて、そっぴいなながら兵士の方を向くローエンは振り向きながら気付かれないようにナイフを3本上空に投げた。

それから後にいた兵士にその距離はお互いが一呼吸でフォローできる距離じゃないと言ったり、目の前にいる兵士にはもう少し前だと聞いた。けど、言われた兵士は後に下がった。それによって3人は一か所に集まる。

「いい子ですね」

とローエンが言っただけ同時に、さっき投げたナイフが落ちてきて3人

を拘束した。

「お〜」

素直にすごいと思う。

あたしならあんなコントロールはまずできないし。

「さあ、皆さん。今の内です。こちらへ」

「ああ」

「プリムラ、行くよ？」

「あ、うん」

エリーに呼ばれてあたし達はミラ達の後を追った。

少し走って屋敷の前に着き、そこでローエンから民が徴収されたことと、その民を助ける為にクレインも後を追い、バーミア峡谷へ向かったことを聞いた。

「皆さん、どうかお力を貸してくれませんか？」

「もちろん！」

「ナハティガルのあれを使おうという企みは絶対に阻止しなければならぬからな」

「ありがとうございます」

「それじゃ、準備が整ったら早速向かおうか！」

「うん！」

「がんばるぞー！」

「ちびっ子達は元気だね？」

「なんだと、こんにゃろ」

「いいではありませんか。子どもは元気なのが一番です」

「そうだね」

それからグミなどを十分に買ってからあたし達はクラマ間道からバミア峡谷へ向かい、途中で潜れそうな場所を見つけたから、みんなには先に行つて貰い、穴を抜けると地面にハ・ミルで少年からもらった物と同じ宝珠を見つけた。

「同じだ・・・とりあえずしまつておこう。さて、みんなを追わないと」

穴を通つて行くのは面倒だから跳んで元の道へと戻り、みんなが向

かった方向へ向かった。

数分進むとみんなの姿が見えた。

「お待たせ、みんな」

「ああ、プリムラ。速かったな？私達もついさっき着いた所だ」

「何か見つかったの？」

「とりあえず後でね？今はクレイン達を助けよう」

「ええ」

少し進むと空洞を見つけて、中に入ると何か壁の様な物があって道を遮られていた。

中には徴収されたりしい民がいてクレインもいる。

「旦那様！」

「どうにかして進めないだろうか？」

「止めとけ、腕が吹き飛ぶぞ？」

アルヴィンに言われた、もつすこしで壁に触れそうになった手を引き戻すミラ。

それからローエンが頂上へ行き、そこから飛び降りて中心の石を壊

すと言う作戦を取ることになった。

「それじゃ、みんなにも手伝ってもらおう！」

さっき、ちらつと見たけど浮遊してる子がいた。

その子達に頼めば自力で登っていくよりは遙かに速く到着出来るはずだ。

あたしは先に外に出て、さっき見た子達の所に向かった。

「待って、プリムラ！」

「はいよー」

その途中、突然上空から大きな影が落とされ、それと同時に、

『ピイイイイイイイ！！』

という鳴き声が聞こえた。

「おい・・・なんだよあれ！」

アルヴィンの驚愕する声。エリーはあたしのすこし後でティポを抱き締めて怯えている。

「プリムラ、下がれ！一人では危険だ！」

「急いでー！」

「プリムラさん！」

「あ……ぷ、プリムラ？」

エリーの声は酷く震えていた。

バサ！つと鳴き声の持ち主があたしの前に降り立つ。脚にはあたしとジュードが使う武器と似た形状の武器がついている。

『パイ！パイパイ！パイイイ！』

「……え？」

「……プリムラ！」

ミラ、アルヴィン、ジュードの音が聞こえ後を振り向くと、それぞれ武器を構えて飛びかかって来ていた。後ではローエンが詠唱を始めている。

「待つて待つて！みんなストップ！！」

「な！」

「え！」

「うおつと！」

「む！あいた……」

あたしが言うとミラとアルヴィンは急停止して、アルヴィンはつんのめって転けて、ローエンは術が発動する寸前だったから慌てて止めて舌を噛んだ。

「つてえ〜・・・なんだよ？」

「この子はあかし達の味方だよ？」

「はあ？マジか？」

「うん。でしょ？」

『ピィ〜』

「本当、プリムラ？」

「うん。だから怯えなくていいよ？エリー、ティポ」

エリー達に手を貸して立たせて、そのまま手を繋ぐ。

「確かに敵意は感じないな・・・どうやら適ではないようだ」

「うん」

「ですが、いきなり来た理由は何なのでしょう？」

「それは後で説明する。今はみんなを助けよう！あかしがこの子と一緒に上に行って、石を破壊してくるからみんなはさっきの所で待ってて？エリーも」

「え？本当に大丈夫なの？」

「大丈夫！あかしを信じてよ！」

「うん！」

「それじゃ、お願い！」

『ピィー！』

あたしが背中に乗ると、魔装獣の子は羽を広げて飛び立った。

「頼んだぞ！プリムラ！」

「任せて！」

かなりの速さで頂上まで飛んでいき、ものの数秒もかからずに到着した。

そこからは何か光が溢れている。

「それじゃ、お願い！」

『ピィー！』

穴の上まで行ってから少し上上がり急降下していき、すぐに石が見えてきた。

「あれを壊して！」

『ピイイイイイ！！』

落下の勢いを利用して体を空中で前転させてからかかと落としの要領で石を破壊する。

ガシャアアアン！

と大きな音を立てて地面にばらばらと破片が飛び散り、さっきまで道を塞いでいた壁が無くなった。同時にクレイン達を閉じこめていた装置の扉も開いて、みんなフラフラにならながらも何とか抜け出した。

「旦那様！」

ローエンはクレインの所に駆け寄る。

『プリムラ！』

みんなも中に入ってきた。

「プリムラ、どこも怪我してない？」

「大丈夫だよ？エリー。心配してくれてありがとう」

背中から降りてエリーに言うと、安心したように息をつき、ミラ達も同じように息をついた。

それから、みんなの容態を確認して疲れが酷かった人はエリーの治療術とジュードの治療功で応急処置してもらった。

暫くして気を失っていたクレインも目を覚まし、街に戻ろうとした時、突然さつき石を破壊した部分が光を発し、段々と形作られていき、

『コオオオオ！』

蝶のような生物が形成された。

助けてくれた理由

「何これ！魔物？」

「分からんが・・・来るぞ！構えろ！」

『コオオオオ！』

ミラが言つと同時に謎の生命体はあたし達めがけて飛んできた。

『ピイー！』

ガッ！

「ルーちゃん！」

それをさつき強力してくれたルーちゃんが止める。頂上に向かって飛んできるとき、名前だけ教えてくれたから、そこから『ル』を取ってルーちゃんと呼ぶことにした。

体格は互角くらいの大ささだからそこで両者が競り合う。

『ピイー！ピイイー！』

「あ、そっか！分かった！ローエン！」

「・・・は、はい！何でしょうか？」

突然助けしてくれたルーちゃんを見て、啞然としていたローエン（みんなもだけど）を呼ぶと、少し間があって返事をした。

「あの子の動きを止める術ってある？ルーちゃんじゃないよ？」

「動きを止める・・・はい、在ります。ほんの少し時間が掛かるので、それまでお願いします！皆さん！」

「「ああ！」」

「「うん！」」

みんなで返事をして、取り囲むように陣形を組む。

「みんないくよ！」

そこからローエンの詠唱が終わるまで蝶の様な生命体をその場に留め、

「みなさん離れてください！」

「ルーちゃん！」

『ピイ！』

「エアプレッシャー！」

ゴオオオ！

ぐしゃ！と地面に叩きつけられ動けなくする。

「よっしゃー！アルヴィン！」

「おつよー！」

「いっくぞー！」

アルヴィンに向かって突っ込み、その時同時に生命体にもアッパーを喰らわせる。

「ぶっ飛べー！」

振りかぶった大剣にタイミング良く脚を乗せて落ちてきた生命体に向けて野球の要領で飛ばしてもらい、

「かつとびインパクト！」

ズガアアアン！

『コオオオオオ！！』

渾身のタツクルをかました。

「よっしゃあ！」

「ナイスだちびっ子」

「一言余計だつつの、こんにゃろ」

それによって壁際まで吹っ飛び動かなくなる生命体にミラがとどめを刺そうとした所をジュードが慌てて止めに入る。

「何故止める！」

「よく見て」

「？」

そう言われたあたしたちもその生命体に目を向ける。

すこし待っていると生命体の体が発光し始めて、次第に粒子となり空へ昇っていった。

「これは・・・微精霊・・・。ありがとうジュード。もう少しで、精霊を滅っしてしまつところだった」

「ううん」

「うわあ・・・綺麗」

「うん」

「雪みたいー」

雪か・・・もう暫く見てないな・・・モン高原のみんな元気かな？

何も起こってないといいけど・・・ああ、一度考え出すと心配になつてきた。

んっ・・・。

「プリムラ？どうかした？」

「……え？あ、声に出た？」

「うん。何かあったの？」

「……ちょっと、故郷のみんなを思い出しただけ……でも、心配ないから。ありがとうね？気に掛けてくれて」

「ううん。何も無いならいいの。でも、何かあったら言ってね？」

「ありがとう、エリー」

それからクレイン達を街につれて帰ることになり、空洞から出ようとしたら突然アルヴィンが

「ちょい待ち？結局こいつはなんで助けてくれたんだ？」

と言ってルーちゃんを指さした。

「アルヴィン？指さしたら駄目って親に習わなかったの？」

「はいはい、悪かったよ……で？」

「で？って？」

「だから、どうしてこいつは助けてくれたんだ？後で説明するって、お前言ったろ？」

「ああ、そう言えば」

「言っていたな？」

「うん。なんかさっきの生命体のことがあってすっかり忘れてた」

「そういえばそうでしたね？」

「どうしてなの、プリムラ？」

「くわしく教えてー」

言ったあたし含めアルヴィン以外のみんなが忘れてた。

「まず、説明する前に、ミラ達はソグド湿原であたしとエリー、テイポが遊んでた子のこと覚えてる？」

「ああ、もちろん覚えているが？」

「それが何か関係あるの？」

「ミーくんと同じでこの子、ルーちゃんも魔装獣なの。ほら、爪の所に武器が在るでしょ？これ」

『ピィ』

あたしが言つとルーちゃんは少しだけ浮いてから、その場のみんなに見えるように片足を前に出した。

「あ、ホントだ。プリムラとジュードが使う武器に似てる」

「言われたみればそうだな」

「それで・・・同じ魔装獣だから、何なんだ？」

「この子供はどれだけ離れていてもお互いのことを感じる事が出来るの。簡単に言えば常にみんなでリンクしてるって感じかな？それで、ミーさんから面白い子がいるってことと、特徴を聞いて、探して見つけたのが・・・」

「貴女なのですね？」

「そういうこと。助けてくれたのは、なんか焦ってるように見えただからだって。」

「そうなんですよ、ルーちゃん？」

ローエンの言葉に頷きルーちゃんに問いかけると、

『ピィー！』

と元気な返事が返ってきた。

「納得できた？」

「・・・まあ、なんとかかな？」

とりあえずは納得したみたいだ。

「しかし、常にリンクとはな・・・」

「うん、すごいよね？距離も関係ないんだから、尚更」

「それなら他のみんなの場所も分かるの？」

エリーが聞いてきた。

「どっ？」

『パイ！パイ……パイ、パイ……』

「出来るって……。でも、仲間の何体かの存在を20年前から感じられない、とも言ってる……。その理由はずっと分からないって。

「……」

ルーちゃんの声は酷く悲しそうだった。

それだけ仲間のことを思っているのだろう。

「だが、存在を感じないと言うことはもう居ないと言うことでは無いのか？」

『パイ、パイ！パイイイ！』

「そんなことは無いって。確かにルーちゃんとミーくん、それにまだ会ってないけど、他の子達も生きているから、感じる事が出来ない子も絶対に生きてる筈だよ？」

何かに邪魔されて、感じる事が出来ないだけかも知れないし……

「

「それなら、わたしたちで探しませんか？」

「エリー？」

いきなりのエリーの発言にあたしだけじゃなくミラ達も驚いている。

「プリムラの友達の友達なら、わたしの友達でもあるから・・・ミラたちもやることがあるのは分かっているけど、それが終わった後でも・・・だめ、ですか？」

「エリーゼ・・・。ミラ？」

「ああ。確かにイル・ファンに向かうことが現在の優先事項だが、道すがら探す分には何の問題も無いだろう。プリムラの言う通り、何かによって存在を感じられない可能性もあるからな」

「たく・・・仕方ねえな。協力してやるよ？」

「エリー、ジュード、ミラ、アルヴィン・・・ありがとう」

『ピイ！ピイ！』

「ルーちゃんも喜んでるよ？」

「そうか・・・」

それから、ルーちゃんとはそこで別れてあたし達はカラハ・シャー
ルへと戻った。

四大精霊とした約束

「ほらこれ、ハ・ミルで少年からもらった物と一緒にでしょ？」

「ほんとだ……どこで見つけたの？」

「ほら、バーミア峡谷に行く時に一旦別れたでしょ？その時だよ」

カラハ・シャルルに戻ってきて、色々話し合った後ガンダラ要塞を突破することになった。今日はもう特にするのも無いから、あたしはエリー、ドロツセルと一緒に部屋で遊んでいる。

それで、クラマ間道で拾った宝珠を取り出して、少年からもらった物も含めて2人とティポに見せる。

「綺麗ね〜」

「もしかしたら世界中に散らばってるかも知れないよ？」

ハ・ミルにあった物が、結構離れているここカラハ・シャルルの近くに合ったんだから可能性は十分にあると思う。

「それなら、プリムラはそれを探すの？」

「暇があつたら探そうかなって思ってる。無いかも知れないけど……」

まずはみんなを助け出すことが先決だ。

「ふわぁ〜・・・なんだか、眠くなってきた」

「あらあら、疲れちゃったのね？もう遅いから今日は寝ましようか
「？」

「う〜・・・」

本当に眠いようできくんかくんしてる。

「もう！エリーったら可愛いんだから！」

「プリムラも可愛い！」

あたしがエリーに抱きつきドロツセルがあたしに抱きつく。

「さ、エリーはホントに限界みたいだから寝ましよう？」

「うん。おあエリー？もう寝ましようね〜」

「はい」

「ぼくも眠い〜」

ドロツセルのベッドに左からドロツセル、あたし、エリー、ティポ
の順で横になると、

「すう〜・・・すう〜・・・」

エリーはすぐに眠った。

このままじゃ寝苦しいかと思って、首もとを少し開けて空気が通りやすい様にする。

「おやすみ、エリー、ティポ」

お疲れ様。

「プリムラはエリーのことをとても大切に思ってるのね？姉妹みたい」

「そうかな？エリーもそう思ってくれてるといいけど・・・」

「きっと思ってるわよ」

「そうかな？」

本当にそうだといいな。

「おやすみ、ドロツセル」

「ええ、お休み。プリムラ」

その後すぐにドロツセルの寝息が聞こえてきた。

あたしは何故か眠れなくて、2人を起こさないように静かに部屋を出て今は外で星を眺めている。

「きれい」

「そうだね」

「え？おお！クレイン！」

突然聞こえた声に振り向くとクレインがいた。

「体はもう大丈夫なの？」

「ああ、心配ないよ？」

そう言いながら隣に座るクレイン。

「そっか。・・・この街は変わらないえ・・・相変わらず賑わっていて、みんなが楽しそう」

「そうだね・・・でも、僕は変わる必要は無いと思ってるよ。今のままでも、十分楽しいからね」

「うん。あたしもそれは同じ・・・」

「そっか」

「・・・」

「・・・」

サアアア・・・心地良い風が吹いた。

「シルフ」

「え？」

「あ、ううん。何でもない」

「何でもないようには見えないよ？僕で良ければ相談にのるが」

「……………それじゃあ、聞いてくれる？」

「ああ」

「ありがとう。あたしが旅に出たばかりの頃のことなんだけど……」

と前置きしてあたしは話し始める。

ミラと初めて会ってから、1週間位、そこで生活させてもらった時にね？四大精霊と色々して遊んだんだ。ウンディーネと一緒に水の上を歩いたり、イフリートと戦ったり、ノームと地中に潜ったり、シルフと空を飛んだりして……。

それで、たまに騒ぎすぎてミラに怒られたりウンディーネに怒られたりしたけど、楽しかったんだ。

それまでのあたしに取って外の世界はモン高原くらいしか無かったから。

だから、旅に出てからは毎日が本当に楽しかった。

ミラ所に行ってから尚更。

それで、別れる時にみんなと約束したの。

「約束？」

「そう。ウンディーネとはいつか世界中の海を歩こうって。イフリートとは必ず決着を着けるって。

ノームとは全身が泥んこになるまで遊ぼうって。

シルフとはリーゼ・マクシアの空を隅々まで飛ぼうって」

どれもみんなに取っては簡単なことだけど、あたしには出来ない」とだ。

「でも、みんなは今捕まってる。だから助けなきゃ」

「だから。イル・ファンに？」

「うん」

「そうか・・・ならば僕も協力するよ」

「え？いいの？」

「勿論だ。なにかあったら遠慮無く言ってくれ」

「・・・ありがとう」

「さあ、もう寝なさい？今日は疲れただろ？」

「そうだね。今ならぐっすり眠れるかもだし・・・お休み、クレイン」

「ああ、お休み。プリムラ」

あたしは屋敷に戻り、また2人が目を覚まさないようにゆっくりと扉を開けて部屋に入ってベッドに入り目を閉じた。さっきとは裏腹に睡魔はすぐに襲ってきてあたしは眠りについた。

待っててね、みんな？絶対に助け出すから。

ガンダラ要塞へ暫しの別れ

「それでは、ローエン頼むよ?」

「はい」

今日はローエンにガンダラ要塞の様子を見に行ってもらうことになった。それで、馬が在れば今日中に戻ってくるかも知れないから、あたし、エリー、ミラ、ドロツセルの4人で買い物に行くことになったんだけど、あたしは忘れ物をしたのでそれを取りに帰ってきて、今また外に出た所だ。

「忘れ物はあつたかい?」

「うん。それじゃ行ってくるね?」

「気を付けてね?」

「小さいからな。踏まれるなよ?」

「そんなに小さく・・・!アルヴィン!あそこ!」

いつもの様にむかつくことを言ってくるアルヴィンに言い返そうとしたら視界に屋根の上からこちらをボウガンでねらっている兵士が目に入りそこを指さす。

「?・・・な!」

「あれは!」

その兵士は気付かれたことに焦って慌ててボウガンを打ってきた。そのお陰でねらいがぶれたのかボウガンから放たれた矢は扉に刺さっただけで、誰にも当たるとは無かった。

「一体誰が！」

「そんなことは後！アルヴィン！」

「分かってる！」

そう言つて一発でその兵士を仕留めるアルヴィン。流石。

「旦那様！」

「大丈夫だ、ローエン。プリムラに気付かれたことで狙いがぶれたのだらう」

「そうですか・・・ふう、寿命が縮むかと思いましたよ・・・何はともあれ、無事で本当に良かった」

「ああ。プリムラに救われたな。ありがとう」

「ううん。無事で良かった」

それからクレインは心配したローエンに屋敷に居てくださいと言われて、狙われた直後だから素直に従った。

良かった・・・本当に。

そう思っていると、広場の方が騒がしくなった。

「何だ？」

あつちは……。

「エリー達が行った所！」

「何!？」

あたしは広場に向かって駆けだした。後ではアルヴィンとジュードが何か言っているが聞いている暇はない。広場に着くとミラ達が馬車に乗せられようとしているところだった。

「エリー！」

「待て！プリムラ！」

駆けよろうとしたらアルヴィンに腕を掴まれた。振り解こうとしても力に差が在りすぎて出来ない。結局ミラだけでなくエリー達も連れ去られるのを黙って見ているしかなかった。

「何で止めたの？」

「考えれば分かるだろ？あそこからじゃ、間に合わない。それどころかお前まで連れて行かれたかも知れないんだ……」

「アルヴィンの言う通りだよ、プリムラ。一度屋敷に戻るっ？」

2人の言うことは正しくてあたしは何も言い返さなかった。それか

ら屋敷に戻り、クレインにドロツセルがつれて行かれたことを話すと、怒った。

「ごめん・・・あたしが付いていれば、せめてドロツセル1人は逃がせたかも知れないのに」

「あ・・・いや、済まない。僕も取り乱してしまった。プリムラは何も悪くない。

確かにドロツセルは連れて行かれたが、君が戻ってきたお陰で僕は死なずに済んだんだ」

「その通りです」

「・・・うん」

それから話し合った結果、これからガンダラ要塞へ乗り込むことになった。

タラス街道を抜けてガンダラ要塞に到着し、ジュードがローエンに言われて、潜入していた兵士に合図を送り、返事が返ってきたからその通風口から中に進入する。兵士に要塞のことを聞いてから、途中攻撃を仕掛けてくる兵士達を撃退しつつ制御室を目指す。

「この先？」

「ええ、間違い無いでしょう」

「よし、行くうー！」

「おつよ」

制御室の中に入ると、

「ナハティガル！」

ミラの声が聞こえた。

「お前の下らん野望。ここで終わりにさせてもらっぞ！」

「お前のような小娘が精霊の主だと？ふん！笑わせる！」

階段の所まで着くと、ナハティガルが剣を掴みミラを投げ飛ばした。倒れるミラに向かってとどめを刺そうと剣を投げるナハティガル。その剣が当たる直前ローエンがナイフで軌道をずらし剣は壁に刺さった。

「「ミラ！」」

あたしとジュードはローエンに続いて柵から飛び降りる。

「「プリムラ！」」

「プリムラ、ジュード！何故来た！」

「助ける為に決まってるでしょうが！・・・あんたが王様？」

「だから何だと言うのだ？僕はクルスニクの槍の力をもってア・ジュールをも平らげる」

「そんなことさせる訳無いでしょ？それに、あんたなんかにおじちゃんを負けない」

「おじちゃんだと？」

ナハティガルが一瞬怪訝な顔をしたけど、後に控えていた参謀があたしたちに構うことは無いと言うと、この部屋から出て行った。

「逃がすか！」

壁に突き刺さっていた剣を抜いて、閉まる寸前に通過するミラ。突然のことであたしは反応できなかった。ジュードが扉に近づいて何度も叩くけど、びくともしない。

「ミラ！ミラ！」

「落ち着いて、ジュード。ここは制御室だよ？ローエン」

「ええ・・・これからロックを解除します。皆さんも手伝ってください！」

ローエンに言われてあたし達はロックを解除するため、ローエンの展開した魔法陣にマナを注いでいく。でも、5人いるにも関わらず中々マナは溜まらず、途中、爆発音が聞こえた。

「ティポ、起きて！お願い！」

エリーの必死の呼びかけにさっきまで動かなかったティポが目を見ます。その途端、マナは溜まり扉のロックが解除された。

制御室を出ておお通りに出ると、倒れているミラがいて、ナハティガと参謀は既にいなかった。

「「ミラ！」」

あたしとジュードが駆け寄り見たのは、おそらくさっきの爆発に寄って酷い怪我を負ったミラ。ジュードが急いで治療術を施し、少ししてエリーもそれに加わるが、すぐに兵士が追ってきて撤退を余儀なくされ、準備していた馬車に乗って要塞を出てカラハ・シャルへ向かう。

馬車の中ではエリーがずっと泣いていて、ジュードはひたすらミラに治療術を掛けていた。

「みんな！無事だったか！」

屋敷着くや否やクレインが聞いてきたが、アルヴィンに運ばれているミラを見て顔色が変わった。今のミラはそれほどの怪我をしているのだから、当たり前だ。

「すぐに医者を！」

「は、はい！」

近くに居た兵士にそう告げて、ミラを屋敷の部屋に運んで待つこと数十分。医者が来てミラを診察した。医者によると今日が峠らしい。

ミラのことは医者とジュードに任せてあたし達は下で待つことになった。

「ミラ・・・大丈夫かな？」

「一目で重傷なのは分かるからね。・・・最悪の事態も考えておかないといけないかも知れない」

「ミラ君死んじゃうのー？」

ティポが言った言葉にあたし達は何も返さなかった。

翌日、ミラは目を覚ましたが、歩けなくなったことをジュードから聞いた。

「そんな・・・」

「治せないんですか？」

「少なくとも子の街じゃ治せない。だから、ル・ロンドに行こうと思っただ」

ル・ロンド。

2年前レイアと合った所だ。そっか、ジュードもあの街の出身なんだよね。

「僕の父さんが昔、足の動かなくなった患者を治療したことがあるんだ。ミラにはもう話してる」

「てことはすぐに出発するの？」

「ううん。今日は休んで出発は明日にするつもり。クレインさん、馬を一頭貸してくれませんか？」

「ああ、それくらいならお安い御用だ。君たちが出発するまでには準備しておくよ」

「ありがとうございます。プリムラもどうするか明日までに決めておいてくれるかな？」

クレインから視線をあたしに移して聞いてくるジュードに分かったとだけ答えて、ドロツセルの隣に座った。エリーも隣に腰掛ける。その後ジュードはアルヴィンにも知らせてくると言っけて屋敷を出て行った。

「プリムラとエリーはどうするの？」

「勿論付いていくよ。ここまで一緒に来たんだから。それにル・ロンドには友達もいるからね？
久し振りに会いたいし・・・」

「そっか。あ、そっだ、プリムラ」

「何？」

ドロツセルはソファから立ち後の壺などが飾ってある所に行き何かを持って戻ってきた。

「これ、あなたにあげるわ。昨日の夜に見つけたの」

そう言って差し出してきたのはこの間話した宝珠だった。話しを聞いて、この家にも無いか探してみた所、壺の所で見つけたらしい。

「いいの？もしかしたら大事な物かもしれないよ？」

「私もそう思ってお兄様に聞いたけど、お兄様もこれがあったことを知らなかったの。だから大丈夫よ？」

クレインが知らないなら家に伝わる物とかでも無いのだろう。それなら大丈夫か。

「分かった。ありがとう、ドロツセル」

宝珠を受け取って両手の上に乗せる。今はしまつ物が無いからこつするしかないんだよね。

「いいのよ……エリーはどうするの？」

「わたしも……付いていきたいです」

「あたしは大歓迎だよ！きっと、レイアといい友達になれると思うし！」

正確は全く違うけど、レイアなら大丈夫だと思う。

「れいあ？」

「だれ？」

「ル・ロンドで民宿をしてる一家の看板娘だよ。2年前にお世話になったんだけど、いい所だよ？」

本当に家族みたいにお客さんに接するからね・・・今日も元気に営業中かな？

「さて、ミラの所に行くのか？おしゃべりするくらいなら大丈夫でしょ」

「うん」

「私は少しお兄様の所に行ってくるわね？」

「うん、行ってらっしゃい」

ドロツセルを見送ってあたしとエリー、ティポはミラの所に向かった。

「ミラ、入るよ？」

『その声はプリムラか？いいぞ？』

扉を開けて中に入りベッドに座っているミラの元へ向かう。足両足には包帯が捲いてあり傷の酷さを物語っている。

「ミラ・・・足、大丈夫・・・なの？」

エリーが聞いた。

「大丈夫では無いが歩くこと以外なら問題はない」

「そっか・・・良かった」

それから色々な話しをしてその日は過ぎ、晩ご飯はミラの部屋でみんな一緒に食べた。ジュードがその時言っていたけど、アルヴィンとはここでお別れみたいだ。なんでも新しい仕事が見つかったらしいとのこと。

後で文句言ってこようかな？

と思ったけど、やっぱり止めてその日は大人しく眠った。

翌日早朝。

アルヴィンを除いてあたし達は全員広場にいる。

「クレインさん、エリーゼのことよろしくお願いします。元気でね、エリーゼ？」

そう、エリーゼは付いて行きたいと言っただけど、ジュードが許してくれなかった。確かにこの先危険はもっと増えるだろうけど・・・ジュードってたまに強引なところがあるよね？例えば今みたいに。

それで、エリーが行かないならあたしも行かないことにしてここに一緒に残ることにした。

まあ、お父さんに頼まれたっていうのも勿論あるんだけど、何よりあたしが一緒にエリーと一緒にいたいからね。ドロツセル達も問題ないと言ってくれたし。

「プリムラも元気だな？またいつか会おう？」

「もちろん。ミラこそ絶対に足を治しなよ？」

「分かっているさ。では、ジュードそろそろ行くっ」

「うん。それじゃ、みんな元気だね？」

「またね」

ミラとジュードが見えなくなるまで見送ってあたし達は屋敷に戻った。

それから、2週間とちよつと。

ドロツセルとクレインにめっちゃくちゃ可愛がられた。

それはもうめっちゃくちゃに……。

フルメンバー

「つかれた〜・・・」

もう、最近はシャル兄妹に構われすぎて休む暇がない。大体クレイン、領主の仕事はいいの？と思って聞いてみると、問題無いとはつきり言われた。ローエンの聞いてみたら、実際その通りの様であたしが眠った後などの時間を使って片付けているみたいだ。

ほぼ1日中ドロツセル、エリーと一緒に遊んでるのに、よくそんな体力あるよね？

「エリー・・・今日のご飯、何か食べたいのある？」

ベッドに寝ころびながら聞いて見たけど返事が無くて、もう一度名前を呼んだら反応してくれた。最近エリーはこんな風になることが多い。原因はまあ、みんなが一緒じゃないことなんだろうなってことは、容易に想像出来る。

「やっぱり寂しい？みんなバラバラになっちゃったのが」

「・・・うん」

「ミラの足治ったかな〜」

あれから2週間ちよつと。上手く行っていれば治療は終わって、今頃リハビリをしているのかも知れないけど・・・あの怪我だ、仮に治っていてもその後のリハビリはかなり辛いものになるだろう。

「心配なら、ル・ロンドに行ってみる？頼めば行けるかも知れないよ？」

「ホント!？」

おお、思った以上の食いつき。

「うん。明日聞いてみようか？」

「うん！」

「やったー！」

「ふふ……。それで、食べたいものある？」

「あ、えっと……。ハンバーグが食べたい」

ハンバーグか……。確かに最近はしてないな。

「よし、分かった。すぐに準備するから待っててね？」

「はい」

あたしは下に降りて言ってローエンに今日の晩ご飯を伝え厨房に向かった。

「こんにちは」

「おお、嬢ちゃんか！今日の晩飯はなんだい？」

「ハンバーグだよ？挽肉ある？」

「ああ、もちろん！ちよつと待ってな！」

料理長さんはそう言って食材を保管している所に向かった。

最近はいつもあたしがエリーたちのご飯を作っているから、すっかり常連になったんだよね。

料理長さんが戻ってくるまでの間、あたしは厨房の人たちとおしゃべりをしていた。何日か前に、おしゃべりしていてもいいのか聞いたら、

「心配すんな！嬢ちゃんが来ている間は俺たちの仕事は一旦休憩ってことになったんだよ」

と言われた。

どうして？

ま、いいか。

「待たせたな嬢ちゃん。材料だ」

「ありがとうございます、料理長さん。器具借りますね？」

「おお。他には何かいる物あるか？」

「え〜っと・・・飲み物くらいかな？」

かちやかちやと準備を進めながら答える。

「飲み物か・・・今あるのはオレンジジュースくらいだが、それで
もいいか？」

「もちろん」

「OK。出来る頃に出してくるよ」

「はい。さて、始めますか」

それから20〜30分ほどかけてハンバーグを作り、厨房の人たちは用意してくれた皿に盛りつけて完成。飲み物は食べる時にグラスに注げばOK。

「それじゃ、ありがとうございました」

「いってことよ。また来るの楽しみにしてるからな？」

「うん」

お盆をもって厨房からエントランスに移動する。

定位置において、

「ご飯出来たよー！」

と叫ぶ。

『はいー！』

みんなが返事をしてそれから、それぞれが部屋から出てきて席に着いた。

「今日はハンバーグなのね！」

「いつものことながら、美味しそうだ」

「そうですね・・・」

「おいしそう！」

「はやくたべよー」

「そうだね。それじゃ、いただきますー！」

『いただきますー！』

それからみんなでハンバーグを食べて、あたしは明日に持ち越すのは面倒だと思ってこの場で聞くことにした。

「ねえ、クレイン。あたしたち、ル・ロンドに行きたいんだけど、明日から行ってもいい？」

「え、どうしたんだい？急に」

「確かに急だけど、エリーが寂しがってるからね・・・ローエンもなんか余り元気が無いし、休暇にもちょうどいいと思うんだ。ダメかな？」

最初はエリー、途中からローエンに視線を移して言うと、ローエンは驚いた様な顔をした。

「・・・いや、いいよ。行っておいで？ローエンもだ。2人を守ってあげてくれ」

「旦那様・・・はい、お任せ下さい」

「それじゃ、しばらく2人には会えないのね？残念だわ」

「ごめんね、ドロツセル。お土産買って帰ってくるから」

「ううん、気にしないでいいわ。でも、絶対に帰ってくるのよ？もし、何か事情があって時間がかかりたりするなら、その時はちゃんと連絡してね？」

「うん」

それから食器を片付けるため厨房に持って行き、みんなにも明日からしばらく不在になることを伝えただけど、えらく騒がれた。

なんとか説得して、絶対に戻ってくるからって言って、これまでのお礼を言ってから部屋に戻った。

その時に厨房の方からなぜか泣き声が聞こえたけど、何だろう？何かあったのかな？

「それじゃ、明日は早いだろうから今日はもう寝ましようか？」

「ドロツセルまで合わせなくてもいいよ？灯りが点いても寝るとは出来るから」

「私が一緒に寝たいの。ほら、エリーとティポも」

「うん」

「ねようねよう」

ティポのテンションはどう考えてもこれから寝るものじゃないよね？

そんなことを思いながら並んで布団に横になり、目を閉じる。

「おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

「おやすみです」

「おやすみ」

翌朝、ドロツセルとクレインにもう一度挨拶をしかねあしたちはル・ロンドに向けて出発した。

途中に会った子達とおしゃべりしながら一緒に海停まで行き、さすがにそのまま入る訳にはいけないのでそこでお別れする。船の時間を聞くと30分ほどで次の便が出るから、もう乗っけていてもいいと言われた。

「それじゃ、乗って待ってようか？」

「うん」

「オツケー」

「そうですね」

船に乗り約30分後、船は出発した。

ル・ロンドの海停に到着して、少しエリーが疲れたらしいので少しベンチに座って休憩していたらミラとジュード、それにレイアが来た。

「あ、ミラ！」

エリーは大分回復した様でミラを見つめるや否や駆けだした。

あたし達もミラ達の所に向かった。

「やつほー、レイア。元気だった？」

「え？あ、プリムラ！久し振りね！」

「レイア、プリムラと知り合いだったの？」

「うん、2年前だったかな？しばらくわたしの家に泊まっていたの。それにしても、相変わらず小さいね？」

「なんだこんにやろ」

「あいた。ごめんごめん」

それから、あたし達がない間のことを聞いて、ミラ達は診療所に戻ると言ったのであたし達はロランドに行くことにした。そこで、ソニアさんたちにも挨拶して部屋を取る。

あたしはその後、バイカール廃抗に行った。

理由は、カラハ・シャルルにいる間にルーちゃんとも何度か遊んだんだけど、その時にここにいるってことを聞いたんだよね。だから存在をかんじることが出来ない子達のことを何か知ってることは無いか聞こうと思って来た……。

「それで、ローくんは何か知ってる？」

頭の上につつぶせに寝ながらのあたしの問いに首を横に振る。少し落ちそうになって危なかった。

「そっか……どうしてなんだらうね？」

「グゥ……グア……」

「そうだよね・・・分かれれば苦労しないもんね。もし、こことは別の世界があるとしたら、そこにいるって可能性がないことも無いかもしれないけど」

異世界があるとは思えないしな・・・あったとしたらとつくに誰かが突き止めていてもおかしく無いだろうし。まあ、わからないことを考えても仕方ないか。

「ローくん、この宝珠をどこかで見たことある？」

気持ちを切り替えて見せながら聞くとローくんは近くの地面を掘り始めて、すぐに宝珠が出てきた。

埋めていたのは以前、この子が小さな穴の先で見つけたのを、ローくんにあげたらしい。多分貢ぎ物っていうか、そんな感じのものだったんだろう。

「グア」

「ホントにいいの？」

「グア、グア」

「そっか・・・分かった。ありがとうね？」

「グア」

ローくんにお礼を言ってから廃抗を出てル・ロンドに戻る途中のポルテア森道でアークを見つけて、中を見ると宝珠だった。

「おお」

なんか素直に嬉しかった。

ロランドに戻ってエリーたちとご飯を食べてから眠り、翌日。

ミラとジュードが宿に来て、ローエンに迷いながらも進めばいいと言って、ローエンはミラ達についていくことになった。エリーもつい行きたいと言っただけ、また許してもらえなかった。

「エリー……」

「プリムラぁ……」

「よしよし」

あたしよりも少し大きいエリーの頭を撫でた。

海停に行ってから船に乗ろうとしたらジュードの両親が来てお父さんの方が、ジュードに行つては行けないと言っただけ、その時に、

「おいおい、俺たちどんな縁なんだよ？」

結構懐かしい声が聞こえた。

アルヴィンだ。

その後、まあなんだかんだでエリーもついて行けることになった。

ジュードは両親に行つてきますと言つて船に乗る。

「それで？これからどうするんだ？」

「それ乗つてから聞く？ホントアルヴィンってそういう所変わらな
いよね？」

「そりゃ、俺が来たのはエリーゼ姫とちびっ子のためだからな？」

「あれ？あたしも入つてんの？」

「当然。で、どうすんの？」

「ファイザバード沼野を通つてイル・ファンへ向かいますので、ま
ずはラコルム街道を通らないといけませんね」

「ちよい待ち。そこつてラコルムの主つて魔物が出るんじゃないかっ
たっけ？」

ローエンはアルヴィンが意外に知っていることを聞いて関心しなが
ら説明した。よく分からなかったけど、とりあえず今は問題ないそ
うだ。

予定を確認し終わった時、船の人が突然叫び声を上げた。

ジュードとアルヴィンが向かつて行つたけど、その時のジュードの

顔がなんとも微妙な顔をしていた。

まあ、中にいたのが、

「いや、待ちくたびれて寝ちゃったよ」

レイアだったからね……。

んで、レイアも一緒に旅をすることになった。

その理由はミラみたいに強くなりたいたらってことと、後100個くらいあるらしいけど、それはミラに渡した紙に書いてあるみたいだからあかし達は分からなかったが、ミラは人間らしくて気に入ったみたいだ。

「それじゃ、みんなよろしくね？」

それからあかし達はラコルム街道を通ってまずはシャン・ドウに向かった。

ドロツセルたちにはいつ連絡しようか？

戦線離脱くエリーゼ達の決意く

現在ラコルム街道魔物達に戦闘訓練をしてもらいながら進行中。なんか、ミラ達がル・ロンドに行つてから、医療ジンテクスに必要な精霊の化石を取りに行つた時でつかい魔物が出て大変だったみたいでね？

それにそこに行くまでも魔物は結構いた訳で、あたしがいた所為で危機感と言うかそんな感じの物が余り働かなくなつたみたいで・
・王を討とうとしているのに今の状態では返り討ち必須、とのローエンの言葉により特訓をすることになりました。

「ミラさん！ジュードさん！離れてください！ブルースファイア！」

「みんなも避難！そのままだと当たるよ！」

ローエンの放つたブルースファイアが当たる直前にあたしの声によつてその場から離れるみんな。巨大な水球はそのまま地面に当たり弾けて消えた。

「とりあえず一旦休憩しないか？流石に疲れたろ？」

「アルヴィンくんの言う通りかも・・・結構しんどい」

「わたしも・・・疲れました」

「へとへと〜」

そのとたんへなへなと座り込むレイア、エリー。そして落下するテイポ。
アルヴィンとローエンは流石といつか、これくらいなら平気みたいでピンピンしてる。

ミラとジュードは座りこむほどでは無いけれど、肩で息をしている。

あたしは全然平気。
戦闘っていうより遊んでるって感覚だし。

「ありがとうね？みんなもゆっくり休んで？」

あたしの言葉に頷いてそれぞれの場所に戻るみんな。

「またね〜」

「プリムラさんは元気ですね？」

「子どもは風の子っていうからな・・・」

「そういう2人だって元気じゃん。やっぱり経験？」

エリーたちとは違って息も切れてないし。

「確かにそれはあるだろうけどな」

「そうですね・・・私達の場合はこういった場所で魔物との戦闘が起こらないと言つのが考えられないのですよ」

まあ、確かにそうだよね・・・こういった場所を魔物との戦闘を避

けて通るなんて難しいだろうし。

あたしだって、お父さんに育てられたからみんなの言葉が分かるようになったけど、もし別の誰かに育てられていたら普通に戦っていただろう。

何の躊躇いも無く、仲良くなるううなんて思いもせず……。

でも、それは嫌かな？

この力があるお陰でみんなと仲良くなれるんだから。

この先もいろんな子たちと仲良くなりたいし。

あたしがそんな風に考えていると、

「プリムラ、話がある。皆も聞いてくれ」

ミラがそう言った。

「どうしたの？」

「先ほど、ジュードと話あったのだが、プリムラ……私たちは一度別行動を取らないか？」

その言葉にあたしとジュードを除くみんなが言葉を失い、しばらくの沈黙が落ちた。

「ど、どうして・・・ですか？」

その沈黙を破ったのはエリー。

ミラはその問いにどう答えればいいのか迷っている感じた。

珍しく顔を顰めていたから・・・。

「あたしがいると、みんなが強くなれないからだよ」

「え・・・？」

「でしょ？ミラ、ジュード？」

「」
「」
「」

「そつなの？ジュード？」

今度はレイアが聞いた。

でも、ジュードは目をそらして沈黙するだけ。

「・・・その通りだ」

ミラが答えた。

「今の私たちは弱い。確かにプリムラのお陰で余計な戦いをする必要は無いが、それは私達が強くなる機会を逃しているということでもある・・・こうして休んでいる間も、魔物達は襲ってこないのがいい証拠でもあるだろう?」

「それは・・・」

何も言えないレイア。

確かにそうだよな?

本当のことを正面から言われたら人は何も言い返せないし、言い返そうとしても今のレイアの様言葉に詰まる。

「でも、それなら・・・プリムラが、みんなに頼んで本気で戦ってもらえば!」

「それじゃ、駄目なんだよ。エリー」

「プリムラ?」

「どうしてさー!」

今にも泣きそうな顔をしながらあたしを見るエリーとティポ。

「あたしが頼まないと本気でこないなら、それ以外は手を抜いてるってこと。それは分かるよね?」

「うん・・・」

「それなら、この先にいる魔物がもっと強かったら・・・どうなる？
そんな魔物が出てきた時、エリー達は勝てる？」

「・・・・・・・・・・」

エリーも沈黙する。

「そうだな・・・実際俺も最近まで一人で戦ってたが、そんな時は結構きつかった。ジュード達が言うように一旦別行動を取った方が、互いの為にはなるかも知れないな？」

「プリムラさんはいいのですか？」

アルヴィンが言った後にローエンがあたしに聞いてきた。

「まあ、寂しいけどね？それで、みんなの為になるならいいよ？
あたしも薄々感じてことだから・・・むしろミラとジュードには感謝してる。」

はつきり言ってくれてありがとう

あたしはそう言って笑った。

みんなの目にこの時のあたしがどう映ったかは分からないけど、も
しかしたら悲しそうだったのかも知れない。

「ごめん、プリムラ・・・僕たちも本当は一緒にいたいけど」

「分かってるよ、ジュード。これまであたしの我が侷につきあって

くれてありがとうね？

ミラも・・・我が俣を言っても良いって言ってくれた時、嬉しかったよ？」

「プリムラ・・・すまない、あの時私が甘く考えていたばかりに、今こうしてお前に辛い思いをさせてしまっている」

「それだって、元はといえばあたしの所為なんだからさ・・・ミラは気にしなくていいよ？

まあ、適当にぶらぶらしてるよ。ミーくんたちの仲間を探さないといけないから。

・・・それじゃ、いつまでもいると悲しくなるから、もう行くね？本当にありがとう。

付き合ってくれて」

あたしはそう言ってこの場を去ろうとしたが、

「プリムラ！」

エリーが抱きついて来たから止まってしまった。

「やめてよ、エリー・・・悲しくなっちゃうでしょ？」

「それでも・・・ぐす・・・いや！プリムラ・・・ひっく・・・と、一緒にいたい！」

エリーの声は震えていた。多分泣いているんだと思う。

「だめだよ・・・あたしといたらエリーも強くなれないよ？」

「強く……うう……なれなくても！プリムラと……ぐす……
いられないよりは、いい！」

「そうだよー！いっしょにいっしょー！」

「エリーゼさん、ティポさん」

泣いているエリーにローエンが語りかけた。

「悲しい思いをしているのはプリムラさんも同じなのです。いえ……
私たちよりも悲しい筈です」

「ローエン……」

「ありがとう、ローエン……エリー？」

「……うう……」

「約束、守れなくてごめんね？戻ってきたら……必ず守るから」

あたしはそう言ってその場から逃げるように駆けだした。

エリーの泣き声を耳に残しながら

〈SIDE OUT〉

〈SIDE エリーゼ〉

プリムラは来た道に戻って行きました。

わたしはそれを止めることが出来ず、その場に泣き崩れてしまいました。

「プリムラぁ・・・プリムラ・・・わああああん！」

約束したのに！

「まだ！何もしてない！う、うう・・・まだぁ・・・やりたいこと！たくさん！あるのに！」

「エリーゼ・・・」

「どうしてですか！どうして！」

泣きながらミラに向かって叫んだ。

「魔物たちと戦わなくても！わたしたちで特訓すればいいじゃないですか！

どうして！・・・どうしてえ・・・」

「確かにそうかも知れない。だが・・・お前は私たちと本気で戦えるのか？」

「　　っ！」

何も言えなかった。

私がミラたちと本気で戦えるわけがない・・・友達を攻撃するなんて、出来るわけがない。

「エリーゼ・・・強くなるっ？」

「レイア？」

「一緒に強くなって、もうプリムラが悲しい思いをしなくていいように・・・」

「レイアの言う通りだ。俺だってあいつのあんな顔は、もう見たくない」

「うん。だから強くなるっ？みんな一緒に・・・もう二度とプリムラを悲しませなくて済むように」

「ええ。いくら友を止める為とはいえ、それが仲間を悲しませていい理由にはなりません。

共に頑張りましょう！」

レイア、アルヴィン、ジュード、ローエン。

みんな、プリムラのことをこんなにも思ってる。

それに比べて、わたしは泣き喚いただけ・・・。

強くならなきゃ！

「はい！」

涙を拭いてわたしは立ち上がった。

「強くなるぞ！みんな！」

「はい！」

「おお！」

「うん！」

「ええ！」

待ってて、プリムラ。

絶対に強くなるから！

最強の魔装獣

エリー達と分かれてから1週間。

今あたしがいるのは、名前も分からない孤島。ラコルム海停からと
りあえずル・ロンドの海停まで戻ろうかな、と思って乗ったのは良
いけど、途中で魔物の襲撃を受けて何人かが海に投げ出された。ホ
ントに突然のことです話をする暇すら無かったんだよね。それで、投
げ出された後に近くにいた子に助けてもらった。

どうして船を攻撃したのか聞いたら、なんかむしゃくしゃしてたみ
たい。

まったく・・・そんな理由で襲ったら駄目だよ？

で、なんとなく街とかに行くより、誰もいないところに行きたいな
〜、と思ってこの島まで送ってもらった。さよならする際、助けて
くれた子がこの島には時々、強大な力を持った魔物が出るから気を
付けろと忠告を受けた。

この島にいる子達はどういう訳かみんなが例外なく強い。もしかし
たら強大な力を持つ魔物とやらと戦う為に強くなったのかな？

分からないけどね・・・。

まあ、でも仲良くやっている。

特訓相手を頼めば、本気であたしを殺しにかかってきてくれるから
力も上がる。

結構いい場所だ。

「やつ！」

ガン！

今相手をしてもらっているのはハンマーズームと言う魔物。

ミミズみたいな体をしていて腕を持っている。たった今あたしの攻撃もその腕によって防がれた。

「グアアアアア！」

「うおっと！やっぱり強いね！このみんなは！」

投げ飛ばされ、近くの木に当たりそうになる直前に体を捻らせて幹を蹴って、

「あたしも負けないよ！」

勢いをつけて蹴りを放つ。

「グアアアア！」

クリーンヒット！

「ふう……ありがとう。付き合ってくれて」

「グア」

しつかり当たった筈なんだけどな・・・大して効いてないって感じだよ。結構へこむぞ？

ハンマーズアームは地中に潜って巢に戻っていった。

あたしはその場に座り込み空を見上げる。ここはラコルム地方だから空は常に夕焼けだけど、綺麗なのは好きだ。

「でも・・・やっぱり1人は寂しいな」

ぽつりと呟いた・・・その時だった。

『ガアアアアアアアアアア！！！！』

ここにいるみんなでも到底敵わないんじゃないかと思えるほどの咆吼が聞こえたのは。

比喩なんかじゃない。

咆吼だけではつきりとそう感じ取れる。

大げさと思うかも知れないけど、本当にそう感じる。

今まで戦ってきたどの魔物よりも遙かに強い。

周りにいるみんなが一目散に逃げているのを見るだけでもそれは分かる。

咆吼が聞こえた方に目を向けると、巨大なドラゴンが飛んできていた。

「あれが・・・強大な力をもつ魔物？」

強大なんてものじゃない。絶対に勝てないよ、あいつには・・・少なくとも、今のあたしじゃ十秒も保たない。戦った瞬間、何もすることが出来ず蹂躪されるだけだ。

「逃げなきゃ・・・」

そう思うのに足が竦んで動けない。

ズン！とお父さんとは比べものにならない音を立ててドラゴンは着地した。

体は真紅に染まっており、目は金色の光を放つ。頭部には黒い角が2本。翼はどれほど戦ってきたのか、既にボロボロで、それでどうして飛べるのか？と思わせる程だ。

モン高原にいたスノウドラゴンたちとはいく本足で立ち、内包するマナ故か体からはバチバチと音を発しており、体の周りにはマナが溢れているのか、膜のような物を張っている。

そして腕には体と同じく真紅のガントレット。

魔装獣だ。

『娘よ……お前の名はプリムラで合っているか？』

「……………へ？」

外見とは違いかなり優しい響きの声に思わず間抜けな声を出してしまった。

え、ちょっとまって……今

「しゃべった！え、あなた、どうやって言葉を話せるようになったんですか！？」

『うむ、それは説明するのは構わないが、まずは質問に答えてくれぬか？』

「あ！そうでした。はい、あたしがプリムラです」

『そうかそうか……逢いたいと思っておったぞ。確かにあやつらの言う通り面白い娘だ』

ドラゴンは笑いながらそう言った。

この時点で既に最初に抱いた印象は消えている。

さっきまで感じていた恐怖もすっかり霧散した。

「えっと……ミーくん達から聞いたんですか？」

『ハツハツハツ！ミーくんか。そう聞くと、我ら魔装獣のイメージも一気に柔らかいものになるな。』

他の者のことはなんと呼んでいるのだ？』

「え？フォルザームをルーちゃん。ローバートをローくん……です」

『成る程。どれ、儂もその様に呼んでくれぬかの？名はオーデンロイドだ』

「オーデンロイド。……オーく……さん？」

『くんで構わぬよ？』

「それなら、オーくん」

あたしが呼ぶとはつきりと笑顔になった。

喜んでくれたのかな？

『……むづ、中々こそばゆいモノだな？だが、悪い気はせん』

「良かった。それで、オーくんはどうして言葉を話せるようになったんですか？」

『おお、そうであったな。だが、儂もいつからなのか分からぬのだ。気付いたら話せるようになっておったのだ・・・』

「そうなんですか？力が関係しているんでしょうかね？」

『確かに儂の力は皆よりも大きいが・・・それが関係しているかと言われれば、それも分からぬとしか言えぬ。それと、敬語でなくて良いぞ？』

「あ、は・・・分かった」

『うむ』

それから、あたしの生い立ちからこの場所に至るまでのことや、オーくんが大津波に遇った後にどう過ごしてきたのか等。存在を感じられなくなった子達のことを話した。

『そればかりは儂も他の者達と同じだ。』

20年前から、我等が同胞、ドラソードとメランブロンの存在を全く感じる事が出来なくなった。

我等が常にお主ら人間でいう所のリンク状態だと言うことは知っておるのだったな？』

あたしは頷く。

『にも関わらず存在を感じることが出来ない・・・本当にどうしてなのか、皆目見当もつかぬ』

「……………この前、ローくと話した時に考えたんだけどね？」

『むっ。』

「異世界があるってことは考えられないかな？」

『異世界……このリーゼ・マクシアの他の世界、ということか？』

「うん。もし、あったとしたら辻褃はあうと思うけど？」

『ふむ……確かにそのような考え方もあるが……他の世界があるなどと、今まで考えもなかったことだ』

「あたしも自分で変なことを言ってるなって思う……でも、可能性がない訳じゃないでしょ？」

『それは勿論だ。そもそも世界とは、様々な世界が重なり合って形成されている。』

人間・精霊・自然・動物。あげれば切りがないほどのな』

確かにそうだ……世界は1つだけど、それは結果的にそうになっているだけで、分けようと思えばいくらでも分けることができる。

「それなら、もし異世界が在ったら、何らかの原因でその世界に行き着いて、今も生きているかも知れないんだよね？」

『ああ』

オーくんは頷いた。

『話は変わるが、プリムラ。僕はお主について行きたいのだが構わぬだろうか?』

「へ?」

『やはり駄目か?』

しよんぼりとするオーくん。この姿からはとても最強の魔装獣だとは思えない。

「あ、ううん! いいよ! あたしで良ければ付いてきてくれて構わないから、そんなに落ち込まないでよ? ね?」

『そ、そうか? いや、良かった』

ほっと安心するように息を吐くオーくん。

「でも、あと何日はここに居るからさ? その間はあたしと戦ってくれない?」

『む、何故だ?』

「強くなりたいの。あたし。もう、みんなに辛い思いをさせなくていいように」

『先ほど言っていた、仲間たちか?』

「うん。あたしはみんなと、エリーと一緒にいたい。だから、その為にも強くなりたいといけない。」

肉体だけじゃなくて、心も・・・」

『本気なのだな？』

「うん！」

『・・・よからう！お主の特訓相手、儂が引き受ける！掛かってこい！プリムラ！』

オーくん・・・いや、オーデンロイドはガントレットを打ち付けて両手を広げた。

「行くよ！オーデンロイド！」

夜光の王都へ開戦・ファイザード沼野へ

「それじゃ、行くところか？オーくん」

『うむ。別れは済んだか？』

「うん。昨日のうちに済ませておいた」

『そうか。では行くぞ？しっかり捕まっておれ！』

あたし達は今日、イル・ファンに向けて発つ。修行期間はたったの3日だったけど、十分力は付いた。オーくんに勝つことが出来なかったのは悔しいけど……。

「どれくらいで着くの？」

『ほんの2時間程だが、ゆっくり休んでおけ。これから向かう所では、休む暇などないのだから？』

「……そうだね。分かった」

オーくんに言われた通り、あたしは休むことにした。

修行の疲れがまだ残っていたのか、目を閉じるとすぐに眠ってしまった。

夢にエリーが出てきた。

あたしの知ってる今のエリーじゃなくて、何年後かのエリー。髪型とかは殆ど変わらないけど、雰囲気は大人のそれになっていた。近くにいつもいたティポはいない。

『・・・・・・・・』

ふわりと、エリーは優しく、けれど夢げに微笑んだ。

そしてあたしに近づいてきて、

ギユ

と抱きしめてくれた。

暖かい。

『エリー？』

見るとエリーが震えていた。
泣いているの？

『・・・・・・・・』

エリーは泣いていた。

『エリー？どうして、泣いてるの？何かあった？』

ふるふると首を横に振るエリー。それでも、涙はずっと流れ続けて

いる。

エリーは突然あたしの帽子を取り、髪を上に乗げた。

何をするんだろう。

そのまま待っていると、エリーが額に

チュ、

と口づけた。

『・・・・・・・・ふお！／／／／』

すごい変な声が出た。

『え、エリー！？何、いきなり！？わぷ』

額から唇を話したエリーはもう一度あたしを抱きしめた。さっきよりも強く。

まるで・・・・あたしがどこにも行かないようにでもしているみたい
に。

『・・・・・・・・』

あたしもエリーを抱きしめた。

『もうすぐ会いに行くから・・・・だから、待ってて？』

『・・・・・・・・』

笑ったエリーは綺麗だった。

「……………ん？」

『目が覚めたか？まもなく到着するぞ？』

寝てたのか……。

綺麗だったな……将来はあんなに美人になるのかな？
今は綺麗って言葉よりも可愛って言葉の方が合ってるからね。

と、考えるのは後で。

「うん、ありがとう」

『どこに降るせばいい？』

「オルダ宮に突っ込んで！あのでっかい建物！」

『よいのか？』

「いい！今頃はエリー達もいるだろうから！」

『分かった！衝撃に備えておけ！』

あたしはオーくんにしがみついた。

オルダ宮に近づくとエリー達が見えた。

「オーくん！あそこ！人がいる所に突っ込んで！誰も巻き込んだら駄目だよ！」

『そんなへまはせぬ！ゆくぞ！』

「うん！」

その後

ガシャアアアン！！

と大きな音を立ててオルダ宮のガラスが粉碎された。

『ガアアアアアアアアアアアアアア！！』

「ぐお！」

「ナハティガル！」

『！！』

どこかで聞いたことがある声とローエンの声、みんなの驚いた顔が見えて、声を掛けようと腕から降りたら、

『プリムラ！まだ離れるな！』

「え？」

またオーくんを引き寄せられた。

ガガガガガ！

何かがオーくんに当たったけど、

『ふう、済まぬ。油断していた』

全然平気みたいだ。

「大丈夫？」

『僕はこれくらいで殺られはせぬ』

「そだね。でも、ありがとう」

『ああ』

そしてみんなの方を見て、今度こそ声を掛けようと思ったら、

「っっプリムラ！」「っ」

「おわ！」

エリー、ティポ、レイアが抱きついてきてあたしにそれが支えきれ

る訳もなく倒れた。それからミラたちも駆け寄ってきた。

「エリー、ティポ、レイア！とりあえず離れて！動けないよ！」

「あ、ごめんね！プリムラ。あまりに嬉しくて」

そう言って離れるレイア。

「相変わらずだね？レイアは・・・」

「・・・う・・・ぐす・・・」

「エリー？」

夢で見たようにエリーは震えていた。

だから、今度は

「エリー」

「あ」

あたしが抱きしめた。

「エリー？あたしは、もうどこにも行かないよ？だから」

「・・・う・・・うあ・・・」

「もう泣かないで？」

「……うん……うん！」

「……みんな、久し振りだね？元気だった？」

「うん。プリムラも元気みたいだね？」

「しかも、こんな奴まで引き連れて来るとはな」

『こんな奴とは何だ？僕はプリムラの師であり、友だぞ？』

『……』

おお、みんな同じ反応。

あ、どうやらさつき飛んだのはナハティガルだったみたいで、同様に言葉を失っています。

『しゃべった！！！』

みんな揃って、あ、ナハティガルも入ってるよ？

まあ、それからつもる話は後にして槍の元へ向かうことになったんだけど、オーくんはサイズ的に無理があるからナハティガルを守ってもらっている。

椅子の後にあった蓮華陣から奥に進んでいく途中、ミラがさつきオーくんに当たった物が氷だったことと、それが現れた瞬間大精霊クラスの力を感じたことをみんなに言った。それも、とりあえず後で考えることになって、槍があっただらしきに場所に行ったけど、既に

槍は無かった。

さっき突っ込んだ所に戻ってオーくんの下にみんな纏めて下に降ろしてもらつと、兵士が2人ナハティガルを見て慌てて駆け寄ってきた。

「心配するでない・・・」

ナハティガルはそう言った。

「伝令だ！通してくれ！」

直後、今度は別の兵士が来たけど、ナハティガルとローエンを見て驚いていた。

「何があつたのですか？」

「ア・ジュール軍が侵攻してきました！その数およそ5万！場所はイル・ファン北方、ファイザバード沼野です！」

「ばかな！靈勢は変化していないはず！どうやってあの沼野を攻略していると言うのですか！」

聞いても結局分からなくて、直接向かうことになった。

「よし！行くぞ！」

「ローエン！」

あたし達が出発しようとしたらナハティガルがローエンを呼び止め

た。

「今は休んでいて下さい。貴方には全てが終わった後で罪を償ってもらいます。」

「言っておきますが・・・自ら命を絶つなどといったことはしないで下さいよ？」

「プリムラさん達のお陰で貴方は生きていますから・・・」

「分かっている。お前こそ戻ってくるのだぞ？キャリアを失ったあの場所で、次は友を失う等といったことはご免だ」

「そんなつもりは毛頭ありませんよ」

「そう言っただけならローエンは駆けだした。」

「オーくん」

『どうした？』

「あたし達が戻ってくるまでの間、みんなを守ってあげて？」

『お前の頼みならば、断る訳がなからう？任せておけ』

「ありがとう。行ってくる！みんな！」

「「「うん！」」」

「「ああ！」」

あたし達はファイザード沼野へ向かった。

空の向こうから現れたモノ

沼野に行くまで間に、あたしがいない間の事、あたしがやっていた事を互いに話した。

別れた後、エリー達はシャン・ドウに行き、そこでワイバーンを借りる為にキタル族のユルゲンスという人に頼まれて闘技大会に出場。決勝戦まで勝ち上がり休憩をしていた時、ずっとミラの命を狙っている者達、アルクノアが他の参加者も巻き込んで殺そうとしたことや、アルヴィンがその一員で、病を抱えている母親の為に仕事を受けていること。

そして、その母親をいない間、看てもらっているイスラと言う人のこと。

決勝戦が始まり、ミラを狙っていたと思っていたアルクノアが狙っていたのはティポで、連れ去られたティポを追ってエリーとアルヴィンが、昔エリーが育った研究所まで行き、遅れてミラ達も合流したが、ティポは何かを抜き取られて前のティポでは無くなったこと。

その後、密猟者を追ってきたお父さんに会って、エリーの両親が既にこの世にはいないことを聞いて、ショックを受けたエリーだったけど、

「ティポが前のティポじゃ無くなったことも・・・お父さんとお母さんがいないことも・・・悲しいです。でも！ここで泣いたら、わたしは胸を張ってプリムラに会うことが出来ません！」

と、泣かずに頑張ったらしい。

それからエリー達はシャン・ドウに戻ってワイバーンが飛べるかどうか聞いたら、戦争が起こりそうだから空を飛ぶにはおじちゃんの許可がいるらしくて、カン・バルクに向かったそうだ。

そこで、許可をもらいに行ったユルゲンスさんを待っている間、外に行ったエリーがまたお父さんと会い、あたしの育った家を見たいと言ったら連れて行ってくれたみたい。

で、エリーが帰ってくるのが遅くて心配したみんなが探しに来たのと同じくらいの時にエリーが家から出てきてみんなもあたし達の家に入ったらしい。

なんかレイアが女の子っぽくないとか言っていたみたいけど・・・別にいいじゃんか！

210

それからなんか城に直接向かうことになって、着いた時にユルゲンスさんが出てきてワイバーンと謁見の許可があっさり取れてすぐに会うことになったらしい。

おじちゃんの所に行くとお父さんがいて、そこで四象刃の1人であることを明かしたんだって。

その後おじちゃんが出てきて、開口一番、

「プリムラはどこだ？」

なんて聞いたらしい。

それから、ウイン兄ちゃんが止めるまでひたすらあたしの事を言っていたらしいけど、どうしてか教えてくれない。

なんで？

まあ、その後アルヴィンが裏切ったり、ウイン兄ちゃん&プレ姉と戦ったり、シャン・ドウに戻ってワイバーンに乗ったは良いけど、リーゼ・マクシアの空を統べる魔物と戦ってその際に傷ついたワイバーンが元気になるまでの間ドロツセル達の所で休憩して、やっとこさいル・ファンに着き、今度はそこでアグ姉と戦ったって・・・その時もあたしの事を色々言っていたみたいだけど、やっぱり教えてくれない。

その後オルダ宮に行って、ナハティガルと決着を着けてローエンと何か話している所に、

「あたし達が来た。ってことか・・・」

色々あったんだねえ・・・。

「エリー」

あたしは足を止めてエリーを呼んだ。

「え？何？」

「どしたのー」

みんなも一旦止まった。

「あたしの為に泣かないでくれたのは嬉しい・・・でもね？」

オルダ宮の時と同じようにエリーを抱きしめる。

「悲しい時は、泣いていいよ？全部受け止めるから」

「・・・あ・・・」

ぴちゃ、とあたしの頬にエリーの涙が伝う。

「・・・う・・・ぷり、むらあ・・・」

「うん」

そしてエリーは、我慢していた分も纏めて泣いた。

オルダ宮で泣いたにも関わらず、涙は止め処なく溢れ、どれだけ悲しんでいたのが伝わってくる。

「本当に・・・よく、がんばったね？」

「うん！・・・うん！・・・うわああん！」

抱きしめ合うあたし達をみんなは優しく見守ってくれていた。

エリーが泣きやんでみんなに謝ったけど、みんなは構わないと言ってくれた。

「それじゃ、行こうか！」

ジュードのかけ声にみんな頷く。

沼野に着いて、兵士に止められたけどローエンが通してくれと言うとすんなり通された。テントに入って、今の戦況を聞き、クルスニクの槍をジラントと言う人が高台に持って行きそこから一気に戦場に攻撃をして、終わらせるつもりらしい。

沼野をどうやって進んでいるのかは増霊極を使って周りの霊勢を変化させているんだってさ・・・流石ウイン兄ちゃん。

あたし達が話している間アルヴィンがテントから出て行って誰かと話していたらしいけど、何かは分からなかった。

兵士から増霊極を一個借りて戦場へ赴き、アルヴィンが迂回するか？と聞いたけどジュードがまっすぐ突っ切った方が早いと言いつつ切ることになった。

「それでは、行きますよ！」

増霊極を使つて霊勢を変化させて進むと兵士が攻撃してきた。

「エリー！共鳴いくよ！」

「うん！一緒にいこう！」

エリーと共鳴して一気に共鳴術技を放つ。

「闇の女神よ！その力を此処に！」

「全てを狩り取る！」

「「デスサイズ！」」

エリーの術であるブラックガイドで現出した女神が持っていた鎌を敵に向かって投げ後に回り込んだあたしがそれを取って一気に斬りつける。

倒れた兵士を無視して先に進んでいくと、味方であるはずのラ・シユガル兵が攻撃してきた。ジランドがイルベルトは敵になったから、殺せと命を受けたらしい。

「それじゃ、遠慮無く！ミラ！」

「ああ！」

「当たると痺れるよ！」

「気を付けるんだな！」

「雷神双拳!!」

ミラのライトニングに突っ込み雷を纏った腕を地面に叩きつけてそこから雷が発生し地を駆け、敵を麻痺させる。

「アルヴィン！」

「おう！」

「思いっきりやってよ！」

「任せな！」

「アースブレイク!!」

一緒に跳んでアルヴィンが思いっきり振り下ろした大剣の勢いに乗って地面に踵落としをかまして敵を吹っ飛ばす。

ラ・シュガル兵を撃退して先に進みもうすぐ奥かな、という所まで来たらまた出てきた。

「ジュード!!」

「うん!!」

「どこまで耐えられるかな！」

「この連撃に！」

「連牙十連撃!!」

互いに連続で打撃を叩き込んで敵を倒す。

「次！ローエン！」

「ええ！」

「凍傷にならないようにね！」

「全てを凍らせてあげましょう！」

「「アイスヘル！」」

アブソリユートコアを球体の状態で空中に飛ばしてもらい、それをあたしが地面に蹴りで叩きつけ、その衝撃によって、球が弾けて周囲の物全てを凍らせる。

「最後行くよ！レイア！」

「OK！」

「怪我したくないなら！」

「近づかない方がいいよ！」

「「爆碎活伸劇！」」

レイアの活伸棍術で巻き込んだ敵をあたしがとにかく叩きまくり倒す。

そして奥に進んでいくとお父さん達を見つけた。

「お父さん！ウィン兄ちゃん！プレ姉！」

「……プリムラ!」「」

既に敵は全滅させているようだ。

おじちゃんはお奥にいるのかな？

「プリムラ！良かったわい！皆と別行動を取ったと聞いて心配しておったのだぞ？」

そう言いながらあたしを抱き上げるお父さん。

「ごめんね？もしかして、2人も心配してくれてた？」

「当たり前よ！全く！もう心配掛けないでちょうだいね？」

「お前がいない間陛下は仕事に身が入らない時があったから……」

「あはは……ごめんね？」

「なに言ってるのよ？あなたも暇な時は情報収集してたじゃない」

「な！ごほん……何を言っているのか分からんな」

「ウイン兄ちゃん……ごめんね？それとありがとう」

「……無事ならそれで良い」

「ふふ」

昔から優しいよね？ウィン兄ちゃん達は・・・拾ってくれたのがお父さんで良かった。

「なんか、カン・バルクで会った時と全然イメージが違うね？」

「会つのは随分久し振りなのだろう。無理もないさ」

「長生きはするものですねえ・・・このような場面に出会えるとは」

「ローエン、じじくさいよ？」

「ま、否定はしないがな」

「よかったね？プリムラ」

「家族はいいね」

みんなが後で何か言っていたけど、あたしはお父さん達と話すのに夢中だったから殆ど聞こえていなかった。その後、みんなでおじちやんの所に向かった。

なんかミラたちとお父さん達が戦いそうな雰囲気になったけど、あたしが必死で止めた。

大好きな人達が争う所なんて見たくないもん。

「ウィンガル達は敗れたか」

「ううん。ピンピンしてるよ？」

「！その声は・・・」

あたしの声を聞いてすごい勢いでこちらを振り向くおじちゃん。
そして目が合った。

「久し振り！おじちゃん！」

「プリムラ！元気だったか？風邪は引いていないか？ちゃんと食事を摂っていたか？どこも怪我はしていないか？」

あたしに駆け寄ってきてしゃがみ込み、そう矢継ぎ早に聞いてくるおじちゃんにお父さん達を除くみんなは、

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

見事に言葉を失っていた。

きつとギャップが激しすぎたんだね？

「大丈夫。どこもなんともないよ？おじちゃんこそ、何も無い？」

「ああ。俺は簡単には敗れん・・・よく知っているだろう？」

「そうだったね。でも、何もなくて良かった」

そう言つと優しく笑ってくれるおじちゃん。

この顔を見るのも久し振りだな・・・。

「さて、何故通したのだ？お前達？」

打って変わって鋭い目になりお父さん達を見る。

「そ、それはですね・・・」

「なんと云ったものか」

「・・・」

「どうした？言えない訳があるのか？」

「お？」

さりげなくあたしを抱き上げながら片腕でしっかり支えるおじちゃん。でも、目はそのままだからなのか、今の状態がアンバランスなのかは分からないけど、未だ何も言えないお父さん達。

「えつとね？おじちゃん」

「どうした？」

「あたしが頼んだの・・・通してって。大好きなみんなが争うところなんて、見たく無かったから」

「ふむ、そうなのか？ならば仕方無いな」

ガク！

緊張が一気に崩れてその場に倒れるみんな。

結構面白かった。

「ん？」

「どうした？」

「何か来るよ？ほら」

『？』

空に何か動いているのを見つけて、そこを指すとみんながそこを見る。それはオーくんに似ている魔物で上から、見たこと無い人がクルスニクの槍の近くに降りてきた。

そして、ミラが地面に座りこんでいるの見て何か誤解でもしたのか、懐から何かを取り出し槍に突き立て、槍が機動した。

そして、イル・ファンの時と同じ感覚があたし達を襲った。

「うあ……」

マナが吸収される感覚。

あたし達だけでなくこのファイザード沼野にいる全員からマナが吸収されているのか、そこら中からマナが槍に集まっている。

そして、吸収が終わり、膨大なエネルギーが空に向かって放たれ、

バキイイイイン！

と何かが砕かれた。

そして、そこから

ゴオオオオオ！

と空飛ぶ船が現れた。

それは、あたしが元いた世界では今は常識的な物。

でも、この世界では異質な物。

あたし達が何も言えないでいるとミラが、

「そうか、そういうことだったのか・・・槍は兵器などではなかった！」

と言った。

直後、今度は船の何隻かが、突然現れた球形の物に押し潰され、そこには・・・誰かがいた。

アルクノアの襲撃

空から現れた船に記を取られていると、背後から声が聞こえ、振り向くとそこにはジランドがいた。ぱつと見じゃ雰囲気が変わりすぎていてわからないけど、よく見てみるとなんとなくわかる。彼の周りには、武装した兵士と空から飛んでくる兵士がいる。

そして、1人の兵士がジランドに近づき、その兵士にジランドがミラとエリーを除くあたしたちをみんな殺せと命令を出した。

そのあとに繰り出された黒匣の攻撃によってあたしたちは吹き飛ばされた。

態勢を立て直してジランドの方を見ると隣にはいつの間にも現れたのか、女の人が立っていた。

何だろう？人・・・じゃない？

そんなことを考えていると、おじちゃんの声が耳に入ってきて意識が現実に戻ってきた。

「お前たちは退け！奴らのねらいはマクスウェルだ！」

「でも！」

「いいから退くのだ！ここは俺たちが食い止める！」

それでもミラは敵に向かっていき、その途中でおじちゃんに腹を強

打され気絶した。普段のミラならこんないすぐは気絶しなかったかも知れないけど、ここまで来るのに体力を消耗していたことが原因だと思う。

「ミラ！」

駆け寄ってきたジュードにミラを預けたのを見て、周りを見るとさっきの攻撃によって気絶したエリーを連れて行くこととするアルクノアの兵士がいた。

「お父さん！」

「分かっておる！周りは儂蹴散らす！娘っ子はお前が助けい！」

「うん！」

「ミラをお願い！」

レイアとローエンにミラを預け、ジュードとアルヴィンも加勢してきた。

「エリーに何すんだあ！」

「ぐあ！」

久しぶりのドロップキックでエリーを抱えていた兵士を蹴り飛ばして救出する。でも、エリーはまだ気を失っていた。

「ジュード！」

容態をジュードに見てもらつことにして、お父さんと一緒に兵士を倒していく。

アルヴィンは動けないエリーとジュードのカバー。

こんな時だつていうのに、今のあたしは昂ぶっていた。

「お父さんとこんな風に戦つのは初めてだよね！」

「そうじゃのう！プリムラ！」

お父さんを相手に戦ったことはあつたけど、一緒に戦ったことはなかつた。だからだと思つ。

「あたしがいない間！寂しかったりした！？」

敵を殴り飛ばしながら聞くと、

「当たり前じゃ！娘がおらんだけで！あんなにも日常がつまらんものになるとは思わんかつたわい！」

「又アア！！」

地面もろとも敵を吹っ飛ばしながら答えた。

「全くだ！まさか2年も帰つてこぬとはな！邪魔だ！」

「アグリアなんか一時期本気で落ち込んでたんだからね！」

「それはお前もだろう!」

「うっさいわね!悪い!?!」

みんな口々にいいながらもちゃんと敵を倒していつている。おじちやんなんか見えてないはずの後からの攻撃でも完璧に反応してるから、ホントに目があるんじゃないか?って思うよ。

「ごめんね!プレ姉!心配掛けちゃって!」

「いいわよ別に!キジル海瀑で会ったとき!元気なのは十分分かったらね!」

「聞いたぞ!自分の数倍はある魔物を蹴り飛ばしたようだな!」

「プレ姉に攻撃しようとしたんだから当たり前でしょ!もう!いい加減うざい!こいつら!」

愚痴りながら敵を倒していき、あらかた倒したところでエリーたちの所に戻ると、エリーは目を覚ましていた。

「プリムラ?」

「良かった!エリー!」

あたしはエリーに抱きついた。

「.....」

「プリムラ、あつたかいー」

「まだ油断するなよ？さっさと此処を抜けてミラたちと合流しねえと」

「うん。プリムラ、エリーゼ、ティポ、ジャオ」

「」「うん」「」

「分かっておる。じゃが、逃げ切るには此処におる者たちだけでもどうにかせんとのお」

確かにそうだ。

それに空にもまだ敵はいるし……。

「おじちゃん！空の船を減らして！プレ姉は精霊術を上空でキープ！できるだけ数は多め！

ウィン兄ちゃんはあたしたちと一緒に地上の敵を殲滅！」

「」「ああ！」

「了解よ！」

「ジュードたちは離れて！危ないよ！」

「プリムラ！」

「エリーも一緒に離れてて！本当に巻き込まれる！後で合流しよう！」

あたしは敵陣に突っ込んでウイン兄ちゃんと一緒に敵を減らしていきながら、エリー達に何かを話しているお父さんを見た。でもすぐに気持ちを切り替える。

「ウイン兄ちゃん！」

「（ああ！）」

「（真空閃！！）」

あたしの拳とウイン兄ちゃんの剣。2つの早さを合わせて放つ真空の刃で目の前にいる兵士達を薙ぎ払う。今ので大体3分の1は減った。おじちゃんも船をどんどん破壊してるし、プレ姉の援護もしてる。

やがてお父さんも加わり、あたし達は地上に降りてきた敵を殲滅した。

「退くよ！みんな！」

お父さん達に言っただけでその場を離れようと走り出した直後、残っていた船が砲撃をしてきたが、プレ姉がキープしていた術に当たり威力がだいぶ落ちたから何とか逃げ切れたけど、運が良かったのか狙ったのか、一発が地面に直撃しあたし達はまた吹っ飛ばされ、地面に頭を打ってあたしは気絶してしまった。

「……ムラ！……プリムラ！しっかりせい！」

「……ん……あ、お父、さん？」

声が聞こえて目を開けるとお父さんがいた。

周りにはおじちゃん達と、いつ合流したのかアグ姉もいる。

「アグ姉、久しぶりだね？」

あたしが言うと、ビシッ！とチヨップをしてきた。

「あ痛！」

「久しぶり、じゃねえよ！どんだけ心配したと思ってんだ！たく！」

「アグ姉……うん、ごめんね？これからはできるだけ心配掛けないようにするから」

あたしが言うつとそういう意味じゃねえだろといいながら呆れて先に進んでいった。

あたし達も後を追っていき、やがて倒れているジュードを見つけた。でも、ジュードだけだった。エリー達は？それを確かめる為にも、駆け寄ろうとしたらアルクノアの兵士が来て一旦隠れることになり、様子を窺っていると、2人の内1人の口からシエルとう単語が出てきた。

「シエル？」

その言葉におじちゃんが眉を顰め、ウィン兄ちゃんと目配せしてからその兵士に向かっていき倒した。

「ジュードー！」

「！まで、プリムラ！」

「え？」

今度こそ駆け寄って安否を確かめようとしたらまたおじちゃんに止められて、振り向く。

でも、その時にはすでに遅くて、

ボゴー！

とあたしとジュードがいる辺りの地面が崩れた。

「きゃあああー！！」

『プリムラ！』

「みんな！」

みんなが手を伸ばしてきたけど、届くはずが無くて、あたし達は流沼に流されていき、また気を失った。

そして次に目を覚ました時に見たのは、
一面が雪に覆われた冷原だ
った

番のドニロンく初めての風邪く

「寒いね〜・・・ミュゼはいいなあ、精霊だから寒さも感じないんですよ?」

「ええ」

「プリムラが寒がるなんて珍しいね?いつも半袖なのに・・・」

「だって、沼野は雨が降ってたうえに流されて来たから服はずぶ濡れだもん。いくら、カン・バルク方面の出身だからってこれは寒いって・・・」

「俺が暖めてやろうか?」

「そんなことさせません!プリムラを暖めるのはわたしです!」

「そつだそつだー!」

いまあたし達がいるのは冷原にある洞窟。目が覚めた後、ジュードとミュゼがいるのに気付いて、先に目が覚めていたジュードがミュゼのことを説明してくれた。

それから、濡れたまま止まっていると本当に寒かったから何処か寒さが凌げる場所を探して辿り着いたのがこの洞窟。中に入ってしばらく進むとアルクノアの兵士がいて、隠れていたらジュードが後ろから誰かに捕まった。

それはアルヴィンだった訳だけど……。

ミュゼのことなんかを説明しながら進むとエリー、ティポと合流。
奥を目指す。

「ありがとうエリー、ティポ。でも、今は外に出ようか……」

「うん」

先を目指して行くと広げた場所に出た。

多分此処を抜ければ外にいけると思う……けど、大体こういう場所ってボスのな子がいるんだよね。

戦いたくないけど、これ以上みんなに迷惑は掛けたくない……あ
あ〜でもなあ……。

そんな考えが頭の中を駆け巡って頭を抱えていると、

「プリムラ、わたし達はもう大丈夫だよ？」

エリーが突然そう言った。

「え？」

「悩んでたんだろ？また俺たちに迷惑掛けるんじゃないか、って。心配すんな。」

何の為に前と一旦別行動を取ったと思ってるんだ？」

「そうだよ？エリーゼは特に頑張ったからね」

「みんな・・・それじゃ、戦わなくていいの？」

「うん」

エリーはそう言って笑った。

「そっか・・・ありがとう、みんな。それじゃ、行こうか！」

「うん！」

「おー！」

「ああ！」

先に進むと水があつた。

そこであたしは何か大きなものが動くような音を聞いて立ち止まる。

声を掛けてきたジュードに人差し指を口に当てて静かに、と伝える。

そのまま待っていると、

ザバアン！とすごい勢いで2体のドラゴンが出てきた。

しかも、

「怒ってる？」

かなり気性が荒いんだけど・・・。

「あゝ・・・少し話を『グアアアアアアアアアアアア！』すいませ

ん！ごめんなさい！」

「プリムラ！やるしかないの？」

「怒ってて話ができる状態じゃ無いから、まずは大人しくさせないと！」

「了解！優等生！」

「うん！ミュゼもお願い！」

「御心のままに」

「エリー！」

「うん！」

戦闘態勢を整えて2体のドラゴンを引き離し、あたしとエリー、テイポのペアとジュード、アルヴィンペアに分かれる。

「もう！なんでこんな怒ってるのさ！大人しくしなさい！」

文句を言いながらドラゴンの頭目掛けて踵落としを決め、怯んだ所に

「エリー！」

「行くう！」

「叩き潰す！」

「気を付けて！」

「「ティポクラッシュュ!!!」」

共鳴術技を決める。

巨大化したティポが上から降ってきてちょっと悪いかなど思いながら、頭に踵落としをして落下の勢いを上げ、そのまま直撃。

なんとか大人しくすることができた。

「お?」

なんかふらふらする。それに体もいつもより熱いきがするし・・・
どうしたんだろう?

「「リフレクトボミング!!!」」

ドガアアアン!

「あ、あっちも終わったみたいだね?」

「うん」

「よかったー」

それから目をさましたドラゴンになぜ怒っているか聞くと2体揃ってエリーの方を見たから、釣られてあたし達もエリーを見た。

すると目を逸らした。

「エリー……どういふことかなあ？ちゃんと言明してくれよ
ね？」

「え、えっと……わたしがここに来た時に、ちょっと……」

「ちょっと……なにかなあ……もっとちゃんと説明してくれ
ないと分からないよ？」

じりじりとエリーに近づき、

「ちゃんと言つまで逃がさないぞー！」

抱きついた。

「ひゃ！プリムラ！」

「ひゅーひゅー。2人はラブラブー」

「たく、こんな時になにやってるんだよ？」

「まあ、いいんじゃない？」

「エリ……あつたかい……」

なんか頭がぼろっとしてきたけど、いいや。

「……プリムラ？いつもより体が熱いよ？」

「え？」

「そんなことないよ……普段と同じだって」

「エリーゼ、ちょっと診せて。プリムラ、すこしじっとしててね？」

「う？どしたの、ジュード？」

「どっしたんだ？」

手袋を取ってからあたしの帽子を取り、額に手の平を当てるジュード。

ひんやりしてて気持ちいい。

「熱い……プリムラ、熱がある」

「え！？」

「おいおい、マジかよー！」

「うん、急いでどこかで体を温めないと。このままじゃ悪化する。早く出ようー！」

何か焦りながらあたしをおぶるジュード。

訳が分からないまま、とりあえずドラゴンたちに手を振って、あたし達は洞窟を出口に向かって進んでいき、あたしは途中で酷い眠気に襲われて眠ってしまった。

目が覚めた時、あたしが見たのは知らない天井。

「……どこだろう、ここ？みんな？エリー？」

何処かの部屋なんだろうけど、見覚えが無い。あたしが寝ているベッドの他に左右に2つベッドがあつて、他には何も無い。

起き上がろうとしても、どういふわけか力が入らないし……。

「はあ……どうしたんだろう？」

体が動かないと何もできないし、とりあえず寝ておこうかな。

さっきまで寝ていたから寝れないかなと思っていたけど、以外とすんなり意識は闇に落ちた。

「……やっぱ体に力が入らないな。ん、エリー？」

起こそうとして、お腹の辺りに少し重さを感じて見るとエリーが寝ていた。

「すう〜・・・すう〜・・・」

みんなはどこにいるんだろう。

まあ、いいや。エリーが起きるまで待つておこう。

それから約20分が経過してエリーが起きた。

「おはよう、エリー、ティポ」

「あ！プリムラ！目が覚めたの!？」

「うん。あたしどうしたの？」

「えつとね・・・」

話を聞くとあたしは風邪を引いたらしい。

向こうにいた頃もほんの数回しか引かなかつたし、今回の様に酷くも無かつたからな・・・まさか、風邪だなんて。

それからあたしが寝ている間のことを聞いた。

まず、今あたしとエリーがいるのはザイラの教会の一室で、寝てい

る間、アルクノアやら空中戦やら、色々あつたらしい。

あと、お父さん達に怒られたってさ。

特におじちゃんがすごかつたらしい。ウィン兄ちゃんが増霊極を使つてやつと止まつたみたいだし。しかも怒つたまま、アルクノアの兵士を撃退しに行ったから、お父さん達四象刃の出番は殆ど無かつたみたい。

エリーたちと別行動する必要があつたの？つて思つくらいには……。
それから空中戦艦を奪つて、明日海にあるアルクノアの本拠地、ジルニトラに向かうことになつたってさ。こんなもんかな。

あたしはもし、今日中に風邪が治らなかつたら明日は留守番しなければならぬみたいだ。これは、おじちゃんが言ったことで、エリー達も賛成みたいだった。薬でも持つてきてくれればそれで良いと思つんだけどな……。

「なら、今日中に治さないとだめか……今の時間分かる？」

「お昼を少し過ぎたくらいだけど……お腹空いた？」

「お腹は空いてないけど、のどが渴いた。何かある？」

「お水でいい？」

「うん、お願い」

「分かった、ちょっと待っててね？」

エリーはそう言って部屋を出て行った。

数分して戻ってきたエリーから水をもらって、治す為にもとりあえず寝ようと思い、エリーに断ってからあたしは3度目の眠りについた。

〈SIDE OUT〉

〈SIDE エリーゼ〉

プリムラはまた眠った。

洞窟で眠ってしまった時よりは良くなったのか、顔色はすこしだけ良くなっていた。額に手を当ててみるとまだ熱い。

できれば明日に治っていても、ゆっくり休んで欲しいけど、プリムラはついて来るって言いそうで、治って欲しいっていう思いと、まだ治って欲しくないっていう矛盾した思いが胸中を渦巻く。

いつもあんなに元気だったのに・・・今は何も言わず規則正しい寝息だけが聞こえる。

「エリーゼ・・・」

「大丈夫だよ？ティポ」

プリムラの隣で浮いているティポにそう言ってプリムラを見る。

ジャオさん達は明日のことを話し合っていて、本当は誰よりもプリムラの側にいたいはずなのにわたしに任せてくれた。

みんなから愛されているプリムラ。

わたしもプリムラが大好きだ。

もちろんみんなだってそう。

いつも元気に駆け回って、行く先々で魔物達と仲良くなって遊んで・
・・。

そんなプリムラが大好きだ。

「だから・・・早く良くなって？また元気な姿を見せて？」

寝ているプリムラの額にかかっている髪を避けて

チュ

そっと口づけた。

（SIDEPUT）

氷の大精霊・セルシウス

「・・・・・・・・」

結論。あたしの風邪は治らなかった。

朝目さました時には既にみんな出発していた様で、2枚の置き手紙があつて、みんながそれぞれメツセージを残していた。

まずエリー、

『すぐに戻ってくるから待っててね？ティポも頑張るって言つてたよ？』

次にミラ、

『大分顔色は良くなっているな？大人しく待っているんだぞ？』

ローエン、

『帰ってきたらローエン特性ミルクティーをご馳走しますから、待っていてください』

ジュード、

『暖かくして、ちゃんと寝てるんだよ？』

レイア、

『帰ってきたら遊ぼうねー!!』』

アルヴィン、

『すぐに戻ってくる。風邪、治せよ?』

「みんな・・・一緒に行きたかったな」

手紙を見るとそんな思いがこみ上げてくる。風邪さえ引いてなかったら一緒に行けたのに・・・そういえば、こっちの紙は誰だろう?

「この字は・・・お父さん達かな?」

短い文章・・・いや、なんか最後に書いてある所だけやたら長くて裏まで続いている。これは間違いなくおじちゃんだな。

内容は、まずお父さんから、

『お前が風邪を引いたと聞いた時は驚いたぞ?しつかり療養して、また元気なプリムラに戻るのを待っておるからな?』

プレ姉、

『私が言えたことじゃないけど、そんな薄着でいるからよ?これからはもう少し服に気を付けなさい?良いわね?』

ウィン兄ちゃん、

『あまり心配を掛けないでくれると助かる。．．．ゆっくり休め』

アグ姉、

『風邪なんか引いてんじゃねえよ！遊び相手がなくなるだろ！』

おじちゃん、

『ジュードに運ばれてきたお前を見た時は何があったのかと心配したが、ただの風邪だと聞いてひとまず安心した。前々から言っていただろう？風邪には気を付けろと。これからはもっと厚着で過ごすようにしろ？帰ってきたら全員で買い物にでもいくとしようか。服を選んだことなど無いが、お前ならいろいろな服が似合うだろう。それから』

「長い！おじちゃあ！あたし病人！」

途中で切れた。

「もう、余計に一緒に行きたくなっただじゃなか〜．．．」

風邪は大分良くなっているけど、誰もいなんじゃ意味ないよ〜．．．今の状態なら多分行っても大丈夫だと思っけど、足が無いし。

ジルニトラは海の上にあるみたいだから空を飛べないよ〜．．．ん？

空？

「あ！ワイバーン！」

そこで城にいるワイバーンのことを思い出した。

「そうだよ！エリー達は奪った船で行ったんだから、ワイバーンは残ってるはずだし！」

よし！そうと決まれば！」

あたしはやっと動くようになった体を起こして教会から城に向かった。

〈SIDE OUT〉

〈SIDE エリーゼ〉

わたしたちは今ジルニトラに潜入して、道を塞いでいる防御線を消すためにさっき、左の装置を破壊して右に向かっているところです。

「プリムラはちゃんと寝ているでしょうか？」

誰に、と言うわけでもなくぼつりと呟くと、

「どうだろうな・・・今朝は大分容態は良くなってたんだろ？優等生？」

近くを走っているアルヴィンが答えてジュードに聞きました。

「うん。でも、あくまで昨日よりはマシになったってだけで、普段みたいには動けないけど」

走りながら答えるジュード。

「でもさ、プリムラってその程度なら大丈夫とか思ってた大人しくはしてないんじゃないかな？」

「それはあるだろうな？今までのあいつを見ただけでも大人しくするのが苦手……と言うより、体を動かすのが好きだと見える。ならば、レイアの言う通り、今頃は何かしているかも知れない」

「そうですね……屋敷にいた時も常に近所の魔物と遊んでいましたから。それ以上に旦那様やお嬢様に構われていましたが……」

レイア、ミラ、ローエンが言いました。

確かにわたし達がばらばらになった時、プリムラはいつも遊んでいました。ほとんど毎日服を泥だらけにして……傍から見たら戦っていると思えない場面もあったけど、それはプリムラ曰くじゃれ合いだそうです。

1回だけ、最初から見た時がありましたが、その時プリムラはクラマ間道一帯にいる魔物と一斉に戦いという名のじゃれ合いを始めました。

最初は4体くらいの魔物とじゃれ合っていましたでしたが次第に数が増えていって10体くらいにまでなっていきました。

それからもどんどん数は増えていって、30分程経ったときにルーちゃんが来ました。

プリムラはルーちゃんも交えたみんなと1人で戦いましたが、ルー

ちゃんは魔装獣で20年以上戦い続けた子です。それに加えて間道の魔物もいるのでさすがにプリムラが押されていき、ルーちゃんに負けてしまいました。

でも、それは勝負じゃなくてあくまでじゃれ合い。

その後もプリムラたちは遊び続けていました。

そんなプリムラが少しだけとはいえ容態が良くなったなら、じつとはしていないでしょう。

「これだな。アルヴィン、頼む」

「ああ」

考え事をしながら進んでいると制御室に着いて、中に入るなりミラが言うとアルヴィンが銃で破壊しました。これで道を防いでいた線は消えました。

「先に進むぞ」

それからまたさっきの中央の道に戻って先に進み、わたし達はクルスニクの槍がある所に到着しました。

中に入ると槍の前に座っているいるジランドがいた。

「ご苦労なこった。わざわざマクスウェルを連れてくるなんてな」

「ジランド」

「アルフレド・ヴェント・スヴェント、裏切った理由を聞かせてもらおうか？」

ジラントが聞くとアルヴィンは、

「簡単だよ。あんたが大嫌いだったんだ、昔から」

そう答えながら銃を構えた。

「一生リーゼ・マクシアで過ごす覚悟はできたみたいだな？」

「案外こっちの生活も悪くないぜ？特にあいつといるとな？」

それはきつとプリムラのことでしょう。

それからジラントが軽く笑うと突然氷の刃が飛んできた。

それを何とか躲すわたしたち。

ミラは今の攻撃で微精霊が消滅していないことに疑問を持ったようでした。黒匣を使えば微精霊が消滅する。それは、当たり前のこと。

「ジラントー！」

ドン！

アルヴィンがジラントに向けて撃った弾は

ギン！

と突如現れた氷の壁に阻まれ、それをやったであろう女の人が出てきた。

その人は弾を防いだ氷の壁を砕いて、その破片で攻撃してきた。

「く！」

ミラが殆どを防いだお陰でわたしたちに被害は無い。

氷の大精霊セルシウス。それがその人の名前だそうですけど、マクスウェルであるミラも聞いたことの無い名前に疑問を浮かべていました。

「マスターには手出しさせない」

そうセルシウスが言うと、

バシン！とジランドが叩いた。

「俺の許可なく口を開くな」

「はい、マスター」

「どうしてそんな人に従ってるの？」

「道具は主人に仕える『ガアアアアアアアア！』何だ！？」

ジランドが何か言っている最中に魔物雄叫びが聞こえて、直後

ドガアアアン！！

激しい音を立てて天井巨大な赤いドラゴン、オーくんによって突き破られた。

そこの背中には、

「やつほー！みんな！来ちゃった！」

『プリムラー！！』

プリムラがいた。

〈SIDE OUT〉

〈SIDE プリムラ〉

「よつと。ありがとう、オーくん」

『構わぬ。僕もいい加減お前に会いたかったからな』

カン・バルクからワイバーンに乗ってジルニトラに向かおうと飛び立ちザイラの森の上を通った時、他のみんなよりも大きい魔物を見つけて、頭に大剣があったことから魔装獣だと言ったことが分かり、降ろしてもらった。

その子はあたしが自己紹介するとやっぱり他のみんなから聞いていた様ですぐに話しを聞いてくれた。

それからスーくん、オーくんを呼んでもらって、少し話してもして

様と思つたら、10分くらいで来たんだよね。イル・ファンから此処までかなり距離はあったと思うけど……。

細かいことは気にしないで、それからオーくんここまで送つても良かった。

「という訳。とりあえずあの人達を何とかしないといけないんですよ?」

「うん。そうだけど……ってプリムラ!まだ風邪は治ってないでしょ!?!」

「お説教は後でちゃんと聞く。今は」

あたしはそう言つてジランドを見据える。隣にいるのは、精霊?

「そうだな。今はあいつらを倒すことが先決だ」

「そろそろ、マナの定期搾取の時間だ」

ジランドは立ち上がり、武器を構えた。

あたし達もそれぞれ武器を構えて戦闘態勢を取る。

「もはやお前と語る口は持ち合わせていないが……最後に一つだけ問おう。」

お前とジュード達の違いが分かるか?」

「知るかよ」

「だろうな。だからお前は愚か者なのだ」

ミラがそう言い、あたし達の戦いは始まった。

「貴女はできれば倒したくないんだけど！」

「私はマスターに従うだけだ！」

『お前は本当にそれでいいのか！』

ジランドはエリー達に任せて、あたしとオーくんはセルシウスと戦っている。

「どうすることもできないんだ！ハアッ！」

「ぐ！いったいなあ！どうすることもできないって言うけどね！何かしようとしたの！？」

「一体何ができると言うんだ！逆らえば私は消される！その恐怖がお前達に分かるのか！」

距離を取って術を放つセルシウス。それをオーくんが尻尾で弾いた。

「く！お前達は誰かに必要とされているだろう！？私は・・・私は道具ではない！」

「生きてるじゃんか！」

「!?!」

「ちゃんと生きてるじゃん!」

『何故そんな簡単なことが分からぬ!』

「私は・・・生きている等とは言えない!道具としてでしか、存在できない!」違つよ!」「な!」

そんなの絶対違つ。

ジランドがセルシウスを道具としか思つてないからそう思つだけ。

確かに生きてるのに、それを見ようともしない。

それに、

「・・・只の道具なら!なんでそんな悲しそうな顔してるの!?!」

今にも泣きそうな顔をしているの?

「心を持つてるのに・・・生きてないだなんて!そんな悲しいこと言わないでよ・・・」

『お前が自分の存在をどう思つか等は自由だ。だがな?我が友を悲しませるようなら容赦はせぬぞ?』

オーくんの言葉を聞いてセルシウスはあたしに聞いてきた。

「どうして・・・どうして、お前が、そんなに悲しむ?私とお前は何も関係がないだらう?」

「関係あるとかないか・・・そんなのどうでもいい。あたしは、貴女に生きて欲しいだけ。」

「ねえ？あたし達と一緒に生きよう？楽しいことたくさんあるよ？」

「そんなこと・・・許される訳が「逃げてるだけじゃないの？」！？」

言葉を遮って聞くと目を見開いた。

「逆らえば消される。それなら、消されない為には大人しく従うしかない・・・それこそ只の道具だよ？本当にそれでいいの？」

「私は・・・」

『確かにあの者を取ってお前は道具なのだろうな？我等もかつてはそうであった』

「なに？」

『儂等は魔装獣。20年前に人間によって生み出された、生物兵器だが、プリムラのお陰で我等は今も生きている・・・只の生物兵器だった儂等にプリムラは友として接してくれる。それが、どれ程嬉しいことか』

「オーくん」

「オーくんがそんなことを思ってるなんて、知らなかったな。」

「そんな話、一度も聞かなかったから。」

「・・・本当に、生きることができるのか？お前たちと共にいれば」
オーくんに向けていた視線をセルシウスに戻す。

「あつたりまえじゃん！ほら、来なよ！」

そう言つて手を伸ばすと、セルシウスはゆっくりとこちらに近づいて来た。

そしてその手を取ろうとした時、

ドン！

「っ！」

一発の弾丸がセルシウスに当たった。

その場にドサと倒れるセルシウス。

「ち！役立たずが」

「セルシウス？セルシウス！」

体を揺るとまだ、息はあるようで弱々しい返事が返ってきた。

「・・・ありがとう、とう・・・お前たちと会うことができてる・・・良かった」

伸ばしてきた手を握る。

でも、すぐに消えて後には石だけが残った。

「セルシウス！」

『プリムラ！その石にマナを送れ！急げばまだ間に合う！』

「オーくん？」

『急げ！このままでは消滅してしまうぞ！儂も手伝う！』

「う、うん！」

聞いている暇なんて無い！今はセルシウスを助けないと！

「ちーやらせるかよ！」

「邪魔はさせんぞ！」

「な！ぐあー！」

「ミラ！」

『プリムラ集中しろ！今はセルシウスのことだけを考えるのだ！』

「あ、うん！」

そうだ、みんなが守ってくれているんだから、あたしは集中しないと。

マナを注ぎ続けて、石が明滅し始めたのを合図にオーくんが言った。

『よし！一気に行くぞ！』

「分かった！」

「『ハアアアアアアアアア！』」

あたしの白いマナとオーくんの紅いマナが一気に注がれ、石が眩い光を放った。

「一緒に生きよう！セルシウス！」

石の光が収まった時そこにはさっきまでの姿とは違ったセルシウスがいた。

服はオーくんのマナの影響からか、紅くなっており、髪はあたしのマナの影響で白くなっている。でも白髪みたいに見えるんじゃないかと、綺麗だった。もともとが美人だからそう見えるんだろうな。

「セルシウス！」

「……ありがとう、プリムラ、オーさん。2人のお陰で私はまた生きることができる」

微笑んだセルシウスはあたし達にそう言った。

「うん！それじゃ、今まで貴女を縛ってた人を倒そうか！」

「ええ！」

あたし達はジランドへと向かっていった。

精霊の主死す

「お待たせ、みんな！」

「プリムラ！あれ、その人って・・・？」

後衛で援護しているエリー達の所に行くと、こっちを見たエリーがセルシウスを見て、疑問を持った顔をしていた。

「セルシウスだよ」

「随分お姿が変わられましたね？」

「プリムラとオーさんのマナの影響だ。髪はプリムラ、服はオーさん」

「成る程」

『あまり話している暇は無いぞ？』

オーくんの言葉であたし達はそうだったと思い直し、ジランドを見る。ジランドは押されていたが、まだ決定打を与えられていないからなのか、まだまだ動けそうだった。

「行くよ！オーくん！セルシウス！」

『ああ！』

「ええ！」

オーくんは飛びあたしとセルシウスはジランドに突っ込む。

「ミラ！ジュード！アルヴィン！あたし達に任せて！セルシウス！」

「共鳴ね！」

「プリムラ！ジュード、アルヴィン！」

「うん」

「おう」

走ってきたあたし達を見て3人はジランドから離れた。

ジランドはあたし達に向かって発砲してきたが、それをセルシウスが氷の壁で防ぎ、そのまま氷を砕いて攻撃に転じる。それを見ながらあたしは、

「「便利だな」」

と思った。

「って・・・あ、共鳴してるから？」

「そ。いくわよ！」

「オツケー！」

「調子に乗るなよ！道具の分際で！」

「私はもう道具じゃない！プリムラ！」

「覚悟してね！」

セルシウスは氷でジランドを囲み視界を一時的に封じた。その隙にあたしは背後に回り込み直後発砲音が聞こえたがセルシウスはそれをまた氷で防ぎ、今度は砕かずに形を変形させて剣にした。

氷はあくまで目くらまし役割をするためのものだから、そんなに頑丈に作っていなかった様で、さっきの一発で穴が空いた。ジランドは今度はかい攻撃で、大人2人くらいなら余裕で通れる大きさの穴を作った。

「ハアツ！」

「ふん！この程度で倒せると思ってたのか！」

「思っていないよ！」

「なに！？」

氷からジランドが出たのを確認したセルシウスはあたしの近くの氷を解除して道造ってくれた。セルシウスに気を取られているジランドに背後から攻撃を仕掛ける。

「喰らうか！」

『喰らわせるだけだ！』

「な！次から次へと！鬱陶しいんだよ！消し飛ばせ！」

オーくんの攻撃も躲したジランドは銃にエネルギーを溜始めた。

「うわぁ・・・ちよつとやばい？」

「大丈夫よ！ジランド！オーさんに気、取られすぎ！」

「な！」

セルシウスを見るとジランドの銃を凍らせていた。
早すぎて気付かなかった。

「流石セルシウス！それじゃ、止めと行きますか！」

「ええ！」

「積年の恨み！」

「晴らしてもらおう！」

「「発勁！！！」」

ドーン！

「ぐは！」

ジランドの前と後ろから掌を当てて内部で互いのエネルギーを合わせる。

倒れ伏すジランド。

「ぐ……やつと源霊匣を作り出したつてのに……」

聞き慣れない言葉に首を傾げているとセルシウスが私のことだ、と言った。セルシウスは精霊術そのものが形を成した存在で、化石になったセルシウス、さっきの石にマナを注ぎ誕生したみたいだ。

そして源霊匣は黒匣と違って精霊を殺さないとも言っている。

「何故だ？2千年前、黒匣に頼る道を選んだのはお前たちだろう？」

「俺じゃねえ！」

そう言った直後ジラントは突然苦しみ始めた。

源霊匣は強大な力を得る代わりに負担も計り知れない、ということだと思う。

「断界殻がある限り俺たちの計画は終わらねえ！ザマあ見やがれ！
ぐあああああ！」

ジラントは苦しみ、そして息絶えた。

アルヴィンはジラントに近づき懐から銃を取った。

「これは返してもらっぜ？ジラントール・ユル・スヴェント……
叔父さん」

開いていた目をそっと閉じながら、そう言って……。

「既に決していたか・・・ん、プリムラ！何故ここにいる！」

声が聞こえた方を見るとお父さん達がいて、あたしを見つけたおじちゃんも驚きの声を上げた。

「えへへ・・・」

『プリムラ、まだ完全には治っておらんのだろうか？ゆっくり休め』

「ありがと、オーくん。確かにそろそろ、限界、かな・・・」

戦ってる間は集中してたから何とか耐えたけど、気を抜いたらもう駄目だ。

あたしはオーくんにもたれ掛かった。

〈SIDE OUT〉

〈SIDEセルシウス〉

『・・・あまり無茶をせんで欲しいのだがな？言っても無駄か』

足にもたれ掛かったプリムラをオーさんはそっと抱き上げ、優しい声でそう言った。プリムラを見る目はまるで親が子を見るような、慈愛に満ちた目で、見ている私もなんだか、胸が温かくなった。

みんなも同じみたいで確かに、などと言いながらも顔は嬉しそうだった。

その間にミラさんは槍の所に行き、何か操作を始め、四大精霊を召還した。

「無事で嬉しいぞ、お前たち」

『ええ。ところでプリムラは？』

『あそこではないか？』

『少し見ない間に大人数になったね』

『賑やかでいいでしょ。でも、プリムラは眠ってるようですね』

「風邪が治りきっていないのに、無理をして来たのだから仕方あるまい。

話は後でいくらでもできる。今は槍を破壊しよう」

「マクスウエル」

入ってきた5人の中で一番威圧感を放っている前にファイザバード沼野で見た人がミラさんと呼んだ。

「こればかりはお前にも譲れない」

ミラさんがそう言って四大精霊を四方に展開させようとしたら、

ズドオオオオン！

と突然強大な力が私達を押し潰した。

「ぐあー！」

とても立っていられずこの場にいる全員が倒れ動けずにいる。

オーさんは立てるだろうけど、自分が立っていたらプリムラが影響を受けてしまうからか、体を覆うようにしてしゃがんでいる。

「この程度の術、破って見せる！」

「おいババア！何とかできねえのか！」

「桁が・・・違いすぎる！」

「これ程の術は、始めてじゃわい」

「破る・・・そうだ！クルスニクの槍を使っただよ！あれは術を打ち消す装置なんだから！」

確かにそうすれば、この術を破ることもできるだろう。でも、槍を起動させるだけのマナは既に残っていない。ここにいる全員がマナを送れば何とかなるかも知れないけど。

それを聞いたミラさんが力を振り絞って立ち上がり、槍に向かって行った。

「お前たちが命を危険にさらす必要はない・・・すまないな、お前たち」

「ミラ？・・・ミラ！」

が、倒れるミリアンを見ていることしかできなかった。

「ミリアー……！」

そして、崩壊が進んだ船は……海に飲まれていった。

二・アケリア霊山へ

オーさんに助けられ私たちは事なきを得たが、プリムラはまだ目を覚まさず、何より断界殻を張ったミラさんが死んだはずなのに、空は夕焼けのままだった。それはつまり断界殻が消滅していないということ。

あれから数日、私はプリムラ、オーさん、エリーゼさん、ローエンさんと一緒にいる。プリムラは1日寝たままだったが、翌目を覚ました時には元気になっていた。そして、ミラさんが死んだことを伝えると、

「そ、んな・・・嘘、でしょ？ミラが・・・そんな簡単に死ぬはずが・・・」

そう言いながら私達を見回し、誰も何も言えず目をそらすしか無かった。

そして、プリムラはエリーゼさんの胸で泣き、抱きつかれたエリーゼさん、それにローエンさんもプリムラが声を上げて泣いたのを初めて見たのか、とても驚いていた。

泣き疲れて眠ったプリムラを見ながら、私たちはこれからどうするかを話し合うことにした。

『儂との修行中も先ほどの様に泣くことは無かったプリムラが……』

「プリムラさんはまだまだ小さな子どもなのです。無理もありません」

「でも……またプリムラを悲しませてしまいました。わたしたちにもっと力があればミラを助けることもできたかも知れないのに」

「頑張ったのにー」

あの状況じゃたとえ力が合ったとしても誰も何も出来なかっただろう。

ガイアスでさえまともに動けなかったのに……。

「エリーゼさん、どれだけ『もし』とすることを考えても結果は何も変わらない」

「セルシウス？」

「大事なのはこれからどうするか、と云うことよ？」

「これから……」

ミラさんが救ってくれた命を無駄にしない為に。

「まずはジュードさん達と合流しよう。どこにいるかは分からないが、何もしないよりはいいとおもっ」

『僕は一旦別れるとしよう。目立ち過ぎるからな・・・プリムラの
こと頼んだぞ?』

「はい。気を付けてくださいね?」

『ああ』

オーさんはそう言って飛び立った。

「ジュードさん達がいそうな場所に心当たりはあるか?」

「ジュードさんならばイル・ファンにいる可能性が高いですが、あ
そこからは遠すぎます・・・ハ・ミルの方角へ向かって見ませんか
?」

「いるでしょうか?」

「分からない。だが、何もしないよりはいいだろう・・・早速・・・
ん?」

空から精霊の気配を感じ、その方角を見ているとミュゼが飛んでき
ていた。

私たちは急いで隠れ、暫く辺りを見回していたミュゼが飛んでいく
のを確認してハ・ミルに向けて出発した。

数時間してプリムラも目を覚まし、ハ・ミルに向かっていていることを
話した。まだショックは大きいみたいだけど、

「何もせずじっとなんしてられないよ。行こう!」

と言って歩き出した。

「私は思っていたよりも、子どもではありませんでしたね・・・年は取りたく無いものです」

「プリムラは強い子です!」

「そっだぞー!」

「そうでしたね・・・行きましょう!」

ついで行くエリーゼさん、ティポさんとローエンさん。

「貴女とオーさんに出会えたこと・・・本当に感謝しています」

〈SIDE OUT〉

〈SIDE プリムラ〉

ミラが死んだと聞いた時は、信じられなかったけど、みんなを見ると信じざるを得なかった。結果あたしは泣いて、眠ってしまい、起

きたらジュード達を探す為にハ・ミルに向かっている所だった。

エリー達と一緒にハ・ミルを目指して2日。

その間あたし達はミュゼによって襲撃を受けた場所を何度も見た。

到着したハ・ミルに人影は無く、あたし達はエリーがいた小屋に向かい、そこでジュード、レイアと再会した。

「みんな！」

「プリムラ！もう風邪はいいの？」

「うん。バッチリだよ。ねえ、アルヴィンはいないの？」

小屋にはジュードとレイアの2人しか見当たらなかった。聞くとどうやらジュードとアルヴィンが戦ったそうで、その後アルヴィンは何処かに行ってしまったらしい。

「そっか・・・これからどうする？」

あたしが聞くと、ガイアスがイル・ファンでナハティガルと一緒に大規模な動きを始めたことをローエンから聞き、イル・ファンに向かうことになった。

イル・ファンに着いた時、待ちで誰かが暴れていた。広場に行ってみるとそこにはアルクノアの兵士がいて、逃げ遅れた人に攻撃をし

ようとしていた。

「セルシウス！」

「ええ！凍れ！」

「ぐあ！なんだこれは！」

セルシウスの氷で動きを封じ、その間に逃げ遅れた人を助け兵士を撃退する。

「ローエン！戻ったか！」

「ナハティガル！それにガイアスさん、ジャオさんも！」

「おじちゃん！」

「プリムラ！無事であつたか！」

「あまり心配をかけなくてくれ」

「うん！」

それから、クルスニクの槍を回収することを聞き、あたし達もついて行くことにした。街のことはナハティガルに任せて。今のナハティガルは独裁体制はしなくなっており、不器用ながらも国民のことを思つて行動しているみたいだ。そんなナハティガルを受け入れる民も確かに居て、自らの意思で付き従う兵もいる。

「頑張つてね？王さま！お父さん！」

あたしはそれだけ行って先におじちゃんと海停に向かった。

海停に着いて船に乗るとウィン兄ちゃんがいた。そこでジュードはミラの使命が偽物だったこと、本物のマクスウェルを探しそうと思っ
ているということと言った。

「マクスウェルの居場所・・・考えられるとしたら精霊界か」

「精霊界・・・そこに繋がる道は知らないの？」

分からないと首を振るセルシウス。

「俺は異界炉計画を止める」

突然おじちゃんがそう言い出した。

「槍を使ってエレンピオスに侵攻するつもりですか？」

「リーゼ・マクシアを守る為だ」

槍を使うには大量のマナが必要。そのことをジュードが言って、お
じちゃん
は人と精霊が犠牲になるのは本意ではないと言った。

「ガイアスも想いを守ろうとしてくれるの？」

「そうかも知れない・・・いや、そうなのだろう。俺の中でもあれ
だけ大きな存在となったのはプリムラを除いては初めてだからな」

「え、あたし？」

「お前は気付いていないかも知れないが、俺たちに取ってお前の存在は大きいのだ。いつも無茶なことばかりするからな・・・」

そうだったんだ・・・本当に知らなかったな・・・。

あたしって何かしたっけ？

いつもみんなと遊んで、忙しくない時はお父さん達と遊んだりはしたけど、それ以上のことなんて何もしてないよ？

うーん・・・いくら考えても何も出てこないよ？

一体何をしたんだろうか？あたしは・・・。

「まあ、いいか・・・ん、あれみんな？」

「向こうに居るわよ。何を考えていたの？」

思考の海に浸っているといつの間にか槍が沈んだ場所に着いたようでみんなは引き上げの様子を見ている所だった。

隣にはセルシウスしかない。

「あたしっておじちゃんたちに何かしたのかなあ・・・って思っただけ？そんな大きい存在と思われようなことは何もしてないし」

「自分では気付かないだけで、何かをしたのだろうか？あまり気にす

る必要はないと思うぞ?」

「そうなのかな?」

「フフ・・・ほら、私達も見てみよう」

「・・・そうだね」

ジュードたちの所に行き、槍があがってくる様子を見ていると遠くから何かが飛んできた。

「ミュゼー!」

ジュードが叫びそれによってこちらに気付いたミュゼは飛んできた。

ミュゼをダウンさせるとおじちゃん came。

「ミュゼ、君はどうして?」

「私は・・・リーゼ・マクシアを守ってるだけよ!」

「君のリーゼ・マクシアを守る理由ってなんなの?」

「知るわけないでしょう!」

逆ギレ?

「怒りすぎると肌が荒れるよ?」

「え、うそ!？」

レイアが反応した。

そんなに気にしなくてもいいと思うけど、綺麗だし。だからエリーもそんな確認しなくていいんだよ？まだそんなことに気を遣わなくていいんだからね。

「肌云々はともかく・・・命じた者がいるな？」

「ミュゼ、教えて。マクスウェルはどこにいるの？」

「!マクスウェル様に何をするつもり!」

やっぱり本物が居るんだ。

「ねえ、ミュゼ？」

「何よ!」

「マクスウェルの望みはこんなことなの？」

「当たり前よ!これを望んでおられたのですよね!さあ、マクスウェル様!この者達を裁く命を!」

そういつて高々と手を挙げるミュゼだが、暫く経つても何も起こらなかった。そして何処かに飛んでいったミュゼをおじちゃんがいバーンで追いかけて行った。

あたしたちも追う為、ニ・アケリアに近いイラート海停に向かうと、
ウィン兄ちゃんが立ち止まり兵士があたし達を囲んだ。

「どづいつことなの？ウィン兄ちゃん」

「・・・危険だからだ」

「何が？」

「ジュードさんをマクスウェルに会わせたくないのですね？」

ローエンの問いにウィン兄ちゃんは無も言わなかった。

そしてそのまま、兵士たちにあたしたちを捕らえるように行って何
処かへ去っていく。

ジュードは何か悩んでいるのか止まっていたが、あたしはそんなこ
とに構わず、

「でりゃあー！」

「ガハ！」

お得意ドロップキックをかました。

落ちるあたしをセルシウスがキャッチしてくれる。

「ナイスキャッチ！」

「オーさんにも頼まれているからな」

みんなもそれぞれ兵士を撃退して、ジュードはせめて合わせようと
言ったが、あたしとセルシウスを除くみんなは冷めたような目で見
ていた。

「おじちゃんたちどこに行ったのかな？」

「1つだけ思い当たるでしょう？」

「二・アケリアの霊山ですね！」

「ええ、そこに賭けてみましょう」

あたし達は二・アケリア霊山に向かった。

「ところでセルシウス、いい加減降ろしてくれない？ 疲れるでしょ
？」

「いや、問題ない。というか放したくない」

「そ、そうなの？」

「うむ」

「なんか、堅い意思を感じるね？」

「うん」

「そうですね」

「いいなあ・・・セルシウス」

「エリーゼもプリムラとくっついていたいもんねー」

とまあ、何の緊張感も無くあたし達はミラの社に到着した。

そこにはなんか白い人がいた。ファイザバード沼野で槍を起動させた人だ。

その人にローエンがおじちゃんとミュゼ来たことを聞き、白い人はウイン兄ちゃんも行ったと教えてくれた。あたし達は先に進もうとしたけど、白い人に止められどいう訳か戦うことになり、ワイバーンも出てきた。

「ジュード、あの人となにかあったの？うわぶ・・・あはは。よしよし」

あたしはワイバーンとじゃれながらエリー達に聞いた。

「まあ、色々あったんだよね・・・ていうか、プリムラの所為で緊張感の欠片もないと思うのはわたしだけかな？」

「いえいえ、私ですよ？レイアさん」

「わたしもです」

「ぼくもー」

「いいじゃないか。和むし」

『確かに』

ジュードと白い人はめっちゃ戦ってる。

「おいお前！何人のワイバーンを手懐けている！」

「いいじゃん別に・・・遊びたい盛りなの！あたしは！」

9年間散々遊んでたし、旅を始めてからも遊びまくってたけど、1歳はまだまだ子どもの心が残ってるんだよ！

まったく！

「な！」

「余所見してる暇なんてないよ！だあ！」

「しまっ・・・ぐあ！」

それからジュードが連激を浴びせて白い人は倒れた。

悔しがる白い人の横を通って先に進もうとすると、白い人が自分は特別だと言い始めた。

「特別な人なんていないよ？」

「なに？」

「プリムラ？」

みんながあたしを見る。

「それに、そんな不確かな物に拘っても何も変わらない・・・自分が自分として在ることができればならあたしはそれでいいと思うけど？巫子だろうと何だろうと結局は人間なんだからさ？」

「・・・だが！俺はミラ様の巫子だ！お前がなんと言おうと特別だ！」

「そう思うならそれでもいい。それが、貴方が貴方としての在り方なら」

「・・・霊山には社が入れる・・・さっさと行け。もう二度と俺の前に現れるな！」

そういつて白い人は自分から去っていった。

ジュードはそんな白い人の背を見てもう会えないと思うと言い、先に社に入っていく。

「それじゃ、君ともさよならだね？元気で・・・むぐー！」

さよならを言って進もうとしたらパーカーの襟を啜えられた。

振り向くとワイバーンが上まで連れて行ってくれるとのこと。

先に行ったジュードを呼び戻して、背中にあたしとエリー、セルシウス、足にジュードとレイア、ローエンが捕まり飛び立つワイバーン。やっぱり多すぎたのか少し速度が無いけど仕方ない。

中腹辺りまで運んでもらってそこからは歩いて行くことにした。

「ねえ、ソグド湿原にいる他の子とは雰囲気が違う子に、オーデンロイドを呼んでって伝えてくれない？」

「グウ」

「ありがと。それじゃ、またね？」

湿原に向かっていくワイバーンを見送ってあたし達は進み始めた。

途中でおじちゃんとミュゼが戦っている所を目撃したりして、声を掛けようと思ったたらジュードに止められた。2人が去ったのは確認して、頂上を目指して行き、やっとのことで頂上に着いた。

「ん？プリムラ？」

「なんですって？」

頂上にはアグ姉ちプレ姉が居た。

2人の後にはアルヴィンも・・・。

世精ノ途

「く！止めてよ！アグ姉！プレ姉！」

「悪いがお前が相手でも手加減は出来ないんだよ！」

「ごめんなさい！でも！やらなければ私たちの居場所が失くなるの
！」

「プレザ・・・」

頂上に来たあたし達はおじちゃん達が入っていった世精ノ途へと繋がる空間の歪みに入ろうと、思ったけど、それを2人に邪魔された。その時にアグ姉が、居場所はここで、失敗したら捨てられると言っていた。

おじちゃんがそんなことする訳無いのに・・・。

どうして信じられないの？

アルヴィンも一緒に戦っているけど、やっぱり四象刃なだけはある。昔、何度か戦ったことはあるけどその時の比じゃない。

既に頂上はボロボロになっていつ崩れるか分からない状態だ。

「おじちゃんが2人を捨てるなんて！ある訳ないじゃんか！」

「そんなの分かんねえだろ！怖いんだよ！あたしたちは！」

何が怖いのか？

「フッ！」

「なに！？」

飛んできたアグ姉の術を拳で弾くと驚きの声を上げるアグ姉。

「だあ！」

そのまま跳躍して殴りかかるけど、剣で防御される。

それでも構わずに連打を浴びせて反撃の隙を与えない。

「く……くのー！」

「やあっ！」

ガキイイーン！！

あたしの拳とアグ姉の剣がぶつかりある音が響いた。

「いつの間にか強くなったのね！でも、隙だらけよ！」

「お前もな！」

「！」

「プリムラには手出しさせねえぞ？いくらお前でもな」

「ええ。そんなことはさせませんよ？」

「レイアとセルシウス、エリーゼ、ティポはプリムラの援護を！」

「うん！」「」

「ああ！」

ブレ姉はアルヴィン達が抑えて、エリー達があたしの援護にこようとしたけど、

「来ないで！」

「！」

あたしはそれを止めた。

「アグ姉とはあたしが決着をつける！」

「舐めるなよ！一人で勝てると思ってんのか！」

思っていないよ・・・それでも、アグ姉とはあたしが決着をつけたい。これは只のあたしの我が儘。それでも、誰にも手出しはされたくない。

「どうして、信じられないの！おじちゃんはいつもあたし達のことを考えてくれてた！

そんなおじちゃんが2人を捨てる訳無いじゃん！」

「お前だって、11年前に捨てられてたじゃねえか！」

『！！』

「！駄目よ、アグリア！」

「うっせえ！いつかは知ることだろ！」

「知ってたよ？最初から」

「なに？」

「プリムラ？」

「ハッ！」

「ぐあ！」

一瞬気が緩んだアグ姉を武器ごと吹っ飛ばす。

みんなはあたしを見ていた。

「あたしは11年前、森に捨てられていた」

正確には違うけどね・・・それは言ってもどうにもならないだろう。だから、お父さん達には悪いけど、嘘をつくね？

「冷たい雪の中に捨てられていたあたしをお父さんが従えている魔物が見つけて、それからあたしはお父さんに捨てられて育てられた。・
・おじちゃんとウイン兄ちゃんとアグ姉にプレ姉、お父さんに囲まれて、本当の家族のように・・・」

楽しい毎日をみんなと過ごして・・・。

「お前・・・」

「捨てられたあたしでさえ、おじちゃんは捨てなかったんだよ？
なのに、2人を捨てるなんてことを・・・そんな悲しいことを言わないですよ」

知らずの内にあたしの目には涙が溜まり始めていた。
それは今にも溢れそうで、止められそうにない。

「・・・・・・・・・・」

「プリムラを悲しませることは許さないぞ？」

隣に来たセルシウスがそう言った。

そして、音もなく飛来した、

『無論儂もな？』

オーくんも。

みんなは本当にいつの間に来たのか分からないオーくんを見て驚い

ていた。

『どういった状況かは分からぬが、我が友が悲しんでいるということだけは分かるのでな?』

「僕たちだつてそうだよ? プリムラの悲しんでる所は、二度と見たくないんだ」

ジュードが言った言葉にみんなが頷いたのが分かった。 どうして、そう思ってくれるのかは分からないけど、嬉しかった。

「あたし達だつて・・・そうに・・・」

ゴバツ!

「!」

「! アグ姉! プレ姉!」

あたしたちの戦いの影響か、ダメージを負った地面は耐えきれずに崩壊を始めた。 端の方に居た2人はそれに巻き込まれ、あたしは足を蹴って手を掴もうとしたが、

「あつ!」

掴めなかった。

「いやあああああー!」

『泣くでない!』

「え?」

振り向くとオーくんは既に飛んでいた。多分今まで見た中では最高速度で急降下していく。

少しして戻ってきたオーくんの腕の中には、

「う・・・」

プレ姉と、

「たく」

アグ姉がいた。

「うわああああん!アグ姉え!プレ姉え!」

「わ!危ないわよプリムラ」

「お前まで落ちたらどうするんだ?」

堪らず抱きついたあたしにそう言ってくる2人。

『もう悲しませるでないぞ?』

オーくんの言葉に2人がどういふ反応をしたのかは分からないけど、あたしは2人が無事だったことが嬉しくて、暫くの間泣き続けた。

「う・・・ぐす・・・良かったあ・・・ホントに・・・よかったあ・・・うう・・・」

それから2人に宥められて何とか泣きやんだあたしは、先に歪みに入って行ったみんなをセルシウスと一緒に追った。オーくんはサイズ的に無理があつたから留守番をしてもらうことになった。

〈SIDE OUT〉

〈SIDE オーデンロイド〉

『まったく・・・最近はずむラが泣いたりすることが多い・・・友の涙はあまりみたくないのだが』

船でミラという仲間が死んだと聞かされ、泣いたはずむラを見た時は本当に驚いた。修行中すら、全く泣かなかつたのだから・・・。

「ていうか、お前何なんだ？」

『む？ そうだな、自己紹介くらいしておこう。僕はオーデンロイド。20年前にトリルという者によって創りされた七体の魔装獣の内の一体だ』

「創り出された？」

猫のような耳と尻尾を持つめがねを掛けた女性が復唱した。

それから20年前の戦争で突如発生した巨大津波に飲み込まれ、トリルが死んだこと、仲間の内2体の存在が感じられなくなったこと、そして、プリムラに会ったことを話した。

「プリムラは元気だった？」

『ああ。あのような娘が生まれて来てくれたことを僕は感謝しておるよ』

「らっ？」

「ああ。先ほど話した存在を感じられなくなった2体以外は皆、プリムラを友として認識しておる」

ドランソードとメランプロン。

奴らはどこに居るのだろうか？

「その2体ってのは、エレンピオスにいる可能性はないのかよ？ こっちじゃ存在を感じられないんだろ？」

「エレンピオスか・・・」

「こリーゼ・マクシアの外に広がるもう一つの世界。確かにそこに行くことが出来れば、可能性はあるかも知れぬが・・・儂にはその手段がない。」

「でも、そうだとすると・・・どうやってエレンピオスに行ったのかしら？」

「そういや・・・そうだよな」

『むう・・・結局振り出しに戻ってしまったか・・・早く戻ってこんなふう、プリムラ達は』

「そうね」

「久しぶりに遊びたいしな・・・何するよ？」

「私もやるの？」

「当たり前だろ？」

「・・・そうね」

『その時は儂も混ぜてくれ』

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

黙ってしまった。

。プリムラ・・・セルシウス・・・はよう、戻ってきてくれえ・・・

〈SIDE OUT〉

〈SIDE プリムラ〉

「「だあああああああ！！」」

マクスウェルの攻撃を居躲しながら突っ込みジュードと一緒に殴りかかる同時に、

バキイイイイン！

と何かを突き破ってミラが飛び出してきた。

ガッ！ガン！

と何度かバウンドして止まるマクスウェル。

「よっと。ナイス、ジュード」

「プリムラもね？」

コツンと拳を合わせる。

「そして お帰り、ミラ？」

「ああ。もう風邪は引いていないか？」

「バツチリだよ！」

「そうか」

その後、何か言おうとしたジュードの唇に人差し指を当てたミラはマクスウェルを見据えて言った。

「全ての者の未来を守るのがマクスウェルの使命ではないのか？」

「なぜこんなことが・・・四大が謀ったというのか」

「迷ったな？それでは本来の力が出せないぞ？」

「ま、それでも負けるつもりなんか無いけどね？」

四大精霊が傷を回復してくれて、あたし達は集まり再びマクスウェルと対峙する。

「さて、そろそろ決着をつけようか？おじいさん？」

「きさま・・・」

あたしを睨むマクスウェル。

「いくよ？エリー」

「うん！」

「お先に！」

あたしは駆け出し、マクスウェルが放ってくる攻撃を避けながら突っ込んでいく。後からみんなも続いて掛けてきて、当たりそうになった攻撃はエリーとローエンが逸らせたり、セルシウスが凍らせたりしてカバーしてくれる。

そして、真下まで辿り着いたあたしは椅子ごとアッパーで殴り飛ばした。

「いつまでも座ってるんじゃないの。エリー！」

「分かった！」

「痛いけど！」

「我慢です！」

「デスサイズ！Ver?!!」

「ぐああ！」

名前の通り以前ファイザバード沼野で使ったデスサイズの強化版。違うのは鎌の数が4本に増えたことと、女神自身も一緒に攻撃すること。威力は単純に4倍だからね。

「結構効いたでしょ？」

「決まりました！」

「お見事です！エリーゼさん！お次は私と参りましょう！」

「はい！」

「アゼリア・ブレード……」

ローエンの氷によって動きを止めた所をエリーが産み出した闇の剣で斬り裂く。

そこに、

「レイア」

「うん！いくよジュード……」

「封舞活伸劇……」

「アルヴィン！」

「OK！ミラ様！」

「襲爪雷斬……」

ジュードとレイア、ミラとアルヴィンの共鳴術技が炸裂した。

こんだけ立て続けに喰らえば結構きついでしょ。それでも立ち上がる辺りは流石精霊の主というかなんというか……。

「レイジングサン！」

「エンブレイスエンド……」

ミラの炎とセルシウスの氷が同時にマクスウェルを襲う。

「なめるなああああ！サイクロン！！」

突如発生した、大竜巻によって炎と氷の両方が掻き消された。
でもねえ……。

「そんな自分の視界を悪くするような技を使うのは、不用意だと思
うよ？」

「全くだな」

「なんだと！」

後に回りこんだあたしとセルシウスを見て驚くマクスウェル。

「落ちろ！」

ドガッ！

「又お！？」

椅子ごと地面に向かって叩きつけてそのまま上空から、

「氷の槍は！」

「全てを貫く！」

「氷襲連舞脚！！」

氷を纏った連続蹴りを浴びせる。

「そして！おじちゃん直伝！闘・魔人王拳！」

「ぐああああああ！」

おじちゃんほどじゃないけど、威力は十分ある。

このあたしの一撃によってマクスウェルは地に伏した。

「いよっしー！」

エレンピオス

あれから、マクスウェルが断界殻を消すことを決めてくれて、その維持に使っていたマナがあれば、数年、長くて数十年の猶予が与えられるといい、その間にリーゼ・マクシアとエレンピオスの両方を救う方法を考えることになったけど、

『この世界の神に等しい座を降りるといっのか？』

そう言っておじちゃんが現れた。

そして、空間が裂けてクルスニクの槍と一緒にミュゼも。

2人はマクスウェルを槍に磔にして、おじちゃんはミュゼの胸辺りから長い剣を取り出した。その剣は空間を切り裂く力を持っていて、それがミュゼの力だった。

『お前たちはリーゼ・マクシアで大人しくしている！』

剣を振るってあたし達の後の空間が裂けてあたし達はそれに吸い込まれそうになった。

『おじちゃん！』

『』

『え？』

何かおじちゃんと言ったけど、小さ過ぎて聞き取れなかった。

そしてマクスウェルが開いたおじちゃんが切り裂いた空間との裂け目とは別の穴が空いて、あたし達はそちらに吸い込まれた。

窓の外に広がっているのは、あたしにはむしろ当たり前の光景で、ただどエリー達にとっては珍しい光景。こんな光景は久しぶりに見たな、と思いながら膝で寝ているエリーの頭を撫でる。セルシウスは隣で寝ており、今はジュードが目を覚ますまで待っている。

「エレンピオス、か・・・来ることになるなんて思ってもみなかった・・・元気にしてるかな？」

思い出すのは転生前に過ごした世界。地球のこと。

そして、

『亜美』

あたしを呼ぶ彼女のこと。

あたしが死んだのは16か17だったから、こっちに来て11年で・・・合計27〜28年。そういえば年齢の響きって28が一番良いって誰かが言ってた気がするけど・・・エリーはその年になった時、どんな女性になっているんだろう・・・。

「ん・・・プリムラあ・・・」

「ふふ……」に在るよ？エリー」

寝言であたしの名前を言う位にはあたしのことを思ってくれているのかな……。

「プリムラは渡さんぞ……」

「むぐ！」

寝ているはずのセルシウスが抱きついて来た。どんな夢見てるんだろ？あれ、でもセルシウスって精霊だから夢は見ないのかな？でも、こうして寝てるし……見てるとしたら、あたしとオーくんが与えたマナの影響もあるのかも知れないな……。

「わたしだってえ……ずっと一緒にですう」

今度はエリーも抱きついてきた。よく膝枕されてる状態から出来たね？そんなに器用だったっけ？

結局それからジュードが目を覚ますまでの十数分……本当に寝ているの、と思う2人に取り合いを続けられました。

「おはようジュード」

「うん。みんなも怪我とかはない？」

みんな頷く。

それから、バルンさんと言う人が出てきて、あたし達を丘の下で見つけたこと、アルヴィンの従兄であることを言った。足に怪我を負っているバルンさんは黒匣が無いとまともに歩けないそうだ。バルンさんが昼食を作ってくれている間にあたしたちは街を見て回るこ
とになった。

「ねえ、プリムラ」

「ん、何？エリー」

街を歩いて少しして、異界炉計画を撤廃しようと動いているおじいさんにジュードが募金をして、歩いて居るとエリーに呼ばれて、止まったあたしに釣られてみんなも止まった。

「捨てられてたって・・・本当なの？」

「なに！？」

驚いたのはミラ。知らなかったから当たり前か。

「うん。１１年前に森に捨てられていたのをお父さんに拾われて・
・それからは霊山で言った通りだよ？お父さん達に囲まれて、楽し
く過ごしてた。モン高原のみんなと特訓したりしてね？」

「そういえば、あそこの魔物って急に強くなってなかった？お陰で

逃げるしか無かったし」

「ええ、それは私も思っていましたか・・・まさか」

「そうだよ？9年間、あたしと一緒に遊んだりしていく内に鍛えられたみたいなんだ。

みんな元気だった？」

「ああ。元気過ぎるくらいには元気だったな」

「そっか」

なら良かった。多分みんなと別れた後に行っただろうから、あたしはいなかったし。

「お前たち、今は魔物のことよりもプリムラのことだろう？」

ミラがそう言うと、みんな思い出したようにあたしに目を向ける。

「まあ、あたしは別に捨てられたことについては何も思っていないだ・・・そのお陰でお父さん達に会えて、エリー達に会えたって言うても過言じゃないからね？それに、あたしの家族はお父さん達だからね・・・」

「・・・まさか、そんな過去があったとはな・・・ん？ちょっと待って、プリムラ。お前は前に、ジャオを家族だと言っていたが、話を聞く限り、分かっていたのだろう？本当の家族ではないことを」

「あ、そういえばそうだよな？」

「俺が似てないって言ったたら、普通に返してきたしな？」

カラハ・シャルルに行く途中のことだね。

「あの時はまだ言わなくてもいいかなと思ってたから・・・その所為で余計な気を遣わせるのも嫌だったし。結果的に嘘をつくことになつて、ごめんね？」

「いや、それは構わないんだが・・・もし、甘えたくなつたら甘えてくれていいからな？」

「・・・その時はよろしくね？」

「ああ」

「僕たちにも遠慮しないでいいからね？」

みんなが頷いた。

「ありがとう」

あつちに居た分も加算したら、ローエン、アルヴィンの次に歳取つてるけどね？

「そういえばセルシウスって何歳なの？」

「なんだいきなり？」

「いや、精霊でも歳は取るのかな？って思ってたね？ミラは20歳でしょ？」

「人間で言えばそうだな」

「私は・・・眠っていた期間も入れたら2000は下らないと思うぞ？」

『2000!!』

「そんなに？すごいね」

「・・・なんか、プリムラ反応薄くない？」

レイアが聞いてきた。

「いやあ・・・あたしって、あんまり驚きとかは顔に出ないんだよね？」

「そういや、そうだな」

「昔、アグ姉に後から驚かされた時も反応が薄すぎて、呆れられたんだけど・・・内心めっちゃびくびくしてるから出来れば余りしないでね？」

「うん」

「プリムラの嫌がることはしないよー」

「ありがと。そろそろ戻ろっか？」

あたし達は balan さんの住んでいるマンションに戻った。

ホールで balan さんとぼったり会って、これからヘリオボーグという黒匣の研究所に向かうらしい。その時に、ティポがご飯はー？と聞き、balan さんが出来てるよと言うと、

「やったー！・・・／／／」

喜んだエリーがみんなの視線を浴びて顔を赤くした。

危うく襲いそうになったよ・・・。

部屋に行つてからご飯を食べて、みんなが食べ終わった時にジュードがこれからどうするかを決めて欲しいと言つた。ジュードは balan さんが言つていたあたし達を見つけた場所に行けば、リーゼ・マクシアに帰れるかも知れないと言つて、レイアが

「ジュードはどうするの？」

と聞くと、リーゼ・マクシアとエレンピオスの両方を救う手段が見つかるまでは帰らないと言つた。

「一緒にいたい・・・だけじゃ、駄目なんだよね？」

「わたしたちじゃ・・・役に立ちませんか？」

「ううん。そんなことない。役に立つとか立たないとか以前に心強いよ」

でもそれだけじゃ、いけない。

それぞれがちゃんとした思いを持っておじちゃんに立ち向かわないと。

「エレンピオスから黒匣はなくせない」

確かにそうだ・・・。 balan さんだって黒匣が無いと歩けない。

そして、ミラがみんなに向けて言った。

「黒匣がなくならないのであれば、私は新たな精霊の誕生を見守る」

精霊も世界を循る一部と言って、迷ってる時間が惜しいと、ヘリオボーグへ向かうことになった。

レイアとエリーに着くまでに決めておいてくれないかなとジュードが言ってる。

商業区へさしかかった時、街道の方から人が走ってきた。その人達はヘリオボーグから来た人達で、研究所が黒匣なしに算譜法を使う2人に襲われたと言っていた。

「おじちゃん達だね。急ごう！みんな！」

『うん（ああ）（ええ）！』

あたし達は急ぎへリオボーグへ向かった。

雷の大精霊 ヴォルト

ヘリオボーグに着いたあたし達が見たのは大きな刀の痕と破壊された黒匣だった。近くにいた人に話を聞き、来たのがおじちゃん達だと分かり、先に進んだ。そこで、倒れている人を見つけて、ジュード達が治療してから、 balan さんがどこに向かったのかを聞いた。

向かった先は兵装研究棟。

そっちに行き、 balan さんを探していると、途中アルヴィンが一つの部屋に入り、あたしたちも続いて中に入った。そこには何か操作するものがある、アルヴィンはそれを慣れた手つきで操作する。結果半刻前に源霊匣のヴォルトが強制起動されたこと、ヴォルトが上に向かったことが分かった。

「セルシウスは何か知ってる？」

「雷を操る精霊、ということ位は知っているが、それ以外殆ど分からない」

「雷か・・・なかなか厄介かもね」

当たると痛そう。

なんて思いながら上を目指して進んでいると突然電気が消えた。

「きゃー！」

エリーが抱きついてきた。役得役得。

ティポはジュードにかみついたみたいで、ジュードのくぐもった声が聞こえる。少して非常電源に切り替わったのか、豆電球くらいの灯りが点いた。辺りにいる魔物みたいな機械を相手にしながら、さらに上を目指し、屋上に着くと、

「・・・ジジ・・・ガガ・・・」

球体の電気を纏ったヴォルトがいた。強制起動されたからなのかもしくは暴走しているのか分からないけど、苦しんでいるみたいだ。ヴォルトはあたし達の方を向き、攻撃態勢を取った。

「構える！」

「ジジ！」

「おっと！」

球体のまま突っ込んできたヴォルトを左右に分かれて避ける。エリーとローエンには後衛で援護してもらっ為にもこちらに引きつけないといけない。

「こっちだよ！」

「ガガ！」

「よし！でも当たるのは嫌だああああ！！来る！来るうつつうつつ！」

逃げては居るけどこっちは走ってあっちは・・・飛んでる？とにかく

く、それじゃこっちが遅いのは当たり前。

「ジジジジ！」

「誰かああああ！」

「グレアケイジ！」

「グラックワルツ！」

「ジジ！？」

「おわ！」

ギリギリ術に巻き込まれずに済んで見てみると、光の檻にヴォルトが閉じこめられて光線の様なものが乱反射して攻撃して、大きな岩が転がって来ていた。

「大丈夫？プリムラ？」

「うん・・・なんとか・・・ふう」

「ジュード！」

「うん！」

「「双碎迅！！」」

「「ジジ！」」

ミラとジュードの共鳴術技が決まったけど、流星は大精霊と言っべきか、まだあれだけじゃ暴走は止まらない。

「2人とも離れる！ブリザード！」

セルシウスが上空から術を放ちそれに対してヴォルトは、

「サンダーブレード！」

雷の剣で対抗した。

セルシウスの術は物理的なものじゃないから完全に消されることは無かったけど、空中にいたからまともな回避行動もとれず、サンダーブレードが掠った。そして、それは地面に降ってきて周りに電気を撒き散らした。

それはあたし達に少なくないダメージを与えた。

「エリーゼ！」

「うん！レイア！」

「「リザレクション！！」」

屋上一帯に回復陣が広がり、あたし達の傷を癒していく。

「とりあえずあの、電気をどうにかしないと触れることも出来ないよ。」

「さっき、僕たちの攻撃が当たった時、少しの間だけ破壊出来たけ

ど……」

「ああ、すぐにまた出てきたな。一気にたたむしか無いんじゃないか？」

「エリーゼたちの術を一気にぶつければ何とかなるんじゃない？」

「確かにそうだが、チャンスはそう何度もないぞ？」

「バニツシュボルト！」

「マジか！」

話している間にヴォルトがまた術を放ってきた。

「みんな伏せろ！ハアツ！」

セルシウスの声が聞こえた直後、半円上に展開された氷があたし達を囲み、雷はそれに阻まれた。

「大丈夫か？みんな？」

「うん。ありがとうセルシウス」

「構わない。さっきの話だが、もしヴォルトが妨害をしてタイミングがずれたら不発に終わる。そんなに何度も術は撃てないだろう？それなら、私達が一気にでかいのをぶつけて壊した方が良くないか？」

セルシウスの言う通り、そう何度も強力な術は撃てない。それなら

一気にでかいのをぶつけて壊して、そこを一気に叩いた方がいい。

バチ！バチチチチチ！

ヴォルトはエネルギーをためていた。今までの途は比べものにならない術を撃ってくる気だと言うのはすぐに分かった。

「みんな！」

あたしのかけ声で一気にヴォルトに接近して、術が撃たれる寸前、

「獅子戦吼！」

セルシウスとジュードが同時に放った攻撃で球体を破壊した。

「続けていこう！ジュードさん！」

「うん！」

「獣王滅殺！！！」

「ガガ！！！」

一歩引いて回転しながら力を溜めて同時に獅子戦吼を放ち悠に巨大な獅子の形をした闘気がヴォルトにぶつかる。

「皆さん離れてください！」

「グラビティ！！！」

「ガ！」

続けてエリーとローエンの共鳴術技が炸裂し、地面に叩きつけられるヴォルト。

やがて重力が収まり、

「ジ・・・ジ・・・」

ヴォルトの動きも止まった。

「何とか止まった？」

「・・・そのようだな」

ミラが剣を鞘に納めたのを見て、みんなも構えを解く。

そして、 balanさんがここまで居ないことに気づき、辺りを見ると突如空間が切り裂かれ、おじちゃんとミュゼが出てきた。

「意外なところで会ったな？」

「おじちゃん・・・」

「やっぱりエレンプィオスに来ていたのね？」

「ガイアスも源霊匣の可能性に気付いていたの？」

そんなものの上で民を生かすつもりは無いとおじちゃんは言った。そして、源霊匣が到底人に制御出来るものでも無いとも。ジュード

達の言葉にも耳を貸さずに、ミユゼが話しても無駄だと言わんばかりに此処に、居ても無意味だと言って、おじちゃん達は去っていった。

最後にあたしを少しだけ見て……。

「おじちゃん」

聞こえない様にぼつりと言う。

なんだか怖かった。

うつん、さっきだけじゃ無くて、世精ノ途で会った時も……あの時は何を感じていたのか分からなかったけど、恐怖だったんだ。

「バラン？バラン！」

「アルフレド？」

アルヴィンがバランさんと呼んだ声でハツとなり、見てみると昇降機が止まっていて、バランさんと作業員が閉じこめられていた。

「一度下に戻って助け出すぞ！」

「ジ……ジ……」

「！待って、ミラ！ヴォルトに力を貸してもらおう！」

あたしはヴォルトの近くにある化石が埋め込まれている黒匣を取り、マナを注ぐ。

「みんなもお願い！あたしだけじゃ無理！」

「ああ！」

セルシウスを始めとして、みんなが一緒にマナを注いでくれた。それで何とかヴォルトを役使することが出来て、昇降機を動かすことが出来た。

「セルシウス、ちょっと強力して？みんなは先に行つてて？すぐに行くから」

「ん？何をするつもりだ？」

「いいから、いいから。びっくりさせてあげる」

「プリムラ……どこにも行かないよね？」

「当たり前だよ、エリー。安心して？」

「うん」

みんなは先に下に行った。

〈SIDE OUT〉

〈SIDEセルシウス〉

「さて、それじゃヴォルトを復活させようか？」

「……………は？」

いきなりのプリムラの発言に私は自分でも分かるほど間抜けな声を出した。

「だって、無理矢理動かされて、仕方ないとはいえ傷つけちゃったもん。お詫びに自由にする位良いでしょ？」

そう言いながら黒匣から化石を取り外すプリムラ。そしてそれをつと地面において両手を翳した。

「ほら、セルシウスも手伝って」

「あ、ああ……だが、2人だけで出来るのか？」

「多少の無茶なんていくらでもしてきたよ。つい最近だったじゃない」

つい最近……ああ、マクスウェルと戦ったことか。確かにそうだ。

「そうね。やりましょうか」

「うん。行くよ？」

「ええ」

マナを両手に集めて少しずつ注いでいき、化石が明滅した所で、

「ハアアアッ！」「」

一気に注いだ。

そして、化石が力強く光を放ちそれが収まるとそこにはヴォルトがいた。

私と同じようにプリムラのマナの影響を受けたのか、髪が白くなっていた。私のマナも少なからず影響しているようで、服に氷に似たマークがあった。

「……………?」

訳が分からないのか、辺りを見回すヴォルト。

「ヴォルト」

「……………」

「君はもう自由だけど、どうする?」

ヴォルトはじっとプリムラを見つめ、

ガバツ!と抱きついた。

「ふお!」

変な声を上げるプリムラ。

「一緒に居たいんじゃない?」

「え、そうなの?」

「……」

こくと、相変わらず無言だが、頷いた。

「そつか。それじゃ、これからよろしくね？ヴォルト。あたしはプリムラ。この娘が」

「セルシウス。貴方と同じ精霊よ？」

「プリムラ……セルシウス……」

「そうそう。それじゃ、みんなの所にいこうか？」

そう言ってプリムラは先に歩いて行ったが、扉を開く寸前にこちらを振り向いて、並んで立っている私達を見て一言、

「なんか、2人つてきょうだいみたいだね？」

と言った。

そして最後に

どっちが上なんだらうね？

と付け加えて。

私は達は向き合って、

「……それも良いかもしれないな？」

「……」

笑い合った。

（SIDEOUT）

エレンピオスの夜々死を望む者々

あれから下に降りてみんな期待通りの驚きの表情をしてくれて、微精霊の源霊匣やそれを使えば精霊が死なずに済むこと、あたし達がどこにいたのか等を聞いて、そこに向かい、ジュードとミラが決戦の前にちゃんと自分の意思で考えて、リーゼ・マクシアに帰るか戦うかを決めて欲しいと言った。

一旦街に戻ることにその途中、あたしは丘とは別方向にある洞窟が気になったけど、今は時間も無い。行くのはまた今度にしよう。

戻ってきた時にはもう夜であたし達は明日の朝まで自由行動になった。

あたし、セルシウス、ヴォルトはマンシヨンの前のブランコにアルヴィンという。ついさっきエリーはマンシヨンに戻った。あたしとアルヴィンの頬にキスして。アルヴィンには妬けた……。

「みんな大人になっていつてるんだな……」

「ねえ……エリーは大人になったらどんな風になるんだろう？
綺麗になるのかな？」

夢で見たみたい綺麗な女性に成長するのかな。

「それを言うならプリムラの将来も私は楽しみだ」

「ボクも」

「・・・なんか、ヴォルトしゃべるのにはまだ違和感があるな?」

「でも術を発動する時は喋ってたよ?それなら話せても不思議はないでしょ」

「それもそうか。でもよ、プリムラ」

「何?」

アルヴィンはあたしの後にいる2人を見て言った。

「この2人って髪の色が変わってるのは何でなんだ?」

「ジルニトラで聞いてなかった?セルシウスもヴォルトもあたしのマナの影響で髪が白くなってるの。でも全然白髪みたいには見えないでしょ?」

「言われてみりゃあ・・・確かに」

あくまでマナの影響でそうなたただけだからね。

「じゃあ、セルシウスとヴォルトの服が少しだけ変わってるのは?」

「私はオーさんのマナ、ヴォルトは私のマナの影響だ。・・・ん?・・・」

アルヴィンの問いの答えたセルシウスは何か考え込んでいた。

ヴォルトはずっと空を見ている。そういえば、

「エレンピオスはちゃんと夜が来るんだね」

断界殻の外だからかな。

「ああ、そーいや、そーだ・・・20年振りだったから気付かなかった。霊勢があるリーゼ・マクシアじゃ、まずないことだよな」

地方によつてずっと夜だったり、ずっと夕方だったり、それも面白いと思うけど、やっぱりちゃんと陽が昇って、沈んで、次は月が顔を出す。

そんな当たり前の光景・・・。

「プリムラ・・・」

「ん・・・どしたの、セルシウス？」

今まで考え込んでいたセルシウスがあたしを呼び、ヴォルトとアルヴィンもセルシウスを見た。

「私、プリムラ、オーさん、ヴォルトは・・・ある意味家族みたいなものじゃないか？」

「・・・どうということ？」

よく分からなかった。

「ああ。私はプリムラとオーさんのマナによつて復活して、この姿になった」

「うん」

あたしの白いマナとオーくんの赤いマナで。

「そして、ヴォルトは」

「プリムラとセルシウスのマナで復活してこの姿になった」

「うん」

「そうだな・・・」

「ならば、プリムラとオーさんは私の両親と仮定して、父であるオーさんのマナを受けた私と母であるプリムラのマナで復活したヴォルトは、間接的にオーさんのマナを受けたことになる」

「でも、それだとヴォルトはあたしとセルシウスの子ってことにならない？」

「だが、オーさんのマナも少しだけ受けているだろう？その証拠に・・・ほら、ここ」

セルシウスはヴォルトの髪の毛の先端を指さした。あたしとアルヴィンもそこを見る。ヴォルトも見ようと自分の髪を掴んで目の前に持ってきた。

「少しだけ赤が混じってる」

「ホントだ」

「確かにな」

「本当だ」

セルシウスの言う通り、ヴォルトの髪には少しだけ赤が混じっていた。

「よく気付いたね？」

「私もさつき、気付いた。どこかにオーさんの影響が出ていないか気になってな」

「確かにこれなら、あたし達は家族って言ってもいいのかもね？」

「人間と魔装獣と精霊の家族か・・・すごいことになってんな」

「いいでしょう？」

「そうだな」

あたしが言うとアルヴィンは空を仰いだ。

あたしたちも何となく空を見上げる。

ひらりと・・・雪が降ってきた。

あたしたちは静かにぱらぱらと降ってくる雪を見つめていた。

＼SIDEOUT＼

＼SIDE???＼

ここに潜って何日が経つのか・・・我はいつになったら死ねるのだろっ？

人間に創られ、戦争をして、巨大津波によって仲間達とは離ればなれになり、メランプロン以外の存在を感じることも出来ない。

一体我は、なんの為に創られたのだ？

『誰か教えてくれ』

誰にも分からないと言っなら

＼SIDEOUT＼

＼SIDEプリムラ＼

悲しい夢を見た。

ただ漠然と・・・悲しいだけ。

あたし達は広場に集合していた。そこでみんなそれぞれの思いを言
つて、ジュードが掛け声を掛けて出発。

ルサル街道を通って丘に向かっている途中、あたしは昨日みた洞窟
がまた気になって、行かなければという思いに駆られそこで足を止
める。みんながそんなあたしのことを気にして、動きを止めた。

「プリムラ？」

「ねえ、みんな・・・あの洞窟・・・」

「どうしたんだよ？」

「何かあるの？」

分からない。

分からないけど・・・。

「時間が無いのは分かってる・・・でも・・・少しだけ」

「確かに時間はないな・・・だが、急げば間に合うだろうか？皆も構

わないか？」

「僕はいいよ？」

「わたしもです！」

ジュード、エリーに続いてみんな賛成してくれた。

「ありがとう！」

それじゃ、行こうと言う時にヴォルトがあたしを呼び止めた。

「なに？急がないと」

「ボクがみんなを連れて行く」

「え？」

「近くに来て？みんなも」

とりあえず言われるまま、ヴォルトの周りに集まる。

そして、ヴォルトが力を溜始めて、少しして、

バチィイ！

と大量の電気があたし達を包み込んだ。

「これは！」

「これでみんなを運ぶ！」

そういつてヴォルトは猛スピードで飛行を始め、あたし達はそのま
ま洞窟に突入していく。

中には作業をしている人が居て、その人の話を聞くと何か毒のよう
な者が溢れているそうで、その正体は障気と分かり、封印が破れた
ことで溢れているらしい。

シルフの結界で障気を防いでもらって、あたし達は下に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8086w/>

転生者は同性愛者

2011年10月13日08時11分発行